

兵庫県姫路市所在

飾東 2 号 墳

——山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X——

平成 7 年度

兵庫県教育委員会

兵庫県姫路市所在

しき とう
飾 東 2 号 墳

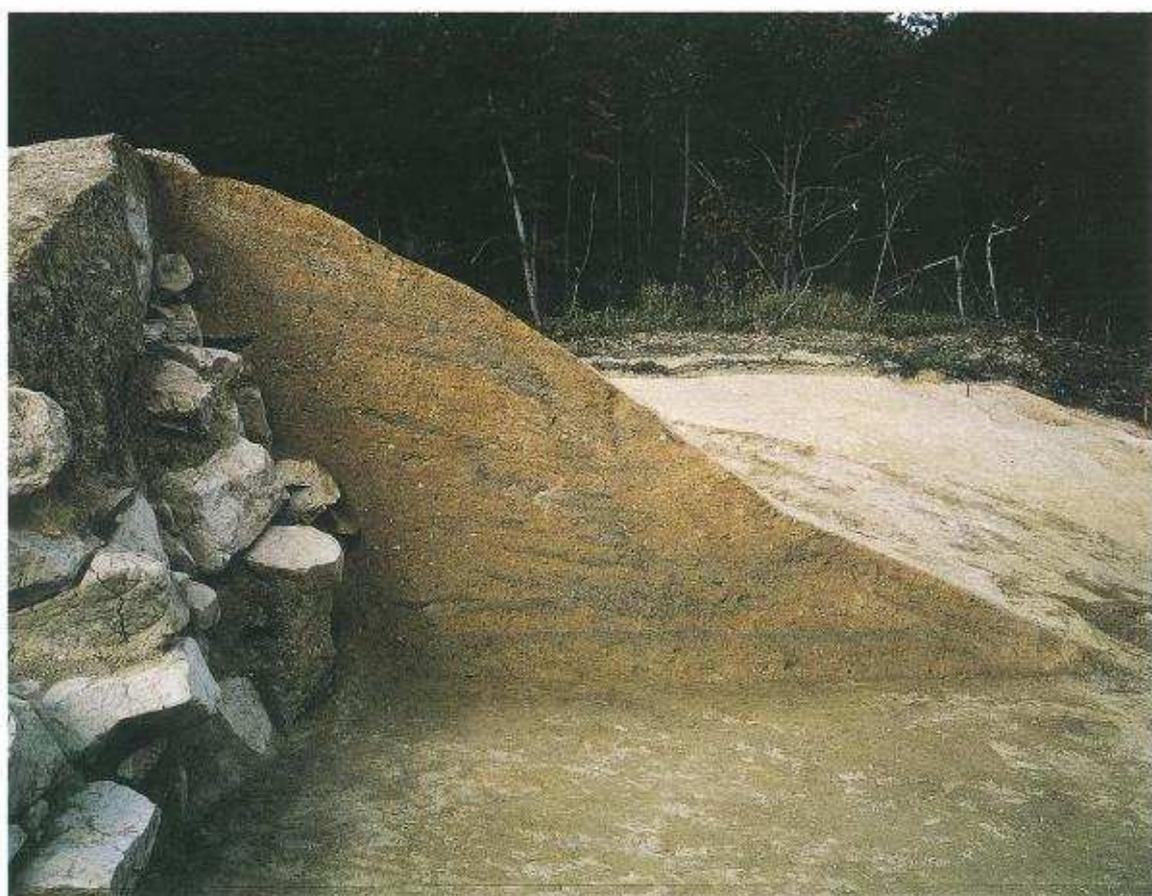
—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第XX冊—

平成7年度

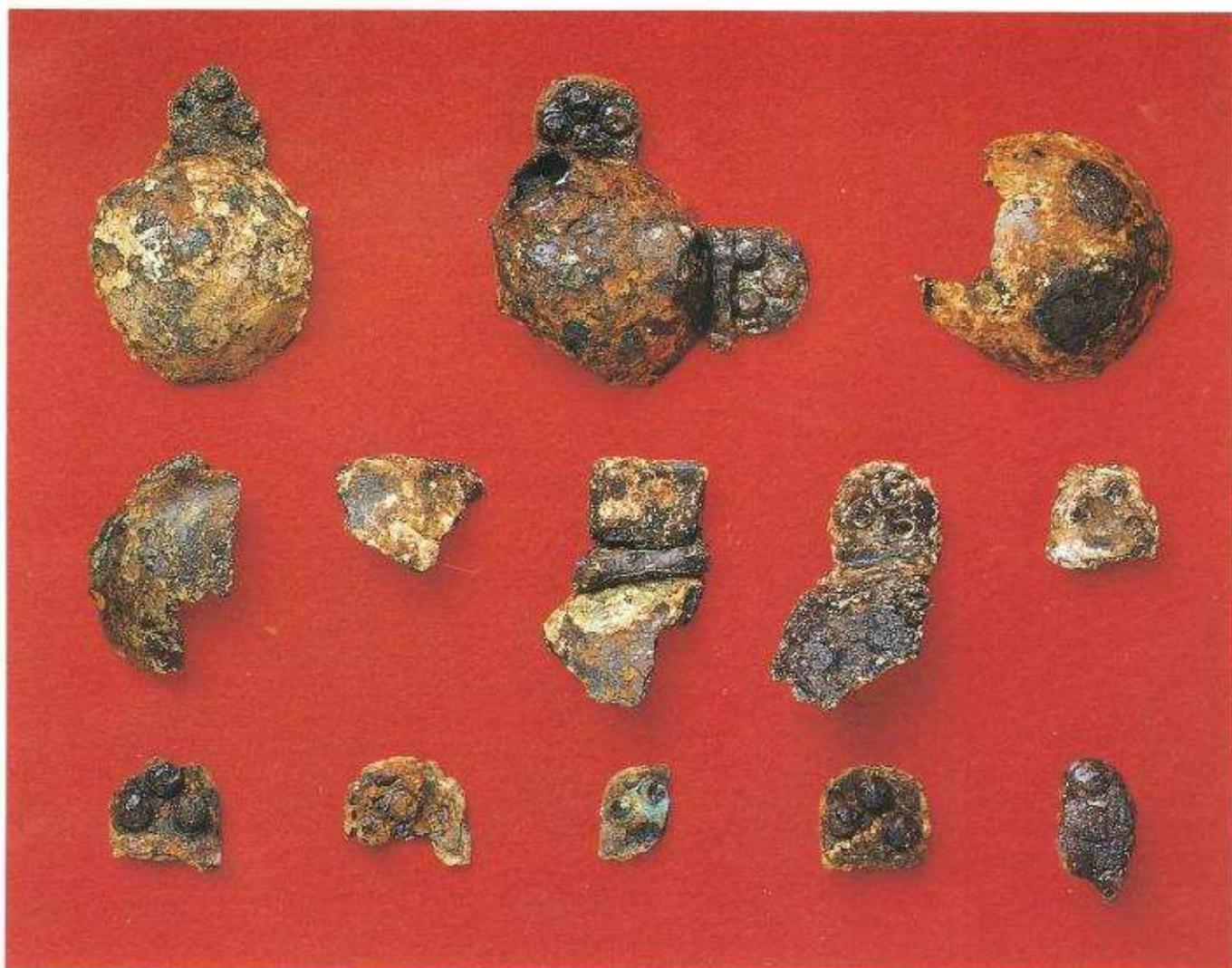
兵庫県教育委員会



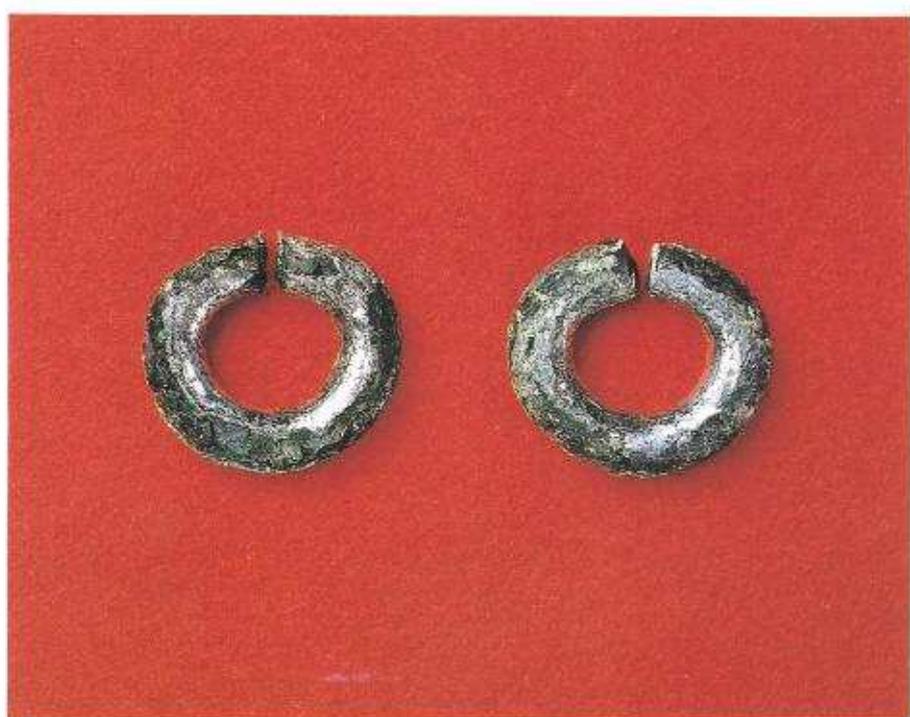
飾東2号墳 全景（南から）



飾東2号墳 墳丘断面（南から）

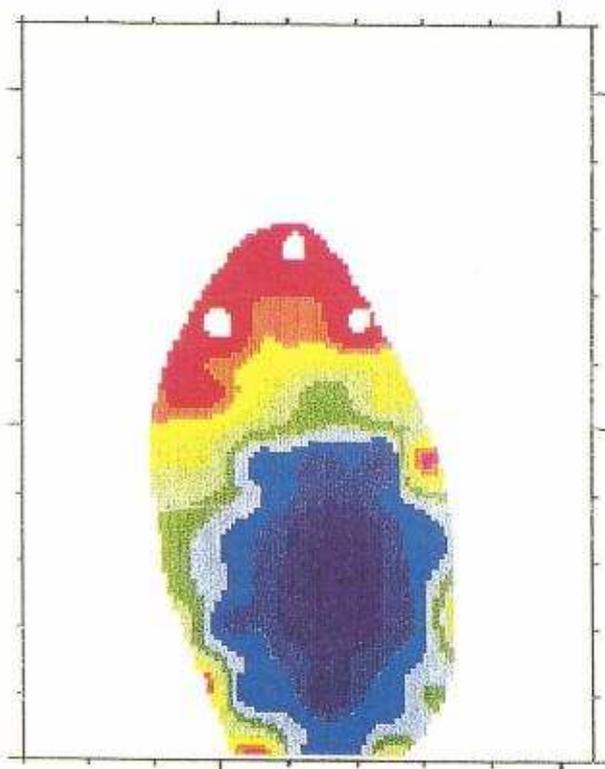


飾東 2 号墳出土 馬具（辻金具・雲珠）

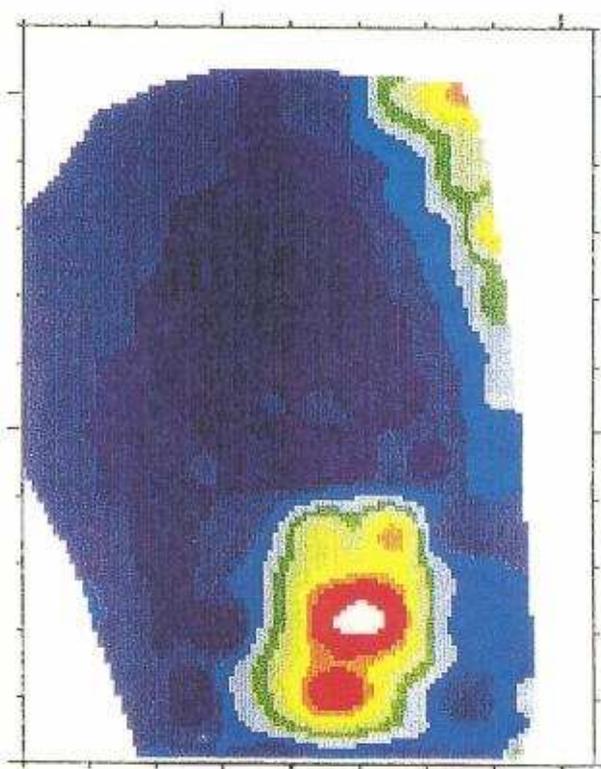


飾東 2 号墳出土耳環

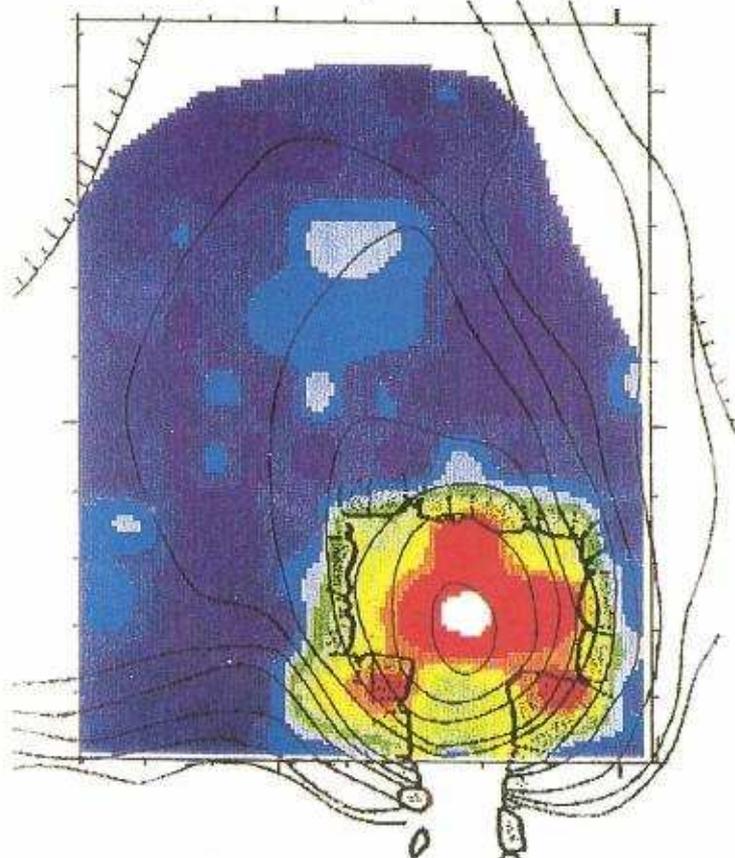
depth slice (0~50cm)



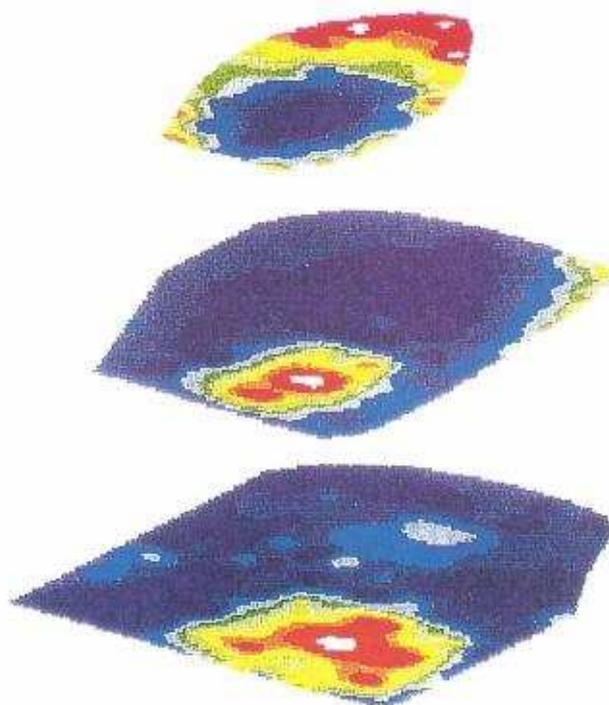
depth slice (50~100cm)



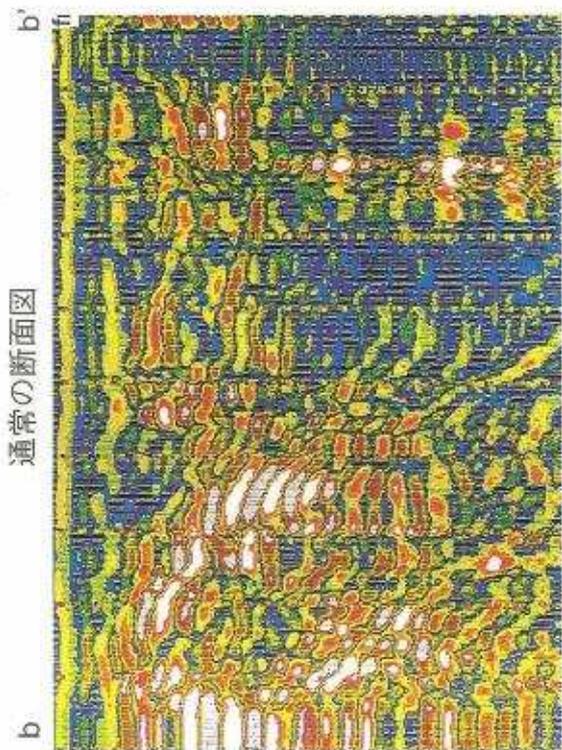
depth slice (100~150cm)



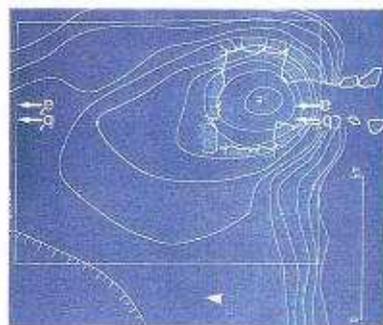
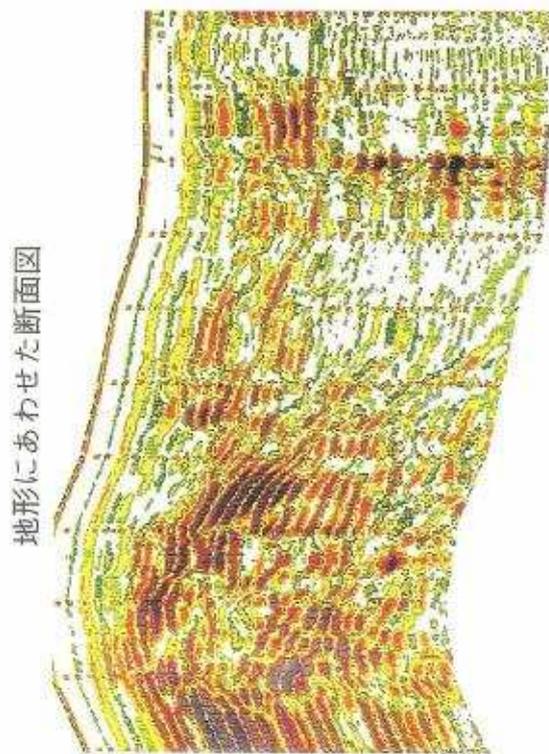
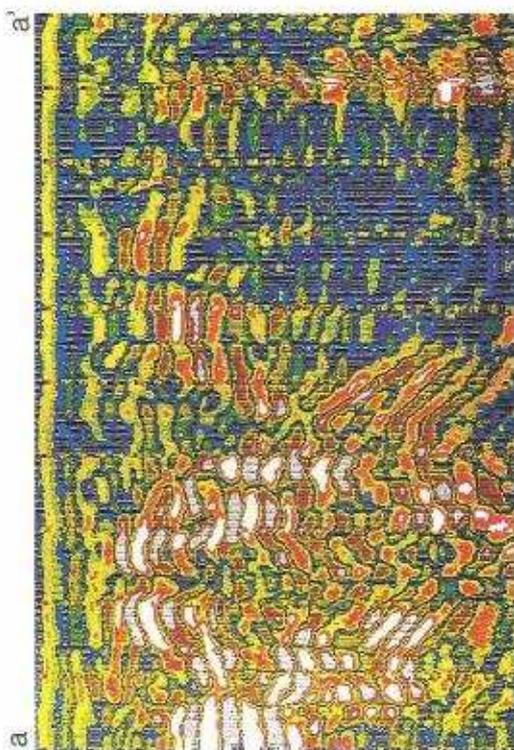
3-D level-plane-depth-slices
(0-50: 50-100: 100-150cm)



飾東1号墳 地形補正を施した「平面」図



地形補正



(300MHz・Antenna)

飾東1号墳 レーダー「断面」図

例 言

1. 本書は、兵庫県姫路市飾東町豊国字桑原山1156の36、1156の37に所在する飾東2号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山陽自動車道（姫路～備前）建設工事に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は平成元年度に事前の測量調査を実施し、全面調査を同年10月5日～12月20日の期間、実施した。全面調査の調査面積は1184㎡、遺跡調査番号は910080である。
4. 全面調査の担当者は主査 森内秀造・技術職員 山上雅弘・多賀茂治である。
5. 本書に掲載した遺跡分布図と位置図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「姫路南部・姫路北部・笠原・加古川」を使用している。
6. 本書に示した方位は国土座標第Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾海水準（T.P.）を使用した。方位は座標北を示す。
7. 本書の執筆分担は目次に記したとおりである。
8. 出土した遺物については奈良教育大学 三辻利一教授によって胎土分析を行って頂き、分析結果を掲載させていただいた。
9. 飾東1号墳の地中レーダ探査には、奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター発掘技術研究室長 西村康氏の現地指導のもと、マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島研究室 副所長ディン・グットマン氏、石川県中島町町史編纂室 飛田耕児氏、同 下出豊次氏の各氏に探査作業を依頼した。また、原稿はグットマン氏による資料解析を西村氏に御執筆いただいた。
10. 本書の遺物の番号は土器にP、金属製品にMを付し、挿図及び図版番号を統一している。なお、挿図の遺物実測図のスケールは基本的に1/4とし、その他については本文に記した。
11. 本報告にかかる遺物・写真などの資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）及び、魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。
12. 本書の編集は中筋貴美子の補助を得て、山上雅弘が担当した。
13. 整理作業については第1章第2節に後述した。
14. 本書の執筆にあたっては下記の方々にご教示・ご指導を頂きました。末筆ながら記して感謝致します。（敬称略）
松本正信・加藤史郎・山本博利・秋枝 芳・大谷輝彦・多田暢久・岸本道昭・山崎 信一の各氏。

目 次

目 次

第1章 発掘調査の経過	山上 雅弘	1
第1節 発掘調査の経緯		1
第2節 整理作業の経緯		2
第2章 周辺の遺跡	山上	3
第1節 遺跡の位置		3
第2節 遺跡の歴史的環境		3
第3章 調査の成果	山上	7
第1節 遺跡の立地		7
第2節 遺構の調査		7
第3節 構 築		21
第4章 出土遺物	多賀 茂治	25
第1節 土 器		25
第2節 金属製品		32
第3節 遺物の検討		37
第5章 まとめ	多賀	45
付 載		
飾東1号墳	大村 敬通・仁尾 一人	51
飾東1号墳の地中レーダ探査結果	西村 康	61
飾東1号墳出土須恵器の産地について	三辻 利一・古屋 光晴	64

挿入図目次

第1図	塩崎1号窯表採資料	4
第2図	周辺の主要遺跡 (S = 1/25000)	5
第3図	古墳の正面観	7
第4図	飾東1・2号墳調査前の地形測量図 (S = 1/300)	8
第5図	調査後の地形測量図 (S = 1/200)	9
第6図	周濠断面図 (縦 S = 1/80、横 S = 1/100)	10
第7図	地区割り図	11
第8図	石室断面及び土器出土状況 (S = 1/80)	12
第9図	石室天井見上げ図 (S = 1/40)	14
第10図	天井石上面からの俯瞰図 (S = 1/50)	15
第11図	右側壁実測図 (S = 1/40)	16
第12図	石室実測図 (S = 1/40)	17
第13図	墳丘断面図 (S = 1/50)	19
第14図	掘方及び基底石据え付け状況 (S = 1/50)	22
第15図	床面断ち割りトレンチ (S = 1/200)	24
第16図	出土土器(1)	27
第17図	出土土器(2)	29
第18図	出土土器(3)	30
第19図	出土土器(4)	31
第20図	出土土器(5)	31
第21図	出土金属製品(1)	33
第22図	出土金属製品(2)	35
第23図	土器法量計測値凡例	39
第24図	飾東1号墳 墳丘測量図 (S = 1/100)	52
第25図	飾東1号墳 墳丘断面図 (S = 1/50)	53
第26図	飾東1号墳 墳丘現況	55
第27図	飾東1号墳 石室平・断面図 (S = 1/50)	57
第28図	飾東1号墳 出土土器	60
第29図	現場と測定風景	61
第30図	測定範囲	61
第31図	レーダ平面図作成の要領	62
第32図	通常の平面図作成	62
第33図	地形補正による平面図	62
第34図	Rb-Sr 分布図	66
第35図	K-Ca 分布図	66
第36図	Na 因子の比較	66
第37図	Fe 因子の比較	66

表目次

表1	周辺の主要遺跡	6
表2～6	土器観察表	40～44
表7	胎土分析表	65

巻頭図版目次

- 巻首図版1 飾東2号墳
巻首図版2 飾東2号墳 出土遺物
巻首図版3 飾東1号墳 地形補正を施した「平面」図
巻首図版4 飾東1号墳 レーダ「断面」図

図版目次

- 図版1 飾東古墳群遠景
図版2 飾東2号墳全景
図版3 飾東2号墳調査前の風景
図版4 飾東2号墳調査の工程(1)
図版5 飾東2号墳調査の工程(2)
図版6 飾東2号墳完掘状況(1)
図版7 飾東2号墳完掘状況(2)
図版8 飾東2号墳石室内部の状況(1)
図版9 飾東2号墳石室内部の状況(2)
図版10 飾東2号墳床面検出状況(1)
図版11 飾東2号墳床面検出状況(2)
図版12 飾東2号墳前庭部付近及び墳丘周囲検出状況
図版13 飾東2号墳墳丘断ち割り状況
図版14 飾東2号墳墳丘断面
図版15 飾東2号墳石室露出状況
図版16 飾東2号墳石室解体状況
図版17 飾東2号墳石室掘方及び床面断ち割り状況
図版18 飾東2号墳石室解体作業
図版19 飾東2号墳基底石据え付け状況
図版20 飾東2号墳発掘調査風景
図版21 飾東2号墳土器(1)
図版22 飾東2号墳土器(2)
図版23 飾東2号墳土器(3)
図版24 飾東2号墳土器(4)
図版25 飾東2号墳土器(5)
図版26 飾東2号墳土器(6)
図版27 飾東2号墳土器(7)
図版28 飾東2号墳須恵器蓋杯(1)
図版29 飾東2号墳須恵器蓋杯(2)
図版30 飾東2号墳金属製品(1)
図版31 飾東2号墳金属製品(2)
図版32 飾東1号墳現況
図版33 飾東1号トレンチ1
図版34 飾東1号トレンチ2
図版35 飾東1号墳石室および土器
図版36 飾東2号墳石室石材



飾東 2 号墳の位置

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

1. 経緯

飾東古墳群はT字形の特異な形態を持つ1号墳の存在によって、広く知られている著名な古墳群である。近年、この古墳群内を山陽自動車道が通過する計画が持ち上がり、昭和60年に日本道路公団大阪建設局から兵庫県教育委員会に取扱いについての打診が行われた。その後、両者間で協議が重ねられたが、古墳群の重要性から県文化財審議委員会の答申を仰いだ。

その結果、2号墳については、ルートの変更及び工法による変更は不可能という結論となった。このため、現状保存を諦め記録保存を前提とする発掘調査を実施する方針となった。

なお、同様に1号墳についても古墳の規模を確認する調査が行われ、協議を重ねた結果、現状保存が計られることとなった。但し、墳丘北背後の一部については側道確保のために一部について開発が必要となった。このため工事に先立って全面調査が行われる予定である。ただし、本報告書作成中（平成7年度）にはいまだ調査は行われていない。

2号墳の調査は平成3年5月に2号墳周囲（1号墳についても実施）の測量調査を行い、全面調査に際して必要な基準杭の設置も並行して実施した。この測量によって調査前の地形測量及び設計書作成のための資料作成の基礎とした。またこの際、上記道路公団によって周辺の樹木伐採も行われた。

これらの経過を経た後、平成3年10月5日～12月20日の期間に渡って全面調査が実施された。調査面積は1184㎡である。

2. 全面調査

全面調査は、まず墳丘および墳丘周囲の表土層を人力によって除去し、平行して石室内の調査を行った。そして、調査の各段階で必要に応じて写真撮影及び実測を行った。さらに、墳丘表土および古墳周囲の調査が完了した時点で、ラジコンヘリによる空中撮影を実施した。

その後、石室の天井石および側壁石の大きさと裏込めの状態を確認するため、調査トレンチを3本設定し人力による掘削を行った。この確認調査の結果に基づき、墳丘の断ち割りを機械によって実施した。

石室については、墳丘の盛土を全て除去し、全面露出させた。写真撮影と実測後、大型クレーンによって石材を順次除去し、石室の解体を行った。なお、この作業の実施にあたっては直上に高圧線が存在するため、クレーン車のアームを45°以上に上げられないという制約が生じ作業は困難を極めた。また、高圧電流下での作業ということで天井石の除去作業時には関西電力の立会いのもとで作業を行った。

調査後、石室材は調査地西側の山陽自動車道の法尻の片隅に長く放置されているが、平成8年3月末現在もそのまま捨て置かれている。

なお、現地説明会を平成3年11月4日に開催し、古墳の石室内などを一般の人々に見学していただいた。当日は100名以上の参加者があり盛況となった。埋蔵文化財に対する現地の人びとの関心の高さが窺われる。また、現地説明に際してマスコミ等に資料を提供したところ、関心が高く新聞紙上でも大きく取り扱われた。本墳の文化財としての重要性が専門家だけではなく、一般の人々の間にも理解されていたということの現れであろう。

3. 発掘調査の体制

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
現場担当者 主 査 森内 秀造
技術職員 山上 雅弘
同 上 多賀 茂治

補助員 高島千恵子
田中 勝

第2節 整理作業の経緯

出土遺物は、28ℓコンテナに7箱分の土器と68点の鉄器及び鉄製品（未実測を含む）があった。これらの遺物の整理については発掘調査に併行して、現地事務所で土器の洗浄作業を開始することから始めている。

鉄器及び鉄製品については平成6年度に保存処理を実施した。土器のネーミング・接合については平成7年度に行っている。また、土器・鉄器とも実測・写真撮影・トレースについては平成7年度に実施した。

1. 整理の体制

職員
主 査 森内 秀造
技術職員 山上 雅弘
同 多賀 茂治
同 仁尾 一人

非常勤嘱託

実測・レイアウト 主任技術員 中筋貴美子
・トレース 石田 裕子
庄山 郁子
接合・復元 香川フジ子・早川亜紀子・蓬萊 洋子・
島村 順子・中西 睦子・本窪田英子

第2章 周辺の遺跡

第1節 遺跡の位置

飾東古墳群の場所は兵庫県西部に所在する姫路市の北東部にあたる。旧国名では播磨国にあたり、古墳群周辺は飾東郡に含まれる。古墳群の南には市川西岸に広がる御国野平野が位置する。

飾東はこの平野の東端を南流する天川をさかのぼった場所に位置し、御国野平野の北端を限るように聳える城山（標高193m）背後の谷底付近にあたる。

天川はこの城山の東側付近——古墳群の東付近——から細い谷地形を流れ、遺跡の東側から御国野平野にかけて扇状地地形を形成する。

第2節 遺跡の歴史的環境

姫路東部の市川東岸一帯は御国野平野と呼ばれ、多くの重要な遺跡が立地している。古墳だけをとらえてみても壇上山古墳・山ノ腰古墳・宮山古墳など播磨を代表する古墳が多く分布している。

これに対して、天川上流に位置する飾東古墳群の周辺にはあまり多くの遺跡が知られていない。周辺が平野から谷部に入り込む関係もあると思われるが、飾東古墳群を除くと、対岸に塩崎窯跡⁽¹⁾が知られるのみである。塩崎窯跡については須恵器が表採された奈良時代前後の窯跡であるが、詳細はあまり明らかにされていない。（第2図北側ドットに1号窯が発見され、南側ドットにも須恵器を採集できる散布地が見ついている。）

飾東古墳群で現在存在が確かめられる古墳は3基である。一方、葛野豊⁽²⁾による4号墳が存在したという指摘がある他、「全国遺跡地図」⁽³⁾では城山南部に点在する古墳も飾東古墳群に含めて紹介しているなど、古墳群の範囲については混乱があるようである。しかし、「全国遺跡地図」の指摘する城山南部の古墳については「播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」⁽⁴⁾によって、その後別の名称が与えられている。さらに、4号墳についても現在その存在を明らかにできない。従って、本書では飾東古墳群の範囲を飾東1～3号墳の立地する周辺のみとし、1～3号墳からなる古墳群として紹介することとする。

飾東古墳群はいずれも横穴式石室を持つ古墳で、3号墳以外は天井石まで完存している。3号墳は天井石が落下あるいは取り去られているが、周囲の状況から石室規模は大型のものと推測される。時期は2号墳と同じかやや下るものであろう。

飾東古墳群の南、御国野平野北端にはいくつかの古墳が知られている。トウトヅカ古墳・宝塚古墳・トンノク谷古墳・庄北古墳・石塚山古墳・小丸山古墳群などが分布するが、多くが横穴式石室を持つ円墳である。この内、庄北古墳⁽⁴⁾は範囲確認のための調査が行われている。同墳は後期古墳で、直径16m前後の規模をもつ円墳である。主体部は横穴式石室であるが開墾などによってすでに天井石などは取り除かれている。なお、本墳は調査後保存されている。

飾東古墳群の北東側には著名な前期古墳の横山古墳があり、付近には播但連絡有料自動車道建設に際して調査が行われた三方古墳や池ノ下1・2号墳が位置する。しかしこれらの古墳の立地は御国野平野には向いておらず、北側の平野周辺に築造者が求められる。

同じ北東側周辺の調査としては、播但連絡有料自動車道建設に伴って調査が行われた黒岩山遺跡の調

査がある。この遺跡は2地区に渡って調査が行われたがA区では弥生時代中期の竪穴住居跡が、B区では古墳時代前期の箱式石棺や集石遺構などが見つかった。

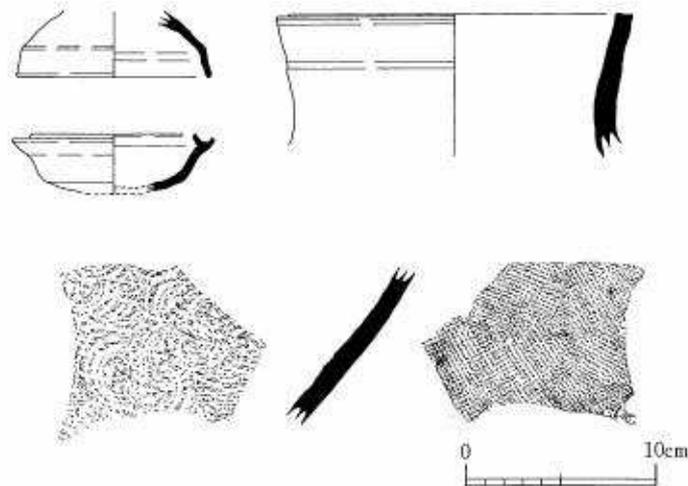
横山丘陵の東側に立地する三方古墳は6世紀後半の円墳である。墳丘規模は直径12mを測り、石室は無袖の横穴式石室である。やはり、播但連絡有料自動車道によって昭和53年に調査が行われている。

古代遺跡では上原田遺跡・豊国廃寺・小川廃寺などが知られている。また、飾東古墳群の南側の山には中世山城遺構である庄山城が立地している。

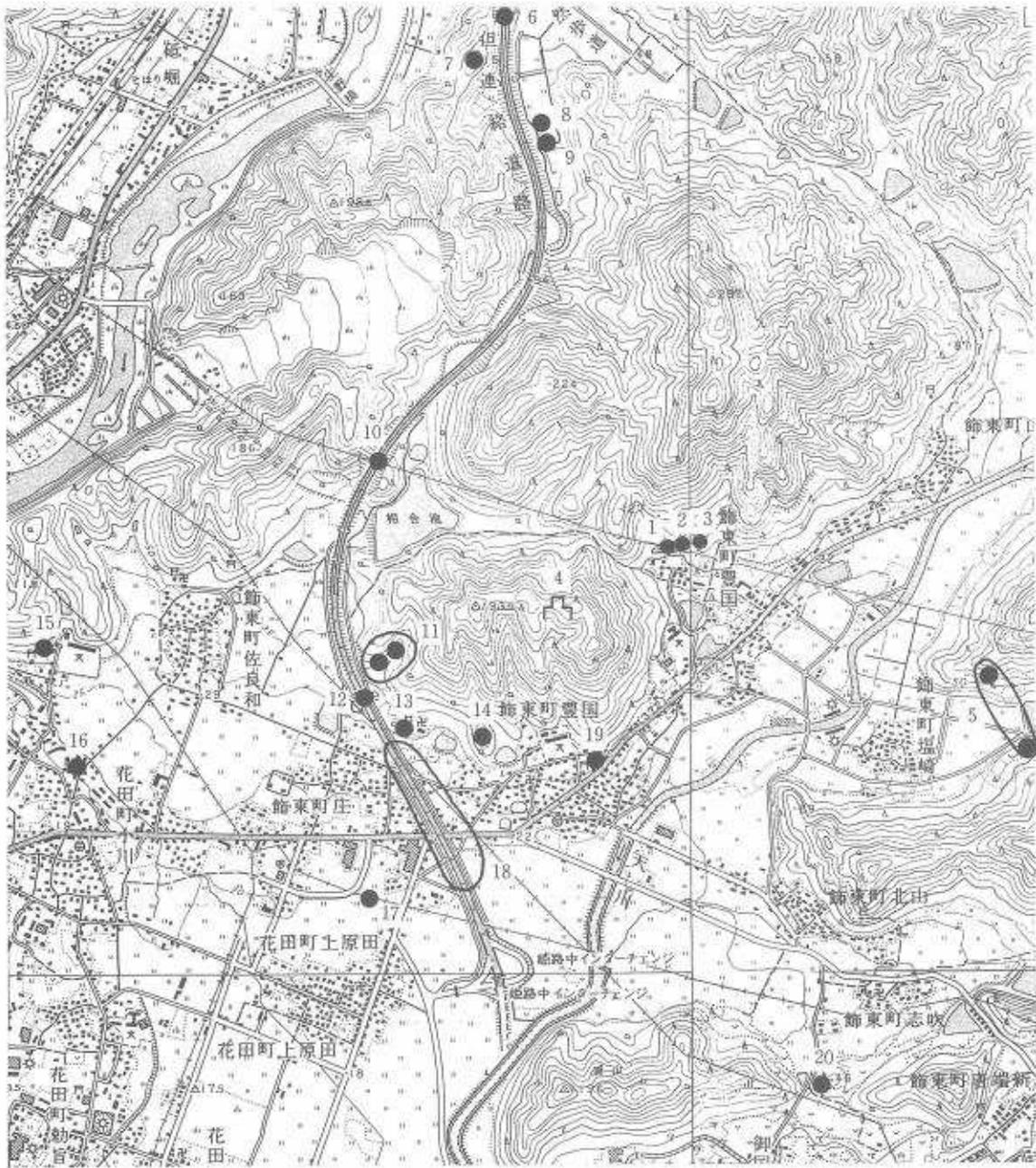
上原田遺跡についても播但連絡有料自動車道によって調査が実施され、奈良時代～平安時代前期の遺構が検出され地方官衙的な性格を有する遺跡といわれている。

註

1. 森内秀造氏より教示を得た。
2. 葛野 豊「兵庫県飾東1号墳」『古代学研究34号』1963年刊
3. 「全国遺跡地図 兵庫県」文化庁 1982年刊
4. 「播但連絡有料自動車道路建設にかかる埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」兵庫県教育委員会1980年刊
調査は兵庫県教育委員会が実施した。



第1図 塩崎1号窯表採資料



第2図 周辺の主要遺跡 (S=1/25000)

表1 周辺の主要遺跡

	遺跡名	所在地		遺跡名	所在地
1	飾東2号墳	飾東町豊国	11	トンノク谷古墳群	飾東町庄
2	飾東1号墳	飾東町豊国	12	庄北古墳	飾東町庄
3	飾東3号墳	飾東町豊国	13	宝塚古墳	飾東町庄
4	庄山城	飾東町庄山	14	トウトヅカ古墳	飾東町庄
5	塩崎窯跡群	飾東町塩崎	15	石塚山古墳	花田町小川
6	三方古墳	豊富町御陰	16	小川廃寺	花田町小川
7	横山古墳群	豊富町曾坂	17	上原田廃寺	花田町上原田
8	池ノ下1号墳	豊富町御陰池ノ下	18	上原田遺跡	花田町上原田
9	池ノ下2号墳	豊富町御陰池ノ下	19	豊国廃寺	飾東町豊国
10	黒岩山遺跡	花田町佐良和	20	小丸山古墳	飾東町志吹

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の立地

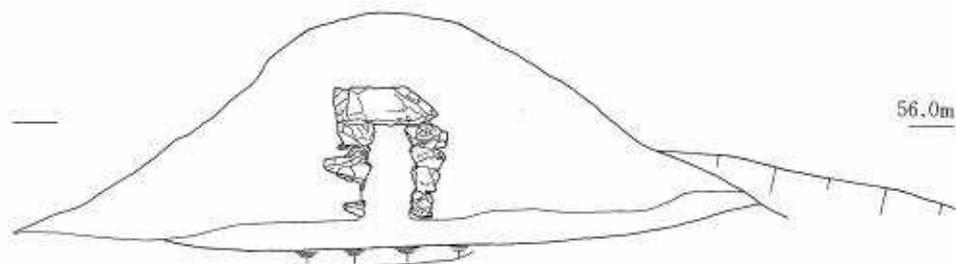
飾東古墳群は豊国の集落の北背後に点在する古墳群で、このうちの飾東2号墳（以下2号墳）は西端に位置する円墳である。古墳群周辺は西から東方向に開析される谷地形となっており、この谷の開口部は林田川西岸の沖積地に達している。背後には標高290m前後の山稜が高く聳え、切り立った斜面が古墳群に向かってせまっている。しかし、古墳群は斜面の傾斜変換点より南に立地しており、周囲は狭いながら緩傾斜地となっている。一方、豊国の集落側から望むと、古墳群は仰ぎ見る高所にあつて立地としては最適である。2号墳は谷の北斜面、傾斜変換点寄りにあつて、山稜から伸びる尾根に立地している。この尾根は古墳の構築されるあたりで北東から真南方向に向きを変えて集落方向へと下っているが、2号墳付近で尾根幅がやや膨らんでおり、墳丘の立地に都合のよい地形である。尾根の両側は小規模な谷となるが、特に西側は深く開析され、尾根に沿って下っている。一方、東側の谷は浅く開析が小さい。この小谷の鞍部を利用して2号墳の北東側には谷をせき止めて溜池が造られている。この溜池の堰堤の南東隅に取り込まれるのが飾東1号墳である。1号墳は2号墳の東側約30mに位置する。

第2節 調査の成果

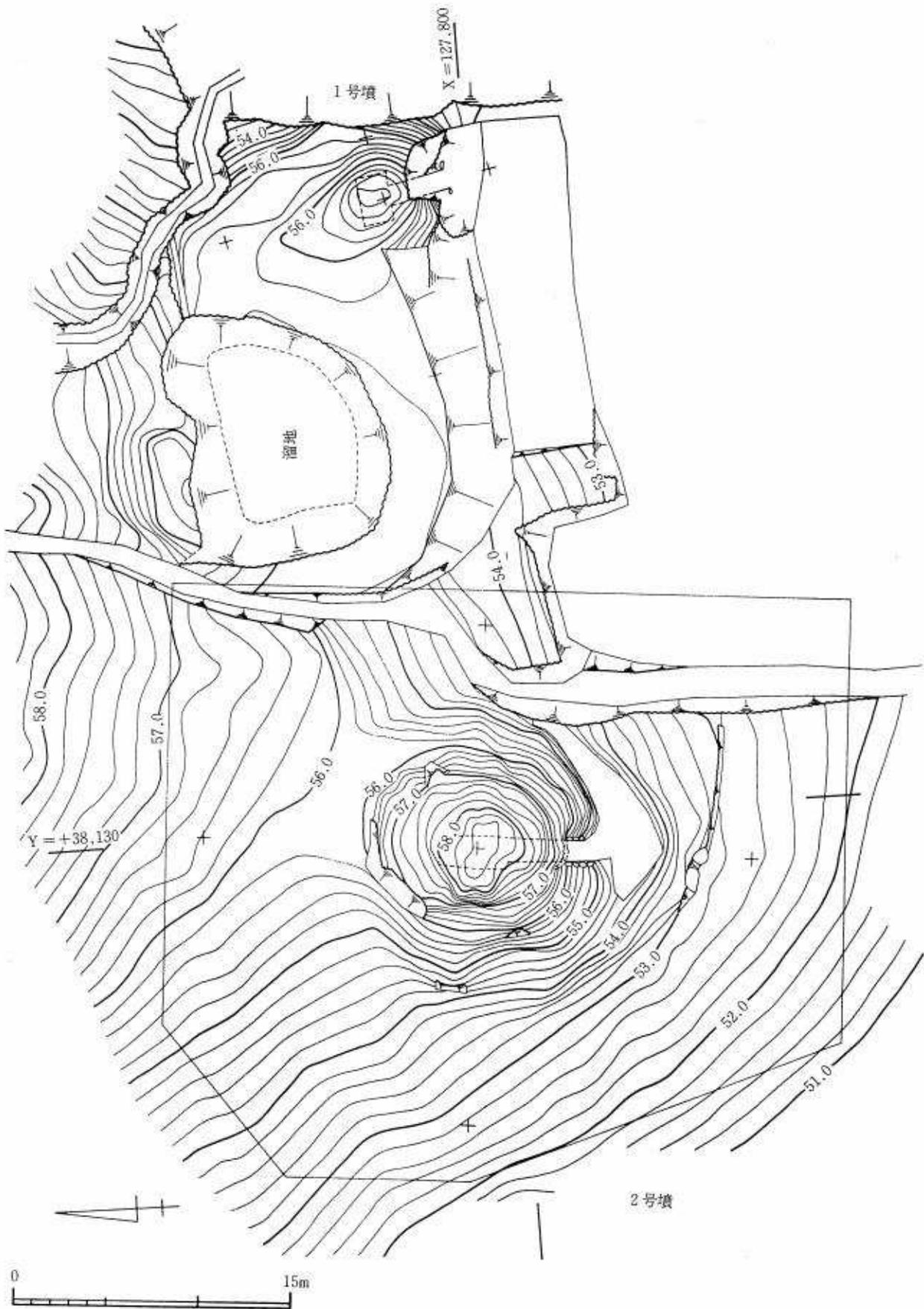
1. 墳丘（第3～5図、図版1～3）

2号墳の墳丘は前述のように、尾根頂部のやや膨らんだ地点に立地する。当墳は軸方向を南北とし、豊国の集落を向いて構築される。墳丘の規模は南北軸が15.5m、東西軸が推定18mである。古墳周囲の高さは墳頂で58.4m前後を測るが、墳頂には天井石が露出するため構築当時はいまま少し封土があつたものと思われる。墳丘裾の高さは南辺中央で53.65m、西辺軸線上で53.3m、東辺軸線上で53.9m、北辺軸線上で55.4mを測り、東辺の高低差が最も大きく比高差5.1mである。

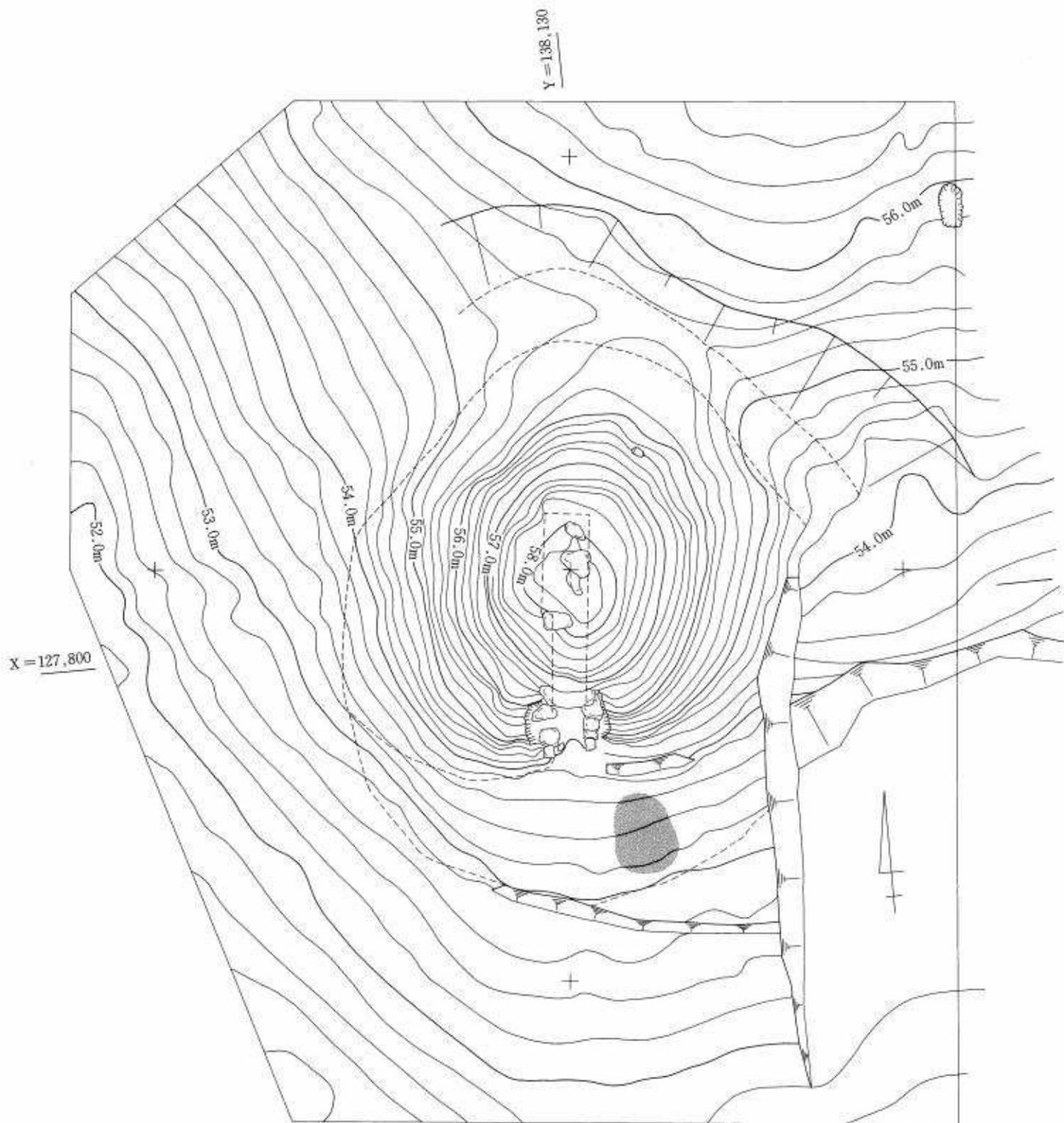
墳丘は北西隅の封土の一部が谷へ流失したり、東辺の裾が削平されるなど、若干の破壊が認められ正確な旧状は一部損なわれているものの、北側がやや尖り気味の楕円形になり、南辺は直線的で幅広く構築していることは疑いがない。従つて、全体として平面形状は卵頭形に近い形状であつたと思われる。南辺が幅広く構築されるのは正面観を整え、前庭部のスペースを確保するためと推測される。



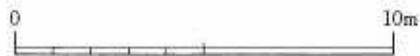
第3図 古墳の正面観



第4図 飾東1・2号墳調査前の地形測量図 (S = 1/300)



※スクリーントーンは土器集中地点



第5図 調査後の地形測量図 (S = 1/200)

墳丘斜面は後世の流失によって若干の凹凸が認められるが、最も大きく流失しているのは北辺と西辺である。特に、北辺では周濠付近の土砂が流失し墳丘基盤の表土面が露出して、封土が完全に失われていた。このため石室背後の土砂は奥壁石の背後から3m前後しか残っておらず、最上段の奥壁石は露出寸前のところまで封土が流失していた。

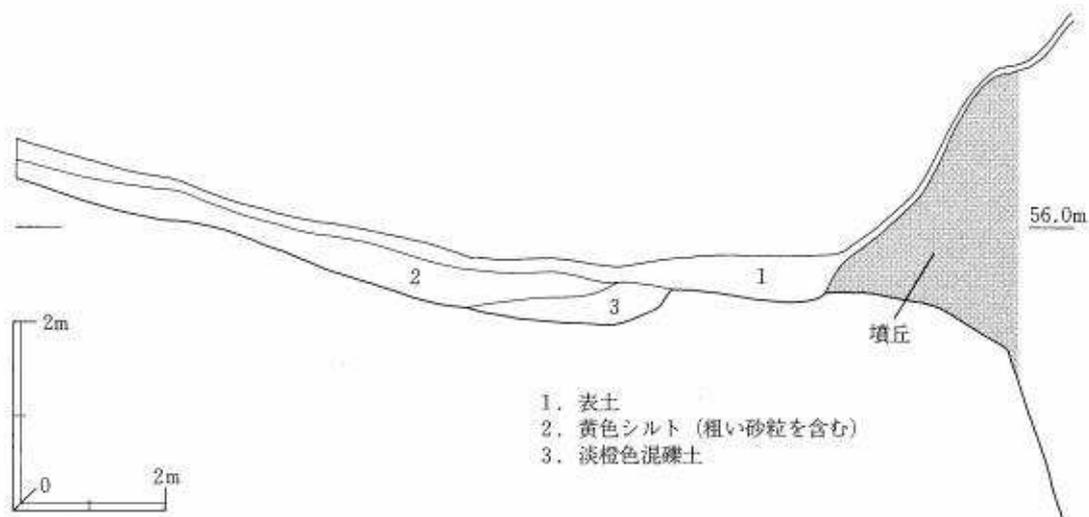
墳丘の前面には50m前後の前庭部が設けられる。但し、前庭部の南前面と東辺については一部が後世の開墾や開発のために破壊されている。このように一部に詳細を欠く部分はあるものの、第8図断面の第7層が旧表土であるため、前庭部は墳丘裾近くがほぼ平坦になり、前方でゆるやかに傾斜する地形で、末端は周囲の斜面と明確な境をもたないと推測される。そして、ゆるやかな傾斜は南辺の正面観や、墳丘の高低差などの一連の地形との効果をねらったのことで考えられる。

前庭部の土層堆積には造成時のものと、後世の墳丘流失土、石室内からの排出土、近世の開墾による流入土などが含まれる。第8図断面の7層までは古墳当時の造成と考えられるが、上層の土砂については締まりがなく、後世の堆積であることは明らかである。

前庭部から出土した土器は①大半が羨門の前方に掻きだされた土砂に混じって出土したものと、②前庭部東区（第5図スクリーンゾーン）からの2箇所に集中する。前庭部の土砂の堆積は前述のとおりであるが、①についてはやはり後世の盗掘によって掻き出された土砂に混じったものである。ここには遺物が集中するが細片が多いのが目についた。

また、②については比較的深い場所から出土しており、甕・壺などの個体が多いのが特徴で、古墳使用時の祭祀に伴うものの可能性がある。この他、前庭部の周辺には大小の石材が土砂に混じって出土したが、これらは石室内から供給されたものや、閉塞石が流失したものである。

周濠は調査前の状況では若干の窪みとして観察されたが、調査の結果墳丘の北西側から北辺、そして東辺にかけて馬蹄形にめぐっていることが確認された。但し、全周しておらず背後の尾根続きを中心に掘削され、西側斜面・南側には全く認められない。



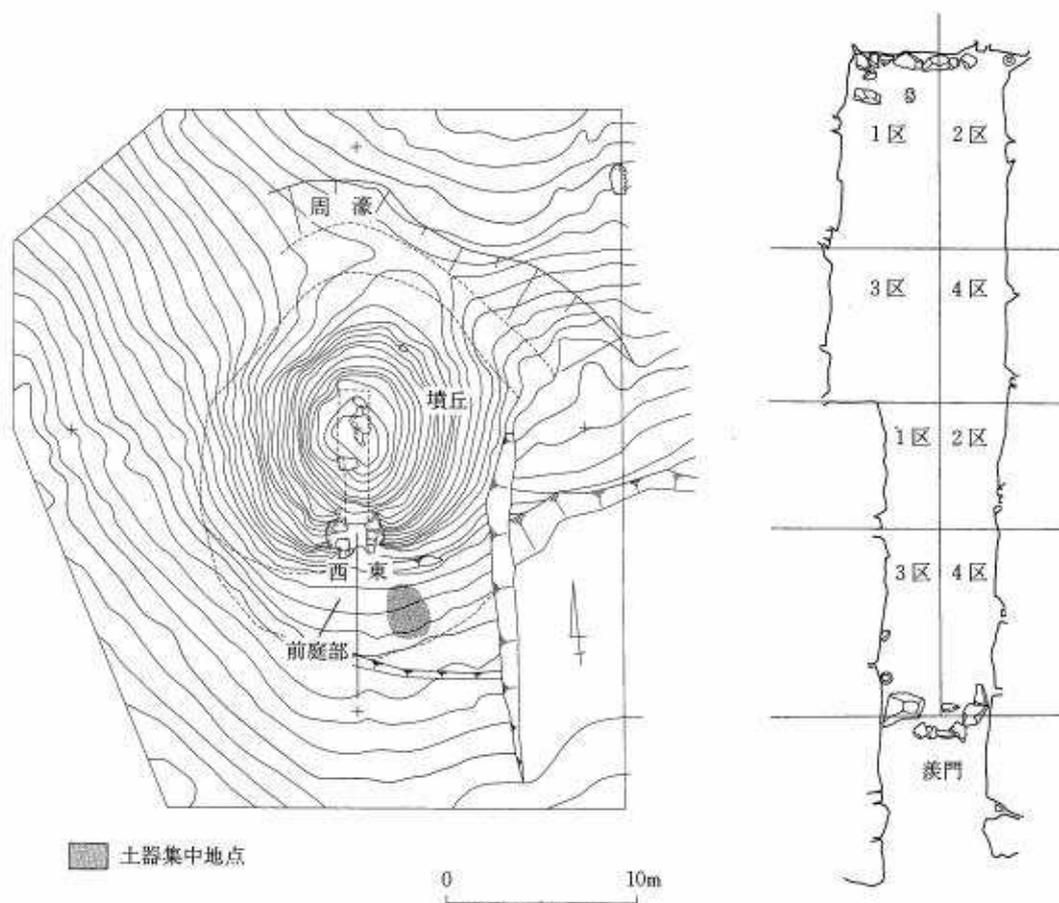
第6図 周濠断面図 (縦S=1/80、横S=1/100)

周濠の検出長は18mである。最も残りの良い部分は北側尾根続きで、この部分で幅5.0m、底幅2.5m、深さ0.4m前後を測る。東辺では幅が広がるが深さは浅くなっている。東辺の端で幅6.0m、底幅2.0m、深さ0.2~0.3m前後を測る。周濠の埋土は地山土が大半を占めており、尾根背後からと墳丘の流失土によって埋没している。

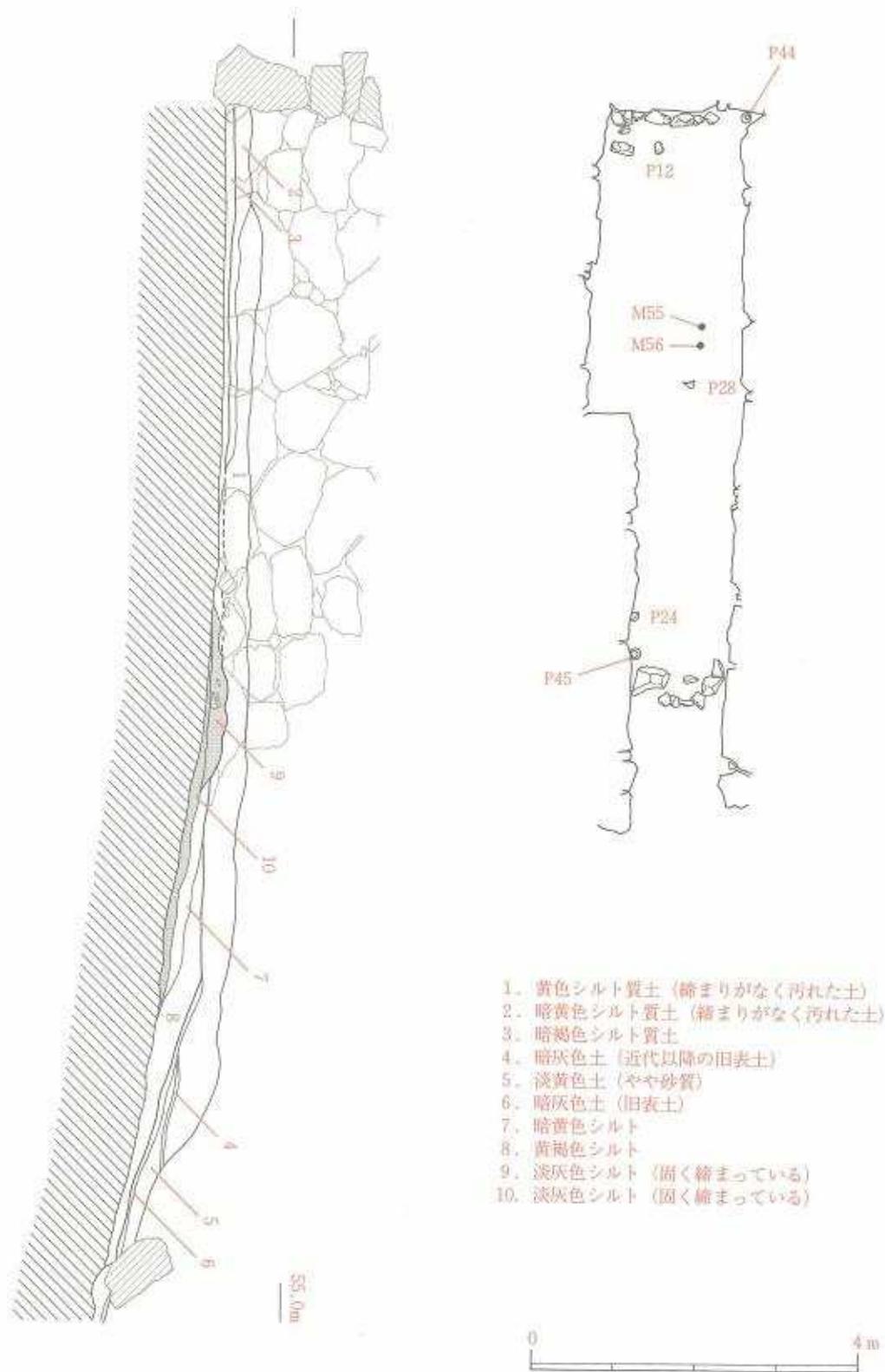
2. 主体部 (第8~12図、図版8~12)

2号墳の主体部は右片袖式(奥壁を基準)の横穴式石室で、墳丘南辺の中央に開口している。石室の主軸はN5°30'W(石室の中軸線を基準)を向いており、豊国の集落を見下ろす方向である。石室は大型で規模は全長8.9mを測る。各部については玄室が全長3.7m、高さ3.0mを測る。幅については中軸線での床の幅は1.8mを測るが、床の玄室の各部で狭長が認められる。基底部の奥壁側が1.6m、玄門付近が1.9mである。天井の幅は奥壁側の幅が0.9m、玄門付近が0.8mである。また、袖の幅は0.6mを測る。羨道部は全長5.2m、幅は1.1~1.2m前後、高さ2.1m前後をそれぞれ測るもので、玄室より羨道部が1.5mほど長くなる。

石室の遺存状況は、羨門周辺に若干の落石が認められ、羨門及び羨道の石材の一部が失われている。しかし天井石が完存しており、石材には孕みや擦れも認められない。このため石室の状況は比較的良好と判断される。



第7図 地区割り図



第8図 石室断面及び土器出土状況 (S=1/80)

一方、床面については、石室内が長く開口した状態が続いたため、盗掘や様々な理由による侵入が繰り返され遺存状況は良くない。床に堆積した土砂は下層まで締まりがなく、床面に不自然な凹凸が認められており、何度も掘削された状態を示していた。また、玄室や羨道に火を焚いた痕跡が何箇所も点在するが、特に玄門近くの広い範囲では地山層まで掘り下げられ、炭が何層にも渡って堆積していた。これらの土砂や炭層に混じって近現代遺物や未だに炭化していない木材も混じっており、最近まで石室内への侵入が繰り返されたことは確実である。地元の人の聞き取りによれば本墳は大正時代頃から村人が頻繁に出入りしていたという。目的は様々であったが遺物の盗掘も繰り返されたということである。また、1号墳についても同様なことがおこなわれたと聞く。

石室構造 石室は規模の割に幅が狭く、背高になる構造である。側壁は内側に内傾しながら立ち上がるもので、いわゆる“持ち送り”状に積まれている。このため、床面と天井の幅は玄室中ほどで0.8m、天井が短くなる。また、石室の平面プランは左側壁が玄室から羨道まで直線的に構築されるが、右側壁は奥壁から玄室の袖部にかけて開き気味に構築される。

石室の石材は周辺から産出する流紋岩質凝灰岩類⁽¹⁾である。この石材は強度がなく脆いもので、比較的割れ易い性質である。2号墳の石材についてもひび割れが目立ち、解体時に安定を失って床上に落下するものが目立った。もし移築復元などの措置がとられたとしても再構築は不可能であったと思われる。また、既述のように高圧鉄塔の関係で大型重機で天井石を除去したため、石材の一部について重量を計測することができた。それによれば、天井石は奥壁側から第1石目が2.9t、第2石目が5.5t、第3石目が3.8t、第4石目が5.3t、第5石目が3.8tである。側壁石については上段のものが何石か計測できた。その結果、500~800kg前後の石材が多くを占めることがわかっている。

玄室は基本的に側壁・奥壁とも5段積みで構築され、全体的に基底部に大きい石を用いるが、基底石は平石状の大型のものをを用い、幅広い面が確保できる部分を石室内に向けて据えるものが多い。玄室の天井石は3石である。

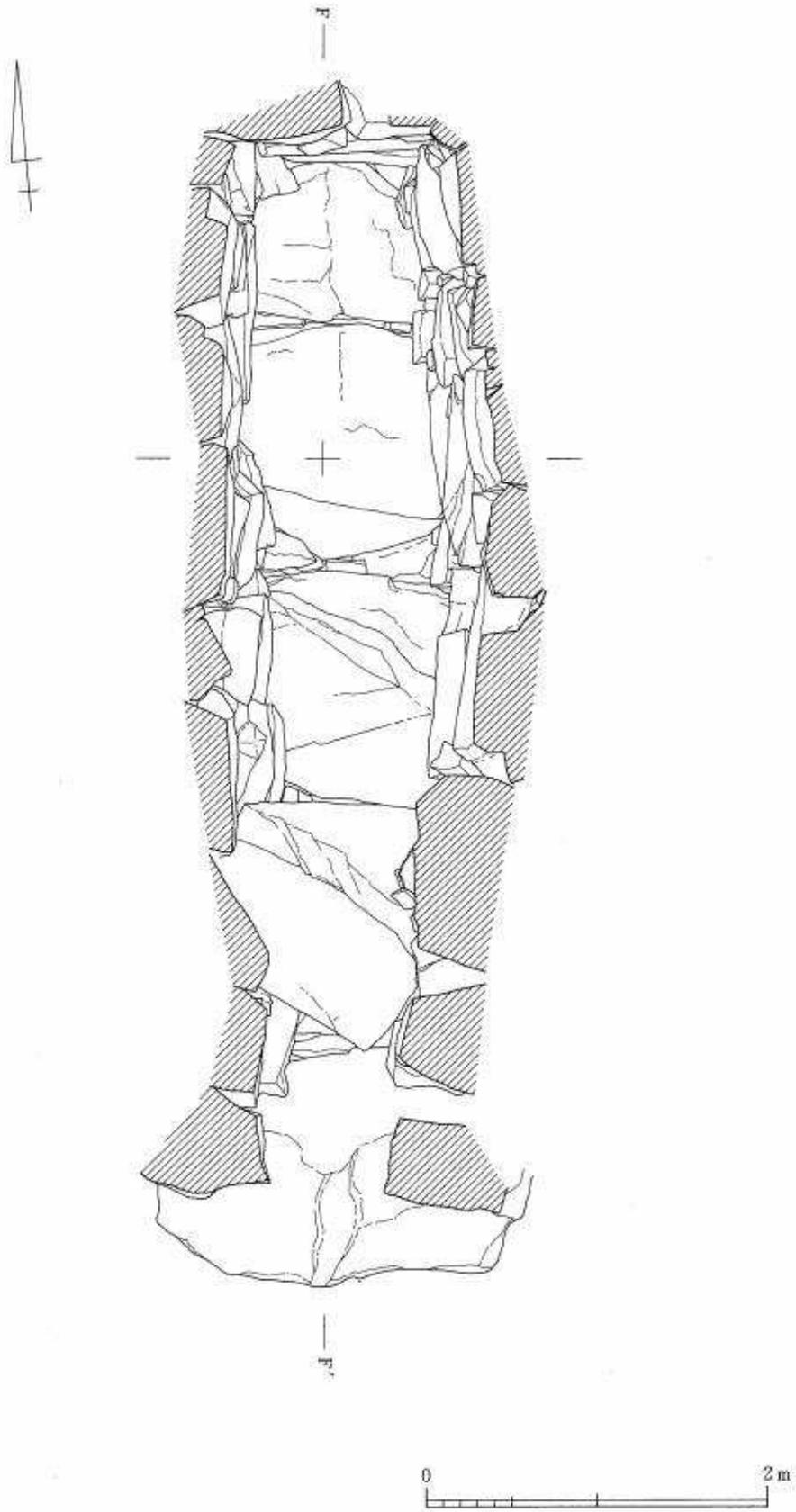
奥壁は基底石が基本的に1石で積み、2・3段目は2石、4・5段目が再び1石で積まれる。石材の規模は側壁石と余り変わらないものを用いる。

側壁は右側壁石が奥壁と玄門石の制約を受けた積み方となっており、横方向には5石を置いている。左側壁石は基底石および2段目が5石を横方向に積むが、見上げ石の制約を受ける3~5段目は石材が若干小型化し、4ないし5石を横方向に積んでいる。そして、右側壁石に比べると玄室と羨道部の間に明確な仕切りは認められない。但し、玄室と羨道部を区切る箇所ではないが、玄室の奥壁から3石目と4石目の間には立目地が通っており構築上の特徴の可能性はある。

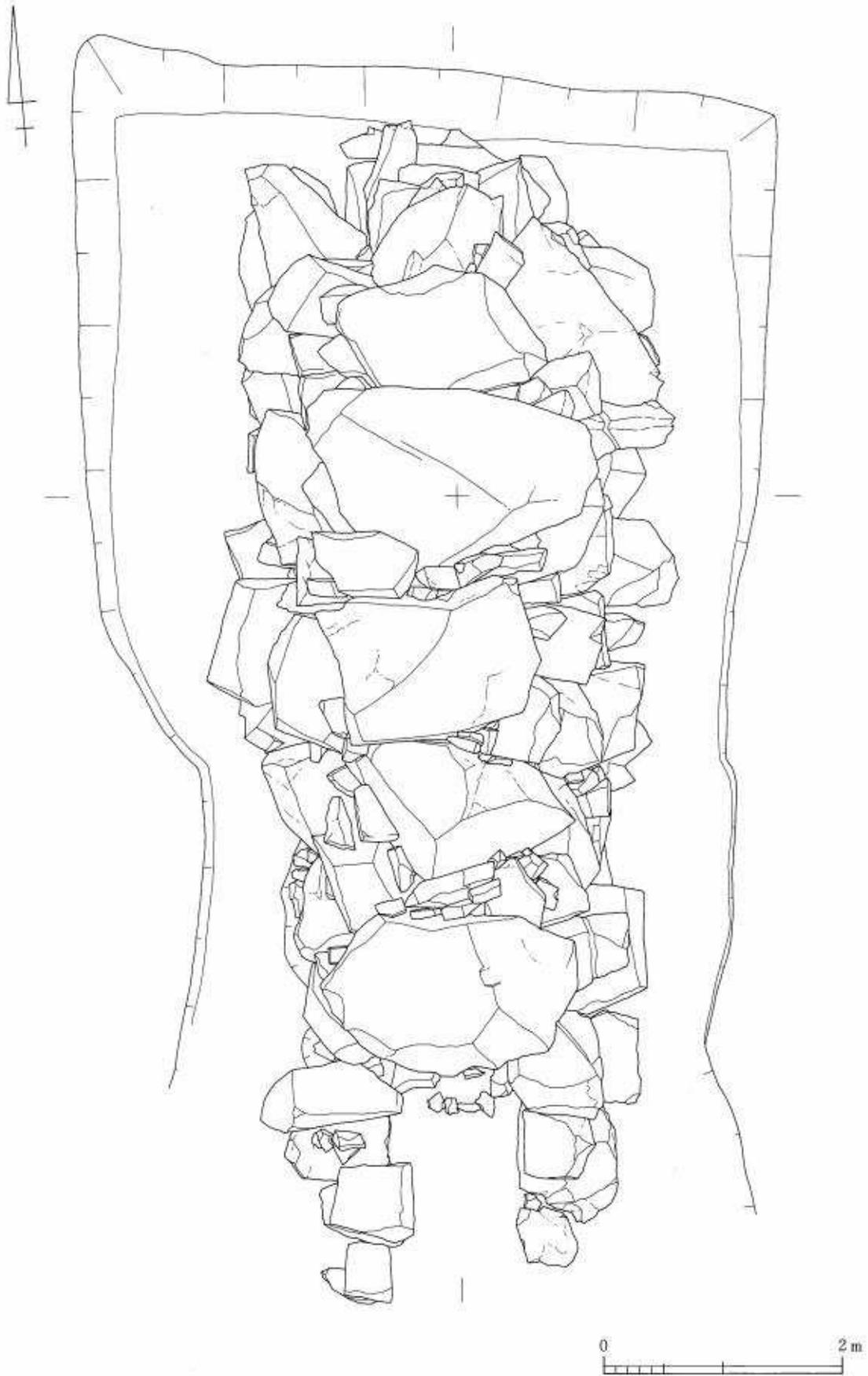
玄門の袖石は直方体に近い大型の石材を縦に置き、羨道と玄室の区切りを際立たせている。左側壁にも大型の石材が置かれるが、上記のように玄門を際立たせる意識は低い。見上げ石は奥壁から4石目の天井石が該当するが、やはり大型の石材が配置されている。

羨道部は左側壁の玄門石部分が2段積み、それ以外は3段積みで構築する。側壁列方向には基底石が両側とも3石、その他の部分では2~3石が並ぶ。そして、天井石は2石が構築される。床面のレベルは玄室とほぼ同じであるが、天井は見上げ石の高低差分の約90cmほど低くなる。側壁の内傾傾向はやや認められるが、玄室ほどではない。

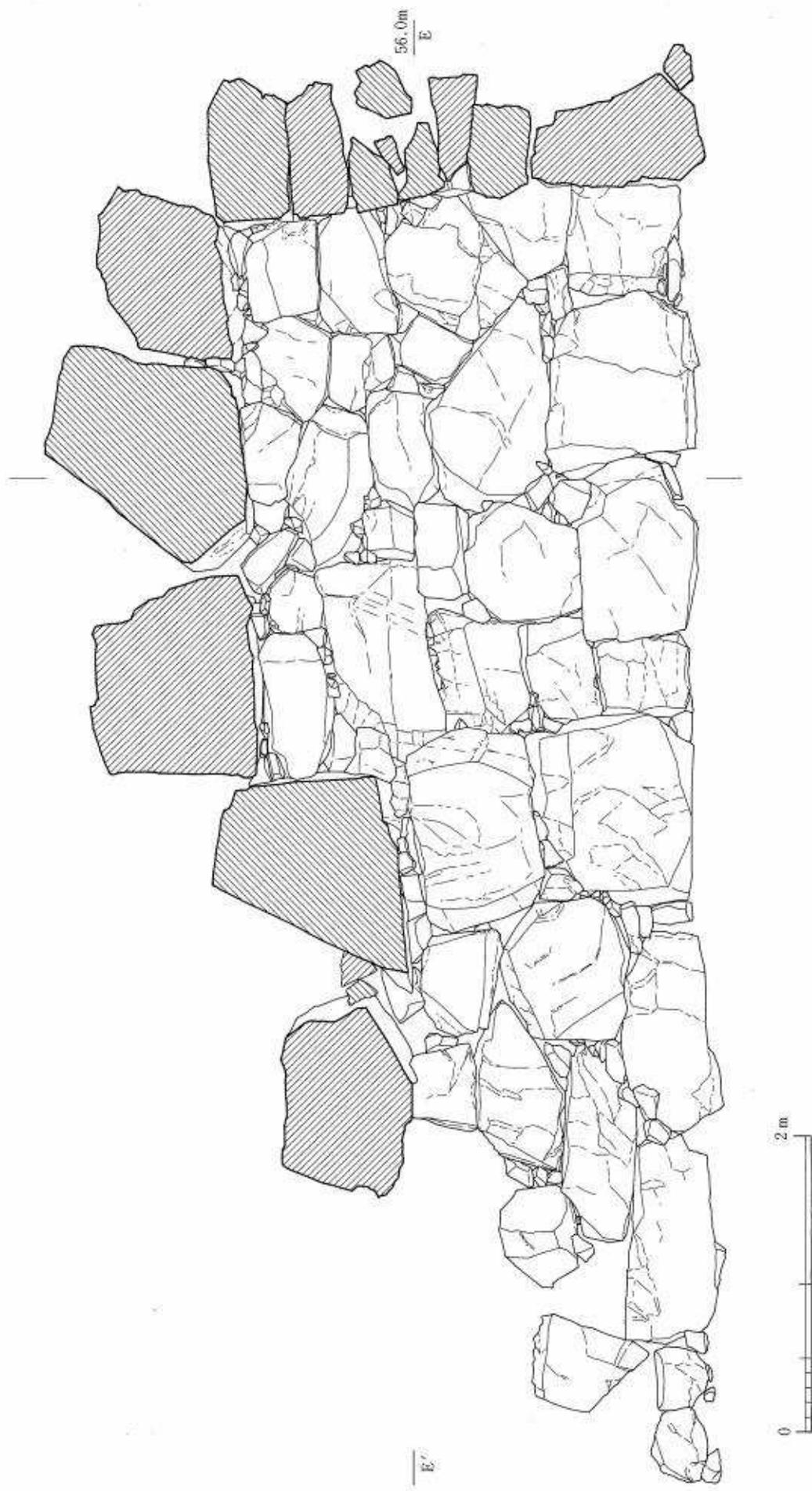
羨門付近には閉塞のために積み上げた土砂や石材の一部が床面付近に残っていた。これらはシルト質の土砂に礫を混入させたもので、この周囲だけが床面が隆起(第7図第9層)した状態で検出された。



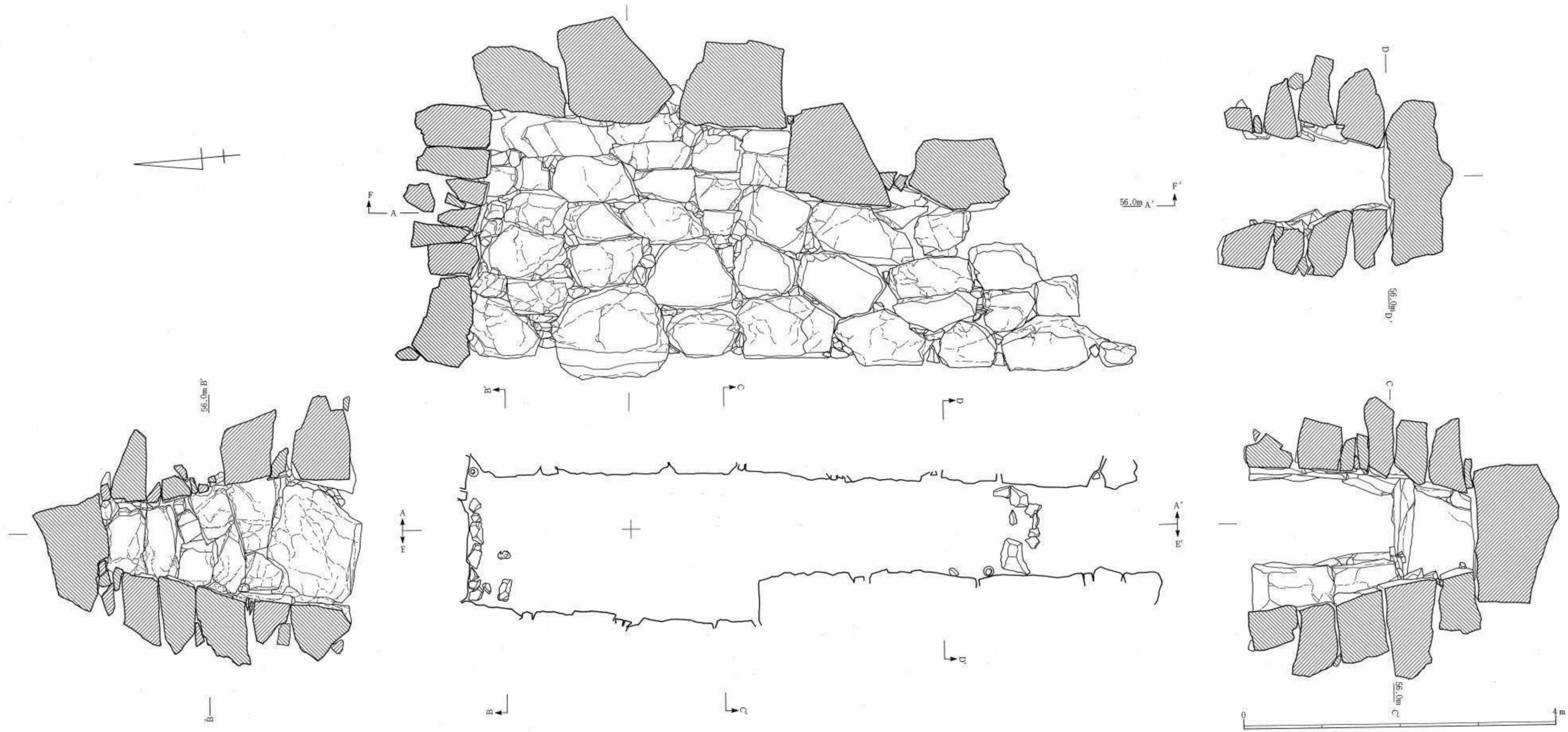
第9圖 石室天井見上げ図 (S=1/40)



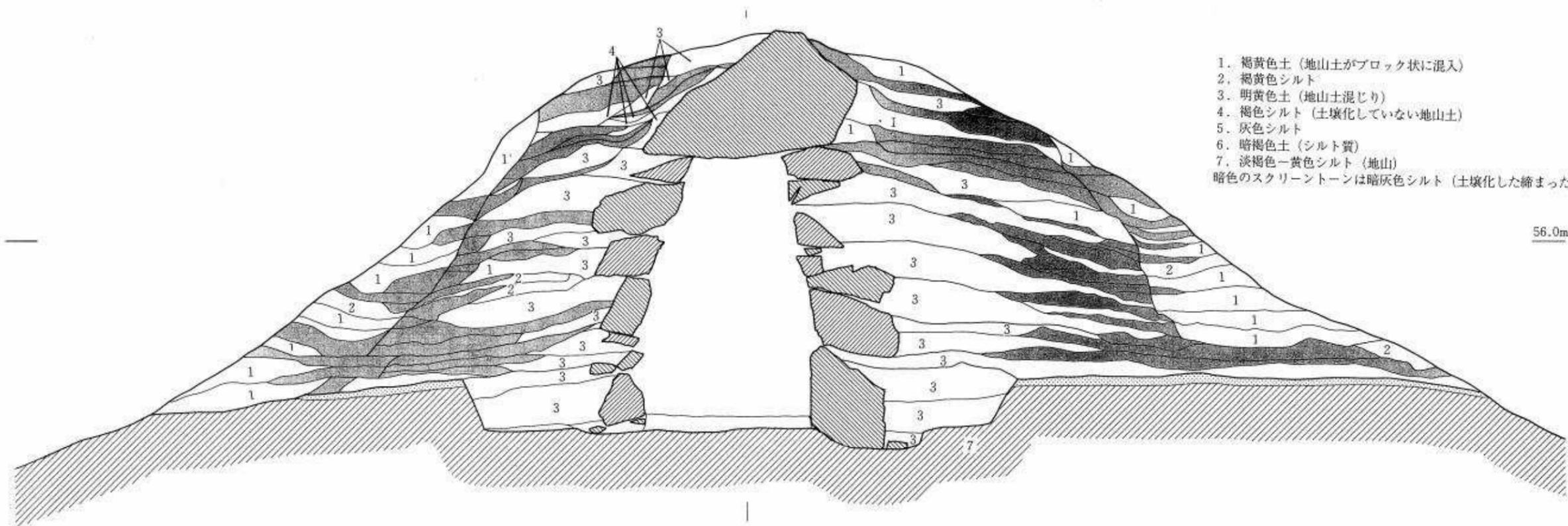
第10図 天井石上面からの俯瞰図 (S=1/50)



第11图 右侧壁实测图 (S=1/40)

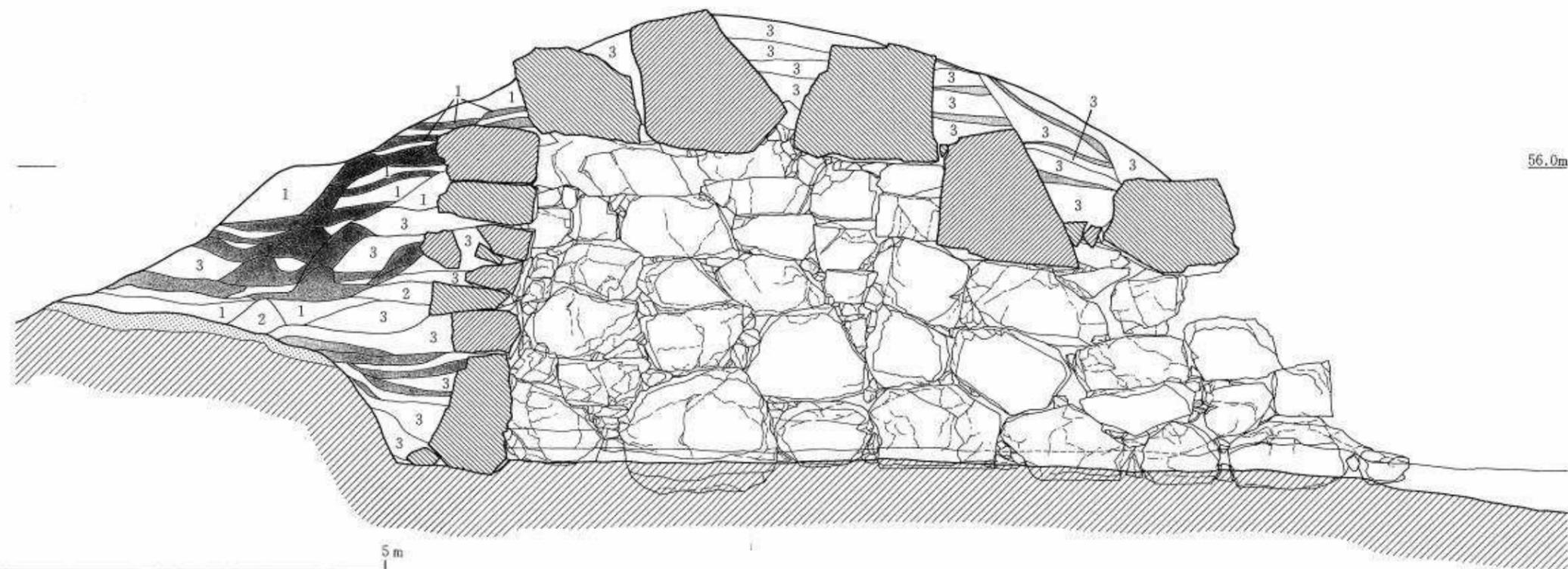


第12図 石室実測図 (S=1/40)



- 1. 褐黄色土 (地山土がブロック状に混入)
 - 2. 褐黄色シルト
 - 3. 明黄色土 (地山土混じり)
 - 4. 褐色シルト (土壌化していない地山土)
 - 5. 灰色シルト
 - 6. 暗褐色土 (シルト質)
 - 7. 淡褐色-黄色シルト (地山)
- 暗色のスクリーントーンは暗灰色シルト (土壌化した締まった土)

56.0m



56.0m

0 5m

第13図 墳丘断面図 (S=1/50)

土砂は土壌化した淡灰色シルトで良く締まった土である。また、羨門の側壁に並べられた数十cm大の小型の石（右側壁の2石と左側壁の1石）は石室の基底石ではなく、羨門の側面を整えるための石が遺存したものである。

床面 床面について判明したことは遺存状態が悪いことからあまり多くない。遺存していた面からの堆積土の厚さは、かなりの凹凸のために厚い所で40cm、薄い所で20cmと差が大きい。実際の床面は何面あったか確かではないが奥壁にわずかに残った敷石の状況から、地山から10～15cm上層あたり、奥壁で54.3m付近に床面の1枚が存在したと思われる。また、敷石の存在や前庭部に掻き出された拳大の多量の礫の存在から床面に敷石が敷かれていた可能性がある。地山は玄室の奥から中程にかけては、54.1m前後、羨道部ではやや下がり54.0m前後で検出できた。

遺物についても原位置と思われるものは奥壁近くのP12・44とM55・56、及びP28、閉塞部内側のP24・45のみである。石室内から出土した土器は破片となったものが多く、羨道部や他の地点の破片と接合するものも認められる。鉄器についても馬具などの大型のものは細かく破碎された破片となっており、しかも羨道部や前庭部付近に集中する傾向がある。また、釘の一部については玄室内の特定箇所集中していた可能性があるが、出土は攪乱層であった。このように出土遺物の大半は既に原位置を動かされており、床面の位置や被葬者の埋葬状況を探る資料はほとんど与えることができなかった。

第3節 構築

1. はじめに

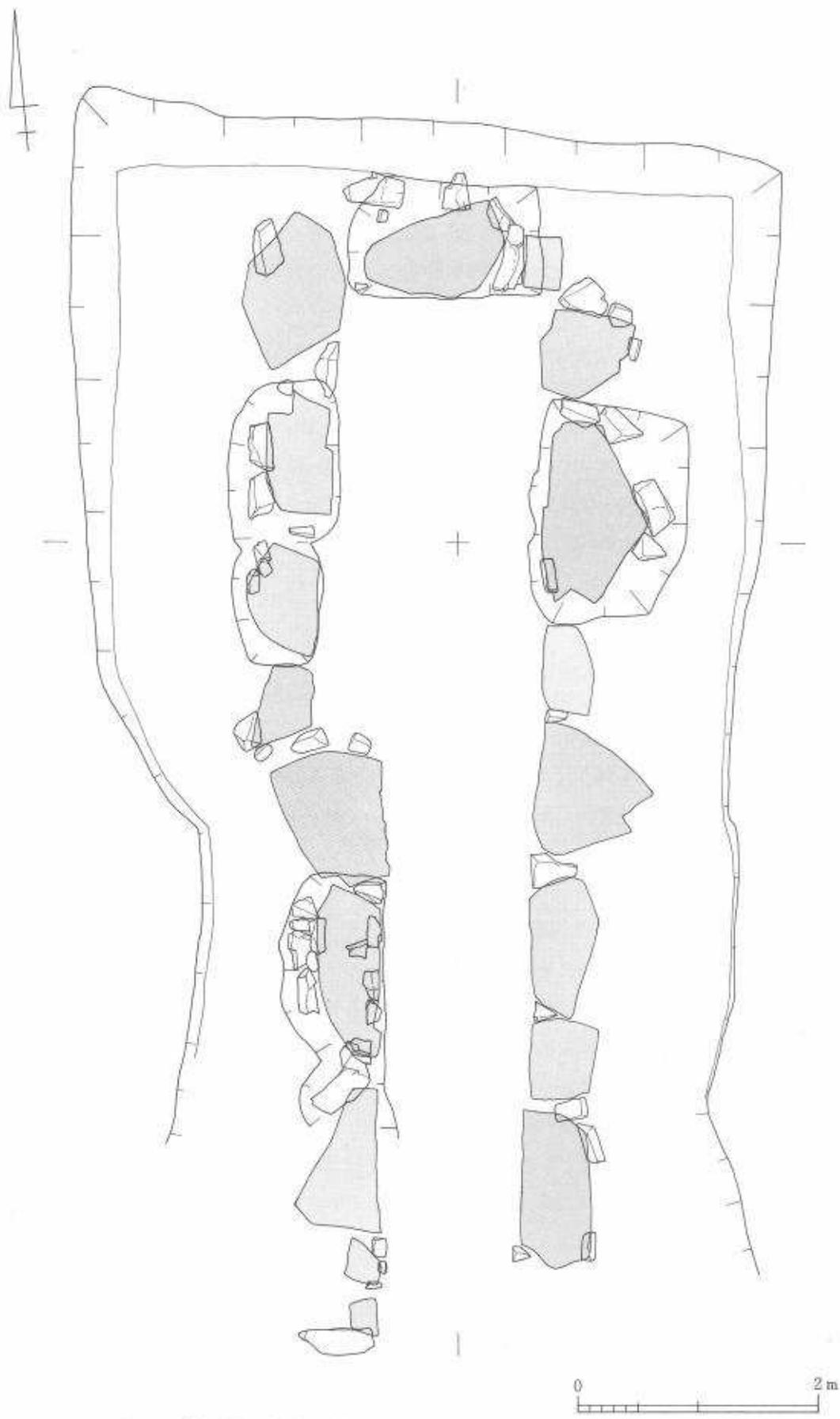
ここでは築造の工程と、工法について調査でわかったことを述べたい。2号墳の築造は次の手順で行われたと推測される。①場所の選定、②樹木の伐採・集積・除去、③石室掘方の掘削、④基底石の据付（据付時の掘り方掘削なども伴う）、⑤石室の構築および墳丘盛土の交互作業、⑥天井石の据付、⑦墳丘の整形（周濠の掘削と墳丘周囲、及び裾部の整形）の順である。ここでは特に③～⑦の工程について報告する。

2. 石室掘方の掘削（第13・14図、図版17）

2号墳は尾根頂上部の緩傾斜面に選地するが、石室構築には、大規模な造成工事が必要で、特に基底石の据え付けや床面の確保にあたっては床面を平坦にする必要がある。このため北側斜面の石室周囲は堀方が掘削される。堀方の規模は長さ8.0m、最大幅5.9mに及び、最大で1.1m（北辺）の深さがある。そして、掘り方は全体として「コ」の字に掘削されるが、右袖部の玄門石周囲は配石に沿って掘り方の掘削が行われている。

一方、石室南側は若干の傾斜面となるため、前庭部となる部分も含めて僅か10～15cmの厚さではあるが盛土（第13図、断面は第7図第10層）がなされていた。この盛土は淡灰色を呈し、土壌化の進んだシルトで締まった印象を受ける土である。また、同種の土は前述の羨門部の閉塞構造や墳丘の盛土にも用いられており、締め硬めが必要な部分に多様されている。

基底石の据え付け 堀方掘削後、基底石が据え付けられるが、この段階で石室の規模や規格が決定づけられる。基底石は奥壁・側壁石の区別なく縦に石を置き、広い面を石室側に向けている。また、据え付け時に石の納まりを良くするため、若干の堀方を掘ったり、小礫を挟んで安定を測っている。特に、左側壁の奥壁石から2石目は円形で平面の少ない石材のため、安定が悪く堀方を深く掘り、小礫を多く



第14図 掘方及び基底石据え付け状況 (S=1/50)

使用して安定を計っている。奥壁石についてもこのような小礫が多く底部の安定に苦心している。逆に玄門石は直方体に近い形状を呈しているためか掘方を掘削したり、小礫を挟むことはあまりしない。

基底石据え付け後、背後は土砂で埋められるが、この土砂は固く締まっており、比較的強く転圧をかけて埋めたと思われる。また、この埋め戻しには土壌化した暗灰色シルトを含まないのも特徴である。

3. 石室の構築および墳丘盛土の交互作業 (第13・14図、図版13~19)

基底石から上段の石は縦に積まず、横置している。そして、一石積むごとに背後の封土を盛り、次の石材の構築スペースを確保する。こうして序々に高く墳丘を盛り上げて、石室の石材1段毎に墳丘を構築したと考えられる。

なお、盛土の基礎となる墳丘基盤(掘方の周囲)については地山を掘削しておらず、旧表土が10~20cmの厚さで残されていた。周囲の表土の厚さから推測しても造成時には何ら加工を施しておらず、そのまま盛土が行われたものと考えられる。

石室の石の組合わせは上下の石が面と面で組合わさることはむしろ少ない。石材下面の大部分は封土に設置しており、石の重心を移動させなければならない部分に要領よく小礫が挟まれ、石材同士の組み合わせ面は重心がのる部分に限定されていた。また、石材裏側は控が大きいもので1.0m、小さいものでは40~50cm程度とばらつきが大きい。特に基底石はタテ方向に据えるものが多く、控えが小さい傾向がある。石の形状にもよるが、うまく上下の重心さえとれていれば控えについては問題としなかったようである。

石組の上面からの俯瞰図が第9図である。また、石室裏側の石材を撮影したのが図版13・15である。これらをもみても石室の裏側がかなり無秩序な様子であることがわかる。また、奥壁石と側壁石の間の組み方であるが、互いに組み合うことはほとんどなく、それぞれが独立して組まれている観がある。さらに、天井石も直接奥壁石にはのせておらず、石と石の組み方に特徴がみとめられた。

墳丘の盛土の積み方にも特徴が認められる。墳丘の各断面には盛土の造成過程を示す土層堆積が何層にも観察されるが、構築の工法の中には石材と同時に盛る盛土が、一気に墳丘表面まで及ぶのではなく、途中の石室構築に必要な範囲に限ってまず盛土を行っている。そして、外側の部分は石室を一応完成させた後、墳丘を形勢する段階で盛られている。断面図ではこのラインが縦目地となって明瞭に観察できるので、内側が第1次墳丘、外側が第2次墳丘に相当するだろう。

第1次墳丘と第2次墳丘は積まれる工程こそ異なるが盛土の工法は共通している。土は厚い所で40cm、薄い所では10cm前後の単位で盛り、点圧される。さらに、外面近くには地山土と交互に土壌化した暗灰色シルトが積まれる。これは、異なる収縮率の土砂を置くことで墳丘外皮の強度を増すためであろう。第2次墳丘では頻りにシルトが多用され、傾斜面に盛土を行う弱点を補う意識が働いている。

第1次墳丘は東斜面より西斜面の方が細かく土を盛っており、締まりも良い。また盛土の幅は東側の方が3.0m前後で、西側の2.5m前後より広くとられている。これは石材を墳丘に上げてくる方向の関係で東側を広くとったのではないかと推測される。また、天井石を高架する直前の段階でシルトが多用され一端造成面を整えている。これは重量の重い天井石を載せるための配慮と思われる。

墳丘全体で以外と締まりが悪いのが北側の盛土である。北側では盛ってゆく各単位の端で隆起を作り、上層の土盛作業の足掛かりを拵えているのが特徴である。他の部分同様、盛土外面近くには地山土と交互に土壌化した暗灰色シルトが多用して積まれるが、礫の混じりが多くあまり強く締め固めた痕跡はない。

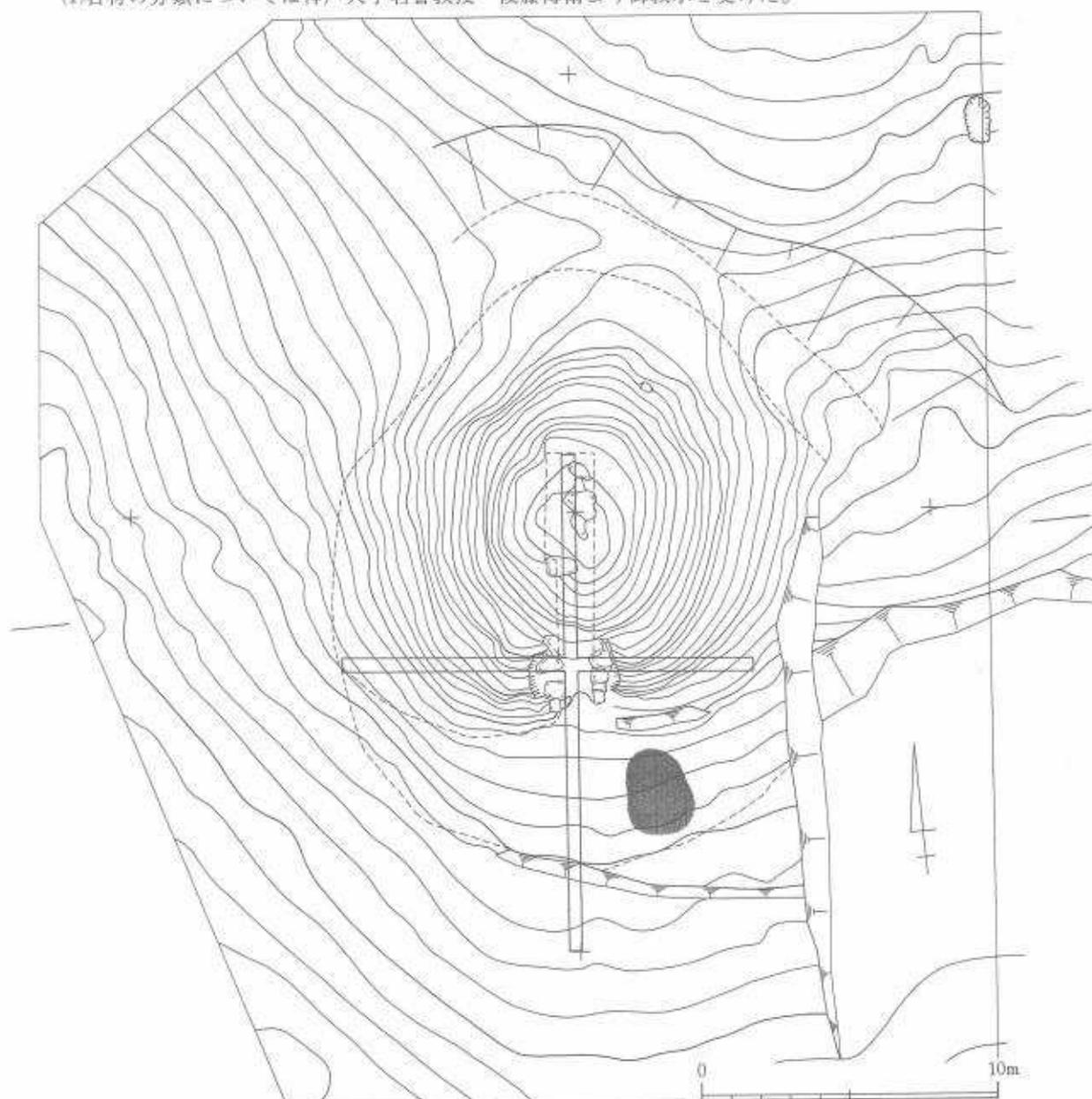
4. 天井石の構築

石室と第1次墳丘が積み上がった段階で最後に天井石を置く。天井平面を整えるため、天井石は石室の内面方向が平面になるように石材を組んでいる。また、天井石の構築にあたってはグリ石が置かれ、側壁石との設置面や重心の安定を計っている。こうして天井石が置かれるとさらに周囲に封土を盛っていく。この時点でも暗灰色シルトと地山土の互層に土砂を盛って強度を保っている。但し、天井石周囲の盛土は墳丘表面に近いめか、シルトと地山土をより細かく交互に重ねて締まりを良くしている。

次に、第2次墳丘が盛られて墳丘を形成する。通常このあと、さらに墳丘表面を整えるために化粧土を表面に置くと思われるが、本墳は表土の流失が著しく築造時の墳丘表土を観察することはできなかった。また、最後の墳丘を整える段階で、墳丘裾の地山についても若干削って墳丘の高低差を際立たせる作業を行っている。これと同時に周濠も整えられたと思われる。

註

(1)石材の分類については神戸大学名誉教授 後藤博爾より御教示を受けた。



第15図 床面断ち割りトレンチ (S=1/200)

第4章 出土遺物

第1節 土器

飾東2号墳は過去の盗掘等による攪乱のために、石室内部の遺物が外部に持ち出されたり本来の位置を移動されたりしている。このため発掘調査によって得られた土器は、その当初に古墳に納められたもの全てではなく、またその出土位置も一部のものを除いては当初のものではない。

土器を図化するにあたり、小さな破片までなるべく実測するように心掛けたが、土器によっては残存部分が少なく図化できなかつたものもある。ここに掲げた遺物は出土した遺物全てではないことをあらかじめ明記しておく。

土器は当初の副葬品と考えられる古墳時代後期のものを59点（P1～59）、後世の再利用時に石室内部に持ち込まれたと考えられる中世の土器を4点（P60～P63）図示した。以下の記述は土器の製作技法の説明に重点をおくことにし、出土位置・法量・残存率・胎土・色調・焼成の各項目については文末に観察表という形でまとめて掲げている。

1. 古墳時代後期の土器（第16～19図・P1～P59）

古墳時代後期の土器には須恵器と土師器がある。器種は須恵器が杯、高杯、甃、提瓶、平瓶、短頸壺、甕があり、土師器は椀、高杯がある。

須恵器

杯 蓋と身がある。P1～P9は蓋杯の蓋である。P1は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。天井部内面には同心円の当て具痕がのこり、この上を手持ちナデで仕上げる。それ以外の部分は内外面ともに回転ナデで仕上げている。また内面の口縁部から7mmの付近に調整時に指でつまんでできた浅い沈線がある。P2は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。天井部内面は手持ちナデで仕上げる。それ以外の部分は内外面ともに回転ナデで仕上げている。P3は天井部外面に回転ヘラケズリを施す。残存部分が少ないためロクロの回転方向は不明である。他の部分は回転ナデで仕上げる。P4はP1と良く似た作りである。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。天井部内面が若干窪んでおり、不明瞭ながら同心円の当て具痕が認められ、その上を手持ちナデで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げている。P1同様、口縁部内面に沈線状の窪みがあり、外面にも同様な窪みがある。

P5は天井部外面はヘラ切り未調整である。但し、ヘラ切り部分の周囲に1回転のみ回転ヘラケズリを施している。これはいわゆる「補助ケズリ」である。天井部内面は手持ちナデで仕上げており、それ以外の部分は内外面ともに回転ナデで仕上げる。P6は天井部外面はヘラ切りの後にナデで仕上げている。天井部内面は手持ちナデで仕上げており、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P7は天井部外面をヘラ切りの後にナデで仕上げる。それ以外の部分は全て回転ナデで仕上げている。P8は焼成時に他の個体と溶着している。天井部外面はヘラ切りであり、内面は手持ちナデで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P9は天井部外面はヘラ切り未調整であり、それ以外は回転ナデで仕上げる。

P10～22は蓋杯の身である。P10は底部内面に当て具痕が認められる。底部外面はヘラ切りの後にナ

デで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P11は底部をほとんど欠くが、外面には回転ヘラケズリを施す。それ以外は回転ナデで仕上げる。P12は底部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。底部内面は手持ちナデで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P13は底部を欠くため底部調整は不明である。残存部分は回転ナデで仕上げる。P14は底部外面に回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデで仕上げる。P15は底部を欠くため底部調整は不明である。残存部分は回転ナデで仕上げる。P16は底部外面に回転ヘラケズリを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P17は底部外面に回転ヘラケズリを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P18は底部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。底部内面は手持ちナデで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P19は底部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P20は底部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。底部内面は手持ちナデで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。

P21は底部外面をヘラ切りの後にナデで仕上げるが、その外側に2回転弱の補助ケズリを加える。底部内面には手持ちナデを施し、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P22は底部外面をヘラ切りした後にナデを加えるが、これもその外側に補助ケズリが認められる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げている。

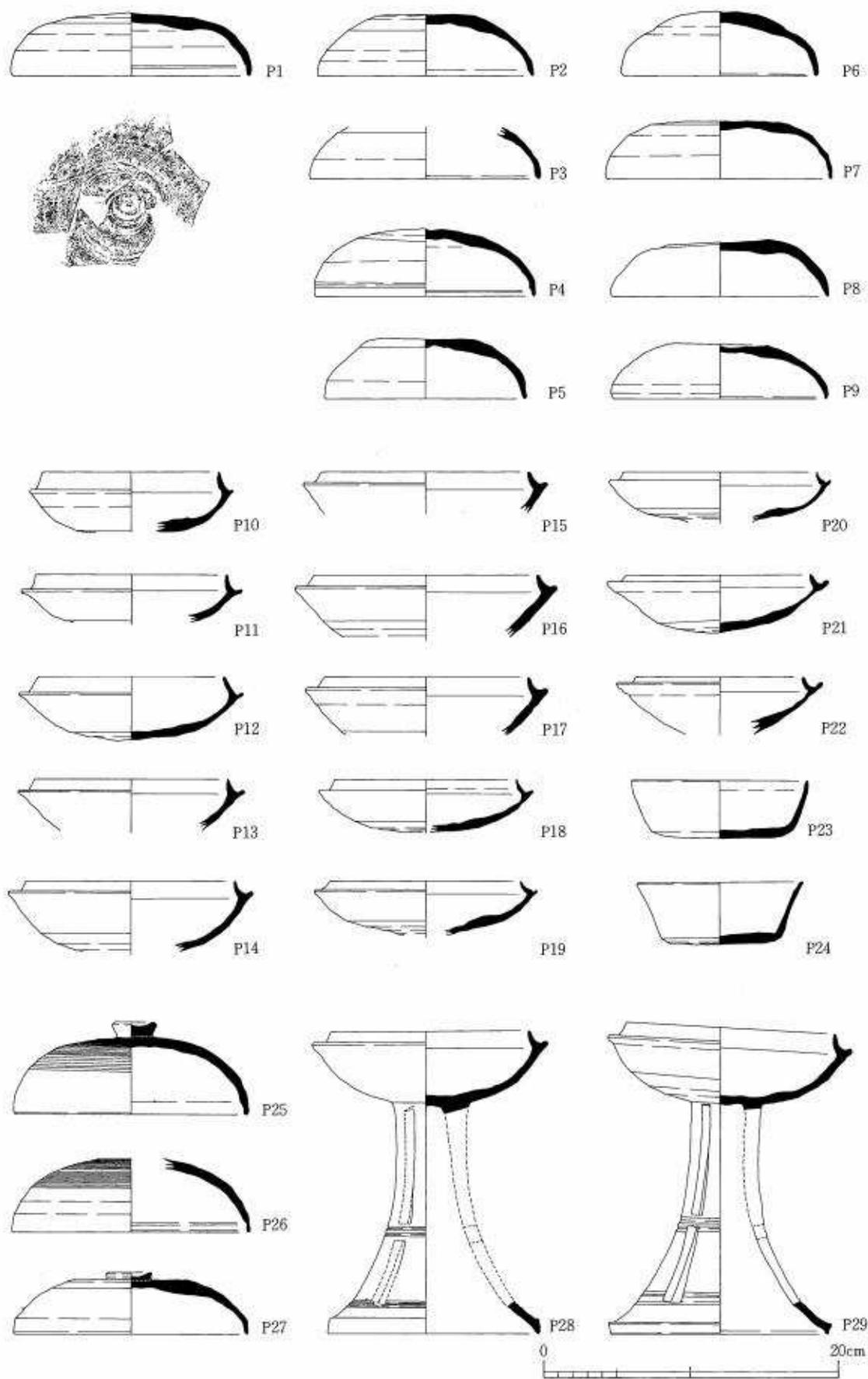
P23・P24は杯Gの身である。P24は底部外面をヘラ切りした後にナデで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P24は底部外面をヘラ切りした後にナデで仕上げ、その外側に回転ヘラケズリが認められる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。

高杯 有蓋高杯と無蓋高杯がある。P25～P27は有蓋高杯の蓋である。いずれも天井部の中が窪んだつまみをはりつける。P25は外面は約2分の1の範囲にカキメを施す。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P26はつまみの部分を欠くが、調整はP25と同じである。P27は天井部に径が大きく背の低いつまみが付く。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。ロクロの回転方向は左回りである。頂部内面は手持ちナデで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。

P28～P29は有蓋高杯である。長脚2段透かしの脚部をもち、透孔の下にはそれぞれ2条の沈線を巡らせる。P29もP28と同じ作りのものである。杯部は底部外面に回転ヘラケズリを施す。ロクロも回転方向は左回りである。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。

P30～P32は無蓋高杯である。P30は杯部の中位と下端に凸帯が巡る。杯部の底部外面にはカキメが施され、内面は底部を手持ちナデで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P31は杯部の中位と下端に凸帯が巡る。凸帯間には波状文が施される。残存部分は全て回転ナデで仕上げられる。P32は長脚2段透かしの脚部をもつ。杯部中位には浅い沈線が巡る。脚部の透かしの間には2条の沈線が巡る。全体を回転ナデで仕上げている。

P33～P35は脚部である。P33は長方形透かし孔の下に円形の透かし孔を配する。円形透かし孔の下には沈線を巡らせる。内部はヘラ状の工具でナデつけた痕があり、それ以外の部分は回転ナデで仕上げている。P34は長脚のものゝ裾部である。方形の透かし孔の下に沈線を施す。残存部分は全て回転ナデで仕上げている。P35も長脚のものゝ裾部である。長方形の透かし孔の上に沈線を巡らせる。残存部分は回転ナデで仕上げる。



第16圖 出土土器(1)

甗 P 36～P 39は甗である。P 36は頸部から口縁部にかけての破片である。口縁部と頸部に波状文を施し、口縁部と頸部の境に沈線を巡らせる。調整は内外面ともに回転ナデである。P 37も頸部から口縁部にかけての破片である。頸部と口縁部の境に沈線を1条巡らせる。調整は内外面ともに回転ナデで仕上げる。P 38は口縁部の破片である。外面にカキメを施す。内面は回転ナデで仕上げる。P 39は体部の破片である。下膨れで、頸部が細くしまる。調整は内外面ともに回転ナデである。

提瓶 P 40とP 41は提瓶である。P 40は肩部に突起がつく。体部外面にはカキメが施され、口縁部はナデで仕上げられている。P 41は肩部を欠くため、把手の形状は不明である。体部外面にカキメを施し、口縁部はナデで仕上げる。

平瓶 P 42は平瓶である。底部はヘラ切りの後にナデで仕上げる。その他の部分は回転ナデで仕上げる。

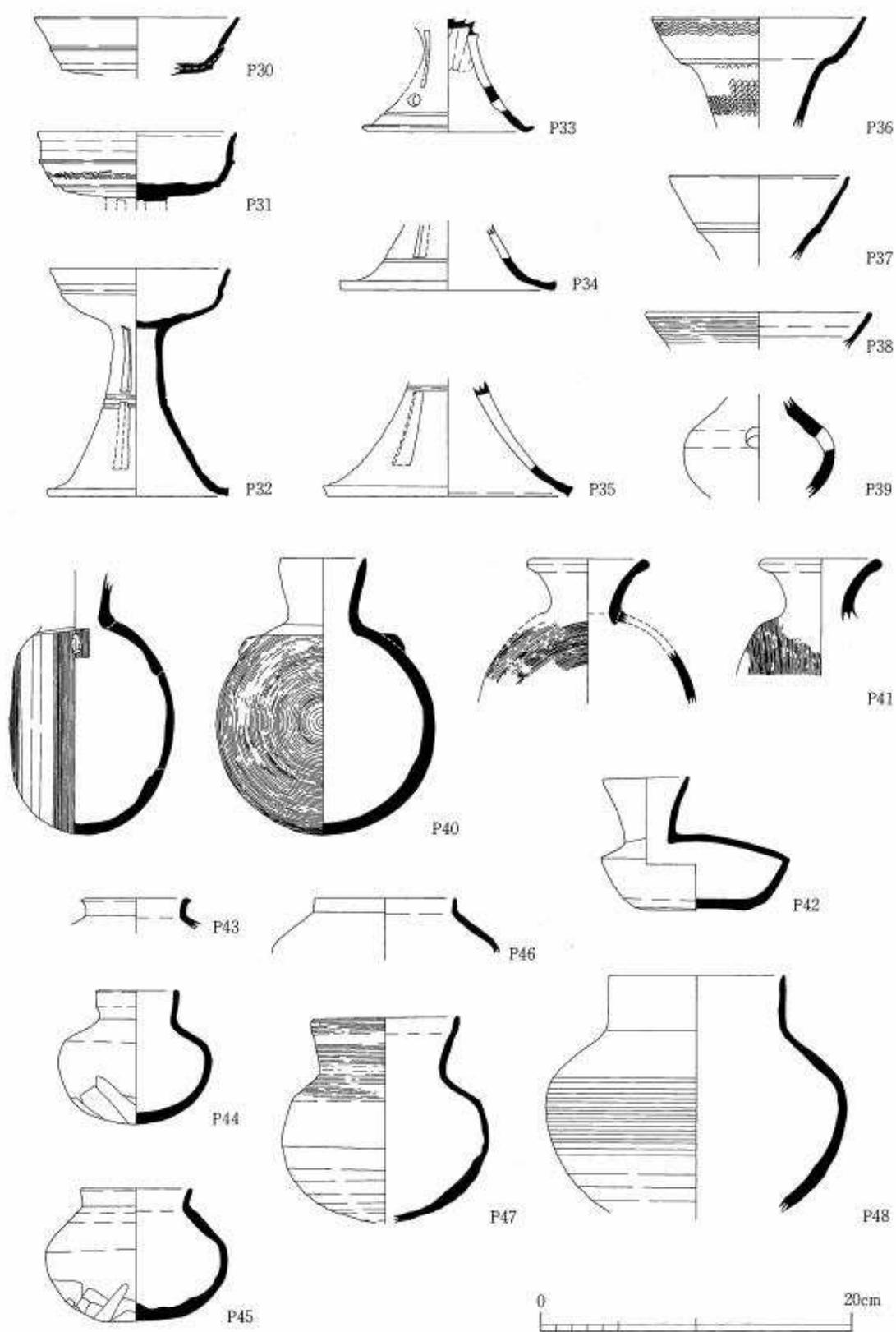
短頸壺 P 43～P 48は短頸壺である。P 43は口縁部の端をわずかに外側に折り曲げる。内外面ともに回転ナデで仕上げる。P 44は口縁部外面に段をもつ。底部外面は手持ちヘラケズリで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P 45は口縁部がやや外反する。底部外面は手持ちヘラケズリで仕上げ、それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P 46は短い口縁が直立する。内外面ともに回転ナデで仕上げる。P 47は直口壺に分類すべきかもしれないがここで説明しておく。口縁部から肩部にかけてカキメを施し、底部は回転ヘラケズリで仕上げる。ロクロの回転方向は左回りである。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。P 48は大型のものであるが、口縁部が大きく歪んでいる。体部中位にカキメを施し、底部は回転ヘラケズリで仕上げる。それ以外の部分は回転ナデで仕上げる。

甗 P 49～P 55は甗である。小型のものと大型のものがある。P 49は大型の甗の口縁部である。口縁部は上方に拡張する。頸部には2段に沈線が巡らされ、口縁部および各沈線の間には、ヘラで縦方向の直線を施す。また体部の内面には同心円の当て具痕が残る。P 50は口縁部がやや肥厚する。頸部には2条一組の沈線が2段に施され、沈線の間をヘラで浅く刻んだ縦方向の直線で埋める。口縁部は回転ナデで仕上げられ、体部は外面をタタキで仕上げる。内面には同心円の当て具痕が残る。P 51は頸の短いものである。口縁部は回転ナデで仕上げられる。体部は外面にタタキを施した後に、中位以上にカキメを施す。内面には同心円の当て具痕が残る。

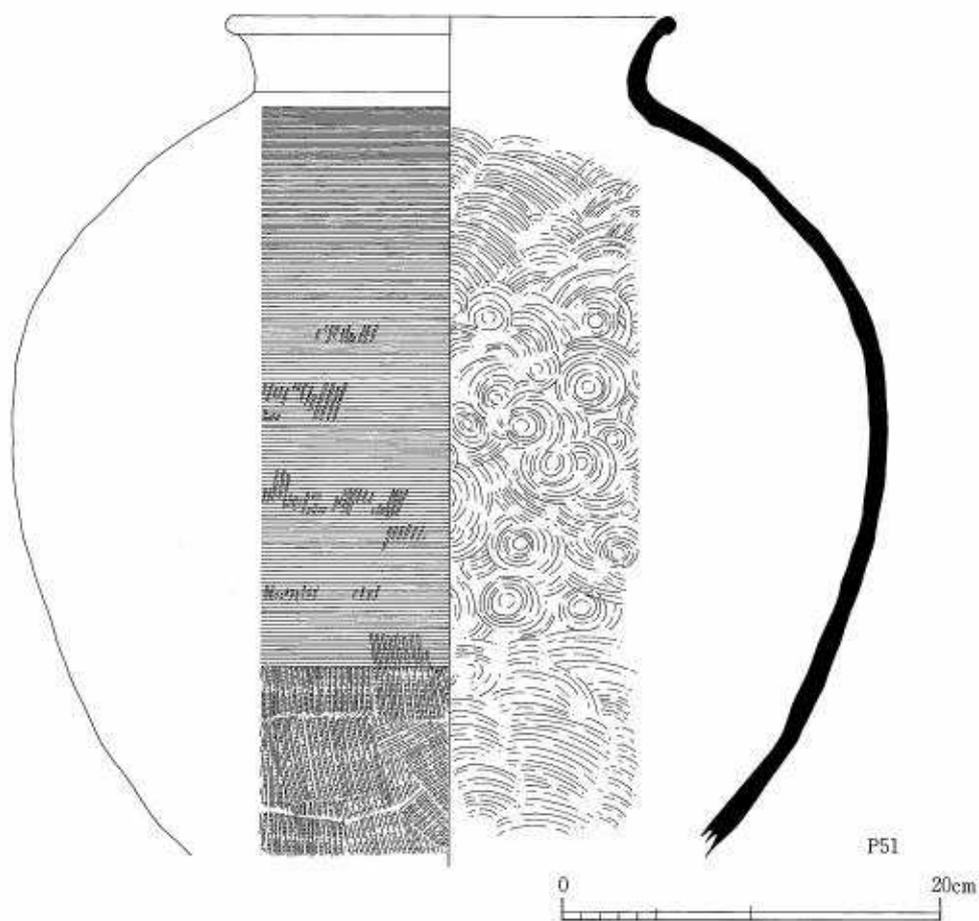
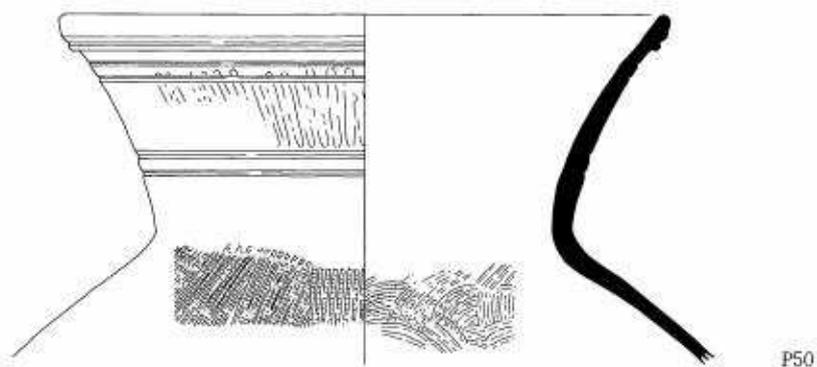
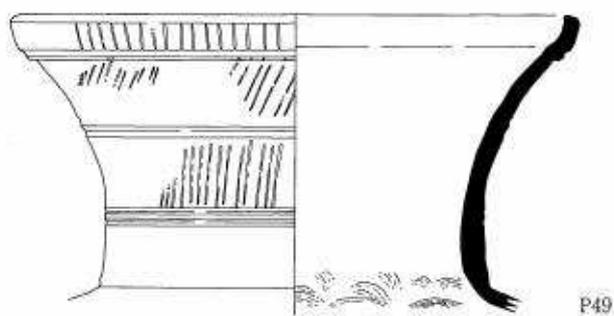
P 52は小型のものである。口縁部は外方に折り曲げられる。頸部から体部にかけて外面にカキメが施される。内面は回転ナデで仕上げられている。P 53も口縁部を外方に折り曲げたものである。体部にはカキメが施され、それ以外の部分は回転ナデで仕上げられる。P 54は口縁部の破片である。内外面ともに回転ナデで仕上げられる。P 55は頸部と体部の破片である。肩に円形の突起がつく。内外面ともに回転ナデで仕上げられる。

土師器

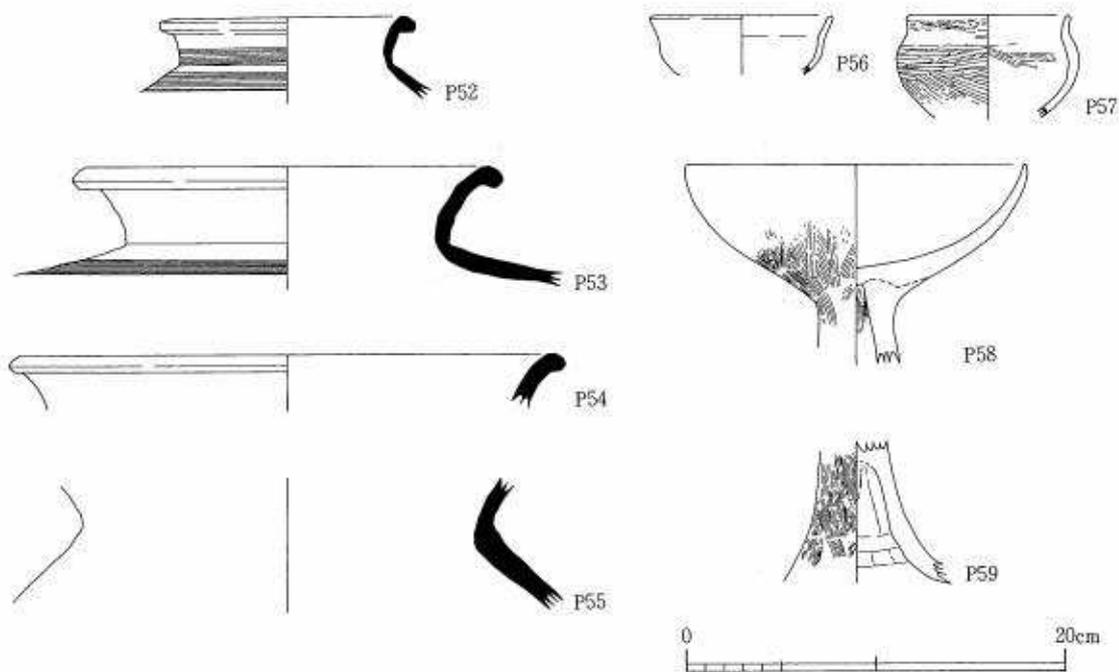
椀 P 56は口縁部が外反する。調整は不明である。P 57は口縁部が垂直にたつ。外面は丁寧なヘラミガキで仕上げられ、内面は横方向のハケを施した後に、ナデで仕上げる。



第17图 出土土器(2)



第18图 出土土器(3)

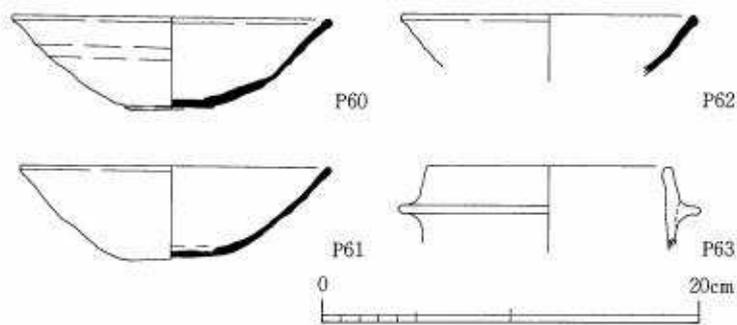


第19図 出土土器(4)

高杯 P58は椀形の杯部をもつものである。外面はハケを施した後にナデで仕上げ、内面はナデで仕上げ。P59は脚部の破片である。内面をヘラケズリしており、外面は縦方向のハケで仕上げる。

2. 中世の土器 (第20図・P60～P63)

中世の土器はすべて須恵器である。器種は椀と羽釜がある。P60は見込みの部分が窪んだ椀である。底部は糸切りである。P61も見込みの部分が窪んだ椀である。底部は糸切りである。P62もP60・P61と同じ作りの椀である。P63は羽釜である。内外面ともにナデで仕上げる。



第20図 出土土器(5)

第2節 金属製品

飾東2号墳からは鉄製品および銅製品が出土している。鉄製品には武器・工具・馬具・釘があり、銅製品には耳環がある。これらの金属製品は土器の場合と同様に攪乱のため、著しく破損しており、また当初副葬された金属製品のうち外部に持ち出されたものもかなりの数にのぼると思われる。

本来はさらに多数の金属製品が副葬されていたのであろうが、発掘調査で得られた点数は小鉄片を除くと56点である。これらの金属製品は保存のため、脱塩・錆落とし・樹脂含浸等の処理を施している。

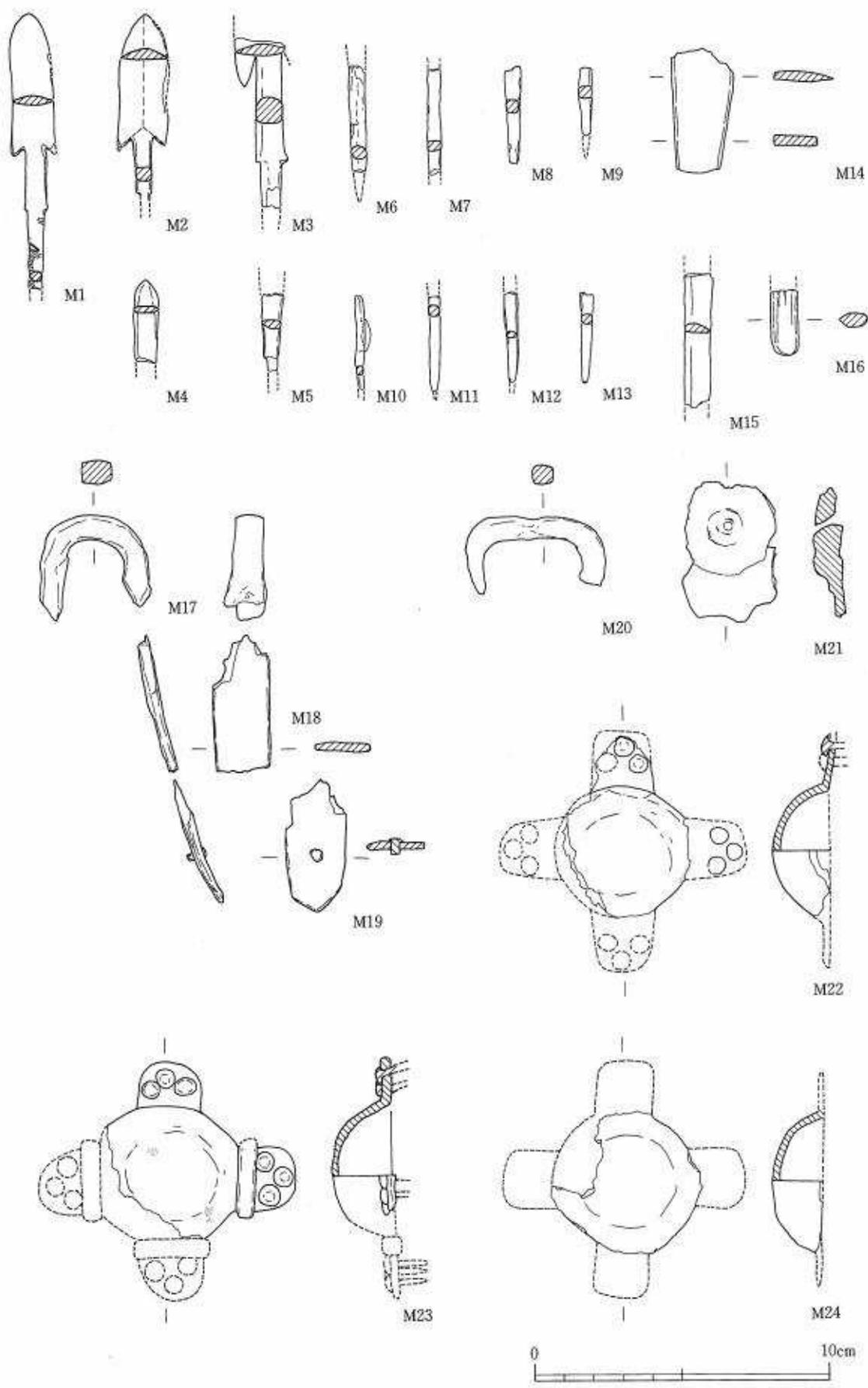
1. 鉄製品 (第21～22図・M1～M54)

武器 鉄鏃がある。M1～M3を除くといずれも小破片であり、とくに茎の破片は釘と識別の困難なものもある。ここでは断面の形状、太さを基準に釘と鉄鏃を分別した。M1は短頸鏃である。茎部の先端と片側の逆刺を欠く。残存部の全長9.4cm、鏃身部の幅1.4cm・厚さ0.3cm、茎部の直径0.4cmである。茎部には繊維を巻き付けた痕跡がある。玄室1区から出土した。M2は短頸鏃である。茎部を欠く。鏃身部には筋が明瞭に認められる。残存部の全長6.5cm、鏃身部の幅1.6cm・厚さ0.45cm、茎部の太さ0.5cmである。玄室1区から出土した。M3は太めのつくりの短頸鏃である。鏃身部の大半を欠く。残存部の全長5.85cm、茎部の直径0.7cmである。玄室1区から出土した。M4は長頸鏃の鏃身部である。残存部の全長2.8cm、幅0.95cm、厚さ0.3cmである。玄室4区から出土した。

M5～M13は茎部の破片である。鏃の型式は不明である。M5は篋被を含む破片である。残存部の全長2.6cm、幅0.75cm、厚さ0.4cmである。玄室1区から出土した。M6は先端部の破片である。断面楕円形であり、残存部の全長3.65cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmである。玄室3区から出土した。M7は断面方形の破片である。残存部の全長3.65cm、幅0.45cm、厚さ0.35cmである。玄室3区から出土した。M8は篋被と鏃身部の間の破片である。残存部の全長3.35cm、幅0.77mm、厚さ0.55mmである。玄室3区から出土した。M9は断面長方形の破片である。先端部と思われる。残存部の全長2.3cm、幅0.52cm、厚さ0.47cmである。玄室3区から出土した。M10は断面方形の破片である。残存部の全長3.17cm、幅0.4cm、厚さ0.35cmである。玄室3区から出土した。M11は先端部の破片である。残存部の全長3.3cm、幅0.35cm、厚さ0.35cmである。玄室1～2区間で出土した。M12も先端部の破片である。残存部の全長3.1cm、幅0.4cm、厚さ0.2cmである。玄室1～3区間で出土した。M13も先端部の破片である。残存部の全長3.1cm、幅0.35cm、厚さ0.35cmである。前庭部から出土した。

工具 刀子がある。M14は刀身の破片である。残存部の全長4.3cm、幅2.0cm、厚さ0.45cmである。玄室1区から出土した。M15は細身の刀子の破片と思われる。残存部の全長4.6cm、幅0.85cm、厚さ0.35cmである。前庭部表土から出土した。M16は茎部の破片である。残存部の全長2.25cm、幅0.95cm、厚さ0.45cmである。玄室3区から出土した。

馬具 鐙、轡、辻金具もしくは雲珠がある。M17～M19は壺鐙の吊手部分の破片である。いずれも玄室内から出土した。M17は厚手の鉄板をコの字形に曲げ、先端部を平たく打ち展ばしたものである。外側の幅が3.7cm、内側の幅が2.1cm、厚さは0.8cmである。M18は長さ4.8cm、幅1.9cm、厚さ0.3cmの板状のものである。M19は先端が尖った形状であり、木製の壺鐙を固定するための鉄がひとつ打たれてい



第21图 出土金属製品(1)

る。長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cmである。以上3つの破片から復元できる吊金具の大きさは高さ13~15cm、下端部の幅が9~10cmほどのものである。

M20は鉄棒をコの字形に曲げたものである。素環槽の立間の部分と思われる。幅4.8cm、直径0.7cmである。玄室内4区から出土した。

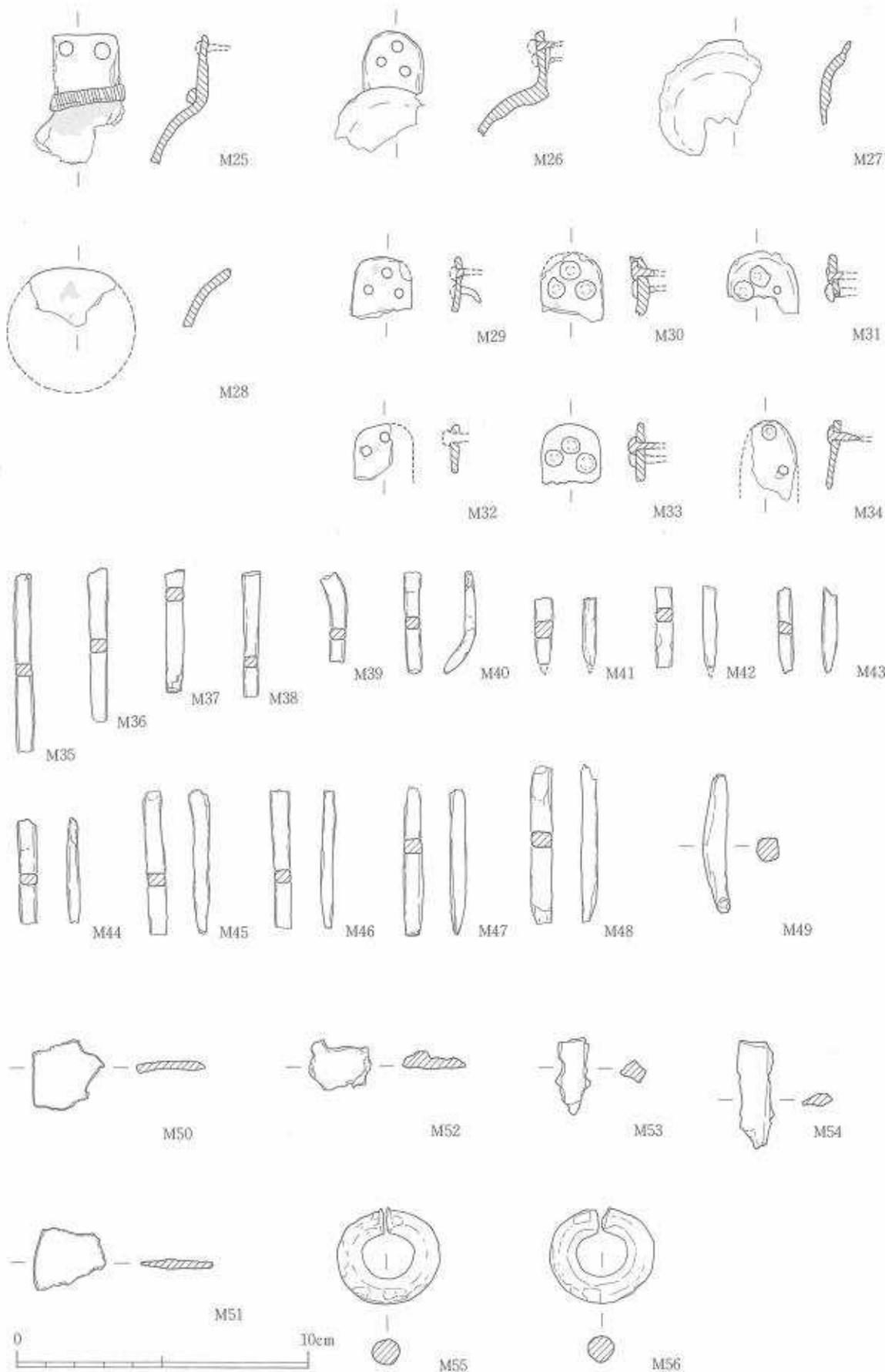
M21~M34は辻金具もしくは雲珠である。M21は円形で頂部に孔のあいたものである。雲珠の一部とも考えられるが、残存部分が少ないため判断できない。前庭部から出土した。M22~M34は金銅装の雲珠もしくは辻金具である。いずれも鉄地に薄い金銅板を被せる。M22は半球形の体部から4方向に脚がつく辻金具である。脚には3個の鉾が打たれる。責金具の有無は不明である。金銅板はほとんど剥落しているが、一部に鍍金が残る。体部の直径4.5cm、高さ1.9cm、脚の長さは推定で2.0cm、幅2.0cmである。羨道3区から出土した。M23も半球形の体部から4方向に脚がつく辻金具である。脚は2方のみ残り、先端は丸みを帯び、鉾が3個打たれる。脚の根元には責金具がつく。一部にのみ鍍金が残る。体部の直径4.5cm、高さ1.9cm、脚の長さ1.6~2.0cm、幅2.1cmである。羨道から出土した。M24も半球形の体部に4方向に脚がつく辻金具である。脚は残存していない。これも金銅板は剥落しており、鉄地が剥き出しになっている。体部の直径4.8cm、高さ1.7cmである。羨道から出土した。

M25は他の個体と比べてやや大ぶりであり、脚の先端が方形で、鉾は2個打たれている。脚の根元には刻みを施した責金具がつく。金銅板の残りが良く、鍍金も広い範囲に見られる。体部の推定径6cm以上、高さ2cm以上である。脚の数は不明であるが、大ぶりなことから雲珠である可能性が高いと考える。玄室から出土した。M26は半球形の体部に脚がつくものである。脚の数は不明であるが、大きさから辻金具であると考えられる。脚の先端は丸みを帯び、鉾が3個打たれる。脚の一部に金銅板が残る。脚の長さ2.0cm、体部の推定径4cm程、高さ2cm程である。玄室1~2区間から出土した。M27は半球形の体部である。脚の折れた痕跡が1か所ある。直径は推定で4.5cm、高さ1.1cmである。大きさから辻金具であると考えられる。前庭部から出土した。M28も半球形の体部である。直径は推定で4cm程、高さ1.7cm程である。玄室から出土した。

M29~M34は脚の破片である。M29は3個の鉾が打たれるが、頭部は欠けている。長さ2.1cm、幅2.1cmである。羨道3区から出土した。M30は先端部が丸みを帯びる。鉾は3個打たれる。長さ2.3cm、幅2.3cmである。前庭部から出土した。M31も先端部が丸みを帯び、鉾が3個打たれる。長さ2.1cm、幅2.5cmである。前庭部から出土した。M32は半分欠けるが、残存部には鉾が2個打たれる。鉾の頭部は欠ける。長さ3.0cmである。前庭部から出土した。M33は先端部が丸みを帯びる。鉾は3個打たれる。長さ2.2cm、幅2.2cmである。前庭部から出土した。M34は幅がやや狭い。残存部には鉾が2個打たれる。長さ2.7cmである。玄室内から出土した。

釘 M35~M48は釘である。いずれも断面方形である。全て玄室3区から出土した。M35は頭部に近い部分である。残存部の長さ5.3cm、幅0.6cm、厚さ0.45cmである。M36も頭部に近い部分である。残存部の長さ6.1cm、幅0.58cm、厚さ0.37cmである。M37も頭部に近い部分である。残存部の長さ4.3cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmである。M38は中程の部分である。残存部の長さ4.4cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmである。M39は途中から折れ曲がったものである。残存部の長さ3.1cm、幅0.55cm、厚さ0.45cmである。

M40は先端部であるが途中から屈曲する。残存部の長さ3.0cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmである。M41は先端部である。残存部の長さ2.3cm、幅0.9cm、厚さ0.6cmである。M42は先端部である。残存部の



第22圖 出土金屬製品(2)

長さ2.8cm、幅0.6cm、厚さ0.4cmである。M43は先端部である。残存部の長さ2.9cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmである。M44は先端部である。残存部の長さ3.6cm、幅0.6cm、厚さ0.45cmである。M45は先端部である。残存部の長さ5.0cm、幅0.6cm、厚さ0.45cmである。M46は先端部である。残存部の長さ4.8cm、幅0.55cm、厚さ0.45cmである。M47は先端部である。残存部の長さ5.1cm、幅0.6cm、厚さ0.52cmである。M48は先端部である。残存部の長さ5.5cm、幅0.7cm、厚さ0.55cmである。

以上が釘であるが、このうちM37を除いては一括出土である。これらは棺釘であると考える。

不明品 M49～M54は用途不明品である。いずれも小破片であり、現状からその元の姿を復元することは困難である。M49は棒状の鉄製品である。中央部が太く、両端が細い。残存部の長さ4.8cm、中央部の幅0.85cm、厚さ0.75cmである。玄室4区から出土した。M50は鉄板の破片である。やや湾曲しているが、厚さは均一である。残存部の幅2.4cm、厚さ0.4cmである。前庭部から出土した。M51も鉄板の破片である。残存部の幅2.5cm、厚さ0.3cmである。玄室から出土した。M52はやや厚い、鉄片である。残存部の幅2.1cm、厚さ0.6cmである。玄室3～4区間で出土した。M53は棒状の鉄片である。断面は菱形、先端部が尖るようである。残存部の長さ2.6cm、幅0.9cm、厚さ0.7cmである。玄室から出土した。M54は縦長の鉄片である。残存部の長さ3.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmである。玄室から出土した。

2. 銅製品 (第22図 M55・M56)

M55・M56は銅製の耳環である。いずれも銅芯に銀箔を巻いたものである。この上に金メッキを施していた可能性もあるが、現状では銀色の皮膜のみしか観察できない。M55は長径3.5cm、短径3.3cmであり、太さは中央部で0.9cm、重さは31.2gである。断面は八角形であり、銅芯を鍛造によって円形に近づけている。M56は長径3.5cm、短径3.3cmであり、太さは中央部で0.9cm、重さは33.9gである。これも断面は八角形である。いずれも玄室4区から出土している。これらの耳環はサイズ、作りから一對になるものであろう。

第3節 遺物の検討

1. 土器について

飾東2号墳からは須恵器、土師器が出土している。これらの遺物は後世の攪乱によりその大部分が原位置を失っている。このため出土位置に基づく検討——括遺物の把握、追葬回数の検討など——は不可能である。よってここでは古墳の築造時期、追葬期間、最終埋葬の時期等を知るために、各土器の年代的な位置付けについて検討する。

土器のうち土師器は出土点数が少なく、またその年代観も確立されていないので、ここでは須恵器のみを検討の対象とする。検討の手順としては須恵器のうちでも個体数が多く、その型式変化が追いやすい杯の分類、年代的な位置付けをおこない、それぞれの時期に対応する他の器種を挙げることにする。

①杯の分類と編年

まず杯身と杯蓋のうち、大きさ、調整からセットとなりうるものを抽出する。

- 第1群 蓋P1は身P16と組み合わせる。この組み合わせは口径が15cmを超える大型のものであり、外面の1/2の範囲に回転ヘラケズリが施される。また内面には同心円の当て具痕が残る。
- 第2群 蓋P4は身P18と組み合わせる。これは口径、器高ともに第1群よりも縮小するが、外面には回転ヘラケズリが施される。
- 第3群 蓋P5は身P10と組み合わせる。これは口径は第3群よりも減ずるが、身の立ち上がりが高い。外面はヘラ切りの後にナデで仕上げられる。
- 第4群 蓋P9は身P21と組み合わせる。これは口径は第3群とさほど変わらないが、受け部の立ち上がりが低く、身の底部には補助ケズリが見られる。
- 第5群 蓋P6は身P22と組み合わせる。これは蓋の口径が13cmであり、小型化が著しい。底部はヘラ切りの後にナデで仕上げる。また蓋、身ともに深い作りである。
- 第6群 P23・24が相当する。身の受け部が消失した段階である。これに組み合わせる蓋は出土していない。

以上のように杯は6群に分類できる。第1群は陶邑編年⁽¹⁾のTK43型式に、第2群は同TK209型式に、第3群～第5群は外面の回転ヘラケズリが省略されていることからTK217型式に相当する。第6群はTK217型式もしくはこれよりも下がるものであろう。

②他の器種の検討

高杯はいずれも長脚2段透かしのものである。有蓋高杯P28・29は口径、受け部の立ち上がりの高さが杯の第1群に近く、これと同時期のものであろう。無蓋高杯はP30・31はシャープな稜を有し、端部の仕上げも丁寧なことから、第1群と同時期と考えられる。P32はかなり粗雑な作りになっており、第2群と同時期と考えられる。

甕は全形のわかるものがないが、第1群もしくは第2群に伴うものである。提瓶はP40は把手の省略が進んでいることから、第2群に相当し、P41は口縁部の作りが丁寧であり、第1群に相当すると考えられる。

平瓶は偏平な体部の小型のものであり、第3～第6群のいずれかに伴うものである。可能性としては第5群もしくは第6群に伴う可能性が高い。

短頸壺は小型のものは底部を手持ちヘラケズリで仕上げ、大型のものは回転ヘラケズリで仕上げる。いずれにしてもヘラケズリを多用し、作りが丁寧であるので、第1群もしくは第2群に相当するであろう。

甕はP49・50のような長い頸をもつものと、P51～53のように短い頸をもつものがある。頸の長いものは頸部に施文するが、いずれも直線文である。直線文は陶邑TK43～209型式に特徴的なものであり第1群もしくは第2群に相当すると考える。頸の短い甕は外面にカキメを施すが、カキメを多用するのは、第1群・第2群の高杯蓋、はそう口縁部、短頸壺等に見られる特徴であり、これらの甕も第1群もしくは第2群に相当するものであろう。

③小 結

以上のように飾東2号墳出土の土器は6つの群に分けることができる。これらは第1群～第2群～第3群・第4群・第5群～第6群という順に並べることができる。第3～第5群の間にみられる差異はこれを時期差とするか、生産地の違いによる差とするか、いずれとも決めがたい。またここで分けたそれぞれの群が各追葬の単位として認識できるわけでもない。同時に副葬された遺物の中にも型式差があることはよくある。

ここで結論として言えることは、現代まで残された遺物から判断する限り、初葬は第1群の土器が示す時期、すなわち田辺編年でいうTK43型式の時期であるということ、そして第2～6群の土器が示す時期すなわち田辺編年でいうTK209型式～TK217型式の時期の間に何度かの追葬が行われ、最終の埋葬は第6群の土器が示す時期であるということである。これらの土器の時期を絶対年代で示すなら初葬は6世紀の第3四半期、最終葬は7世紀の第2四半期である。その間約100年弱の期間にわたって古墳が機能していたと考えられる。

2. 馬具について

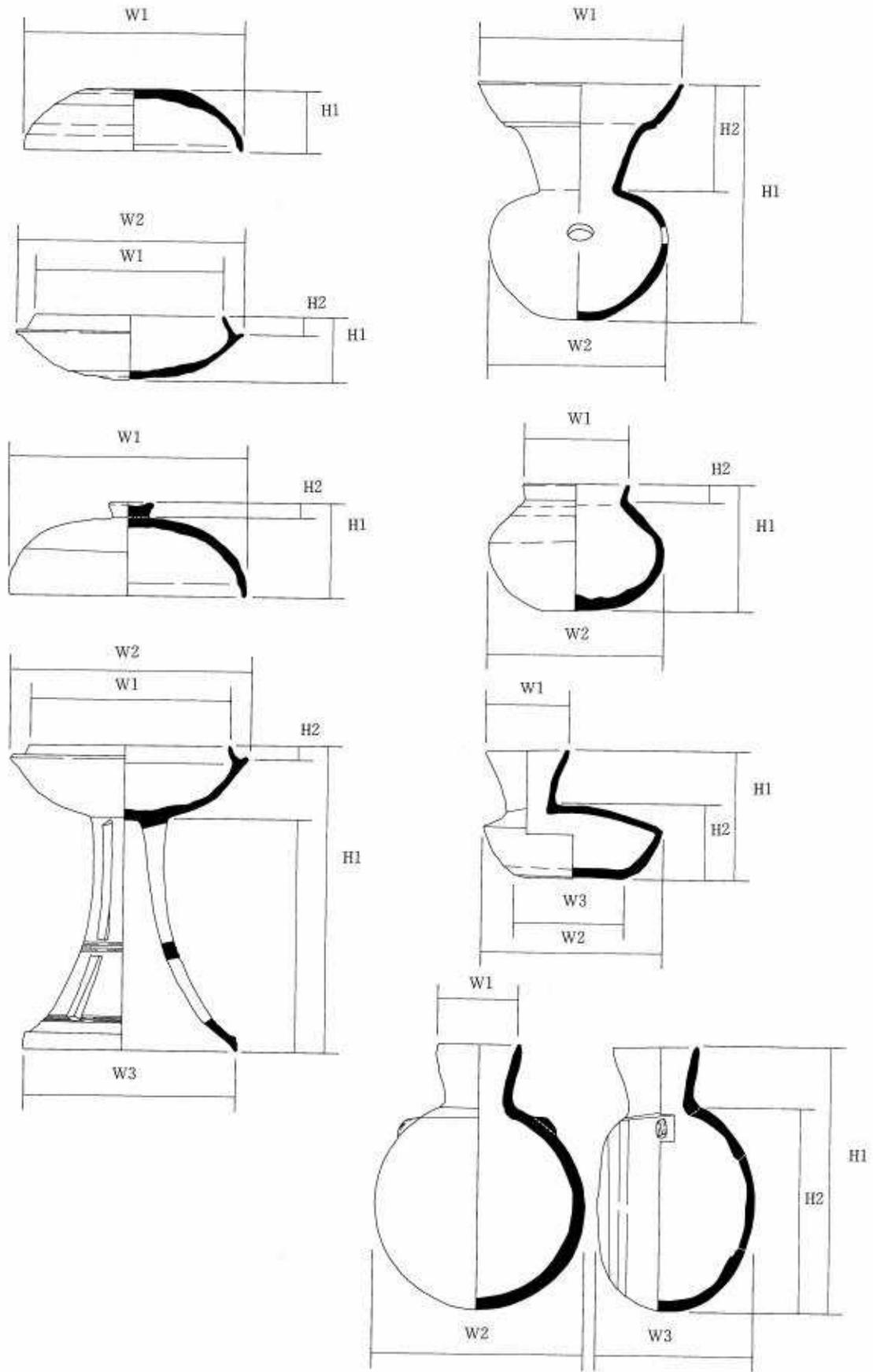
飾東2号墳からは金銅装の雲珠、辻金具をもった馬装が出土している。馬具の基本的なセットのうち鏡、轡、雲珠、辻金具が出土しているが、鞍、杏葉などは出土していない。これは当初からセットから欠落していたのか、それとも後世の攪乱によって失われたのかは判断しがたい。

馬具のうち遺存状況がよく、検討に耐えるのは鏡金具と雲珠、辻金具のみである。鏡金具は京都府湯船坂2号墳等に例のあるものであり、木製の壺鏡を固定するものである。雲珠、辻金具は半球形に方形もしくは先端部を丸くした脚を鍛接したものである。半球形に稜線は作られず、鍔金具には刻みを施したものがあつた。これらの特徴は小野山節のいうⅣ期⁽²⁾の馬具に共通する特徴である。Ⅳ期は須恵器でいうと田辺編年のTK43型式からTK209型式に相当する時期であり、おそらくこれらの馬具は初葬時に副葬されたものであろう。

註

(1) 田辺 昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966年

(2) 小野山 節『日本馬具大鑑』第1巻 古代上 日本競馬組合 1992年



第23圖 土器法量計測值凡例

表2 飾東2号墳 出土土器観察表

(*印は推定値)

報告 番号	種別	器種	出土位置	残存 状況	法 量 (cm)						胎 土	色 調	焼成
					W 1	W 2	W 3	H 1	H 2	H 3			
P 1	須恵器	杯蓋	女室3区 前庭部東	口縁1/3 体部3/4	16 *	-	-	4.3	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白~灰 内面 灰	良好
P 2	須恵器	杯蓋	羨道	1/2	14.5	-	-	4.1	-	-		外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 3	須恵器	杯蓋	羨道	口縁3/8	15.4 *	-	-	3.5 *	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を少し含 む	外面 灰白 内面 灰白	良好
P 4	須恵器	杯蓋	羨道	1/3	14.8	-	-	4.6	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 5	須恵器	杯蓋	前庭部西 前庭部東	底部2/3 体部一部欠 損	13.5	-	-	4.1	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を多く含 む	外面 灰白~淡黄 内面 灰白~淡黄	不良
P 6	須恵器	杯蓋	女室3-4区 羨道 前庭部東	口縁5/6 大部1/3	13 *	-	-	4.4	-	-		外面 暗灰 内面 暗灰	良好
P 7	須恵器	杯蓋	羨道	完形	15.1	-	-	4.0	-	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 8	須恵器	杯蓋	女室 羨道 前庭部東	口縁部欠	14.6 *	-	-	4.0	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白~灰 内面 灰白	不良
P 9	須恵器	杯蓋	羨道4区 前庭部西	口縁3/8	14.4 *	-	-	3.8	-	-	細かい砂粒含 む	外面 明青灰・灰 内面 明青灰~青 灰	良好
P10	須恵器	杯身	前庭部東 墳丘南東部	口縁1/2 体部1/3	11.9 *	13.9 *	-	-	4.1 *	1.3	細かい砂粒含む 外面 明青灰 内面 灰白	良好	
P11	須恵器	杯身	羨道 羨門	口縁わずか	12.8 *	15.0	-	3.2 *	1.1	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P12	須恵器	杯身	女室1区	口縁1/4	12.5 *	15.3 *	-	4.3	1.2	-	細かい砂粒含 む	外面 灰 内面 灰	良好
P13	須恵器	杯身	羨道	口縁1/4	13.0 *	15.4 *	-	3.5	0.9	-	細かい砂粒含 む	外面 灰 内面 灰白	良好
P14	須恵器	杯身	女室3区	口縁1/8	14.1 *	16.7 *	-	4.8	0.8	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰白 内面 灰白	良好
P15	須恵器	杯身	羨道1区	口縁1/4	14.0 *	16.6	-	2.8 *	0.8	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰 内面 灰	良好

報告 番号	種別	器種	出土位置	残 存 状 況	法 量 (cm)						胎 土	色 調	焼成
					W 1	W 2	W 3	H 1	H 2	H 3			
P 16	須恵器	杯身	支室1・3区	口縁1/4	15.1 *	17.8	—	4.2 *	0.8	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 17	須恵器	杯身	前庭部東	口縁1/3	13.8 *	16.5 *	—	3.9 *	0.8	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 18	須恵器	杯身	羨道中央部	1/4	12.3 *	14.6 *	—	3.6 *	0.9	—	φ1-2mmくら いの砂粒含む	外面 青灰 内面 青灰	良好
P 19	須恵器	杯身	羨道3区	1/4	12.9 *	15.2 *	—	3.7 *	0.7	—	φ1-2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 20	須恵器	杯身	前庭部東	1/4	13.1 *	15.1	—	3.4 *	0.7	—	φ1-2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 21	須恵器	杯身	羨道 羨門	3/4	12.5	15.1	—	3.9	0.6	—	φ2-5mmくら いの砂粒含む	外面 青灰 内面 赤灰	良好
P 22	須恵器	杯身	前庭部東	2/3	11.3 *	14.0 *	—	3.8	0.7	—		外面 灰白-灰 内面 灰	良好
P 23	須恵器	杯身	前庭部	2/3	11.9	—	9.0	3.9	—	—	細かい砂粒含 む	外面 淡黄 内面 浅黄	不良
P 24	須恵器	杯身	羨道3区	完形	11.1	—	8.1	4.3	—	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白-灰 内面 灰	良好
P 25	須恵器	高杯蓋	支室	口縁1/2	15.6	—	—	6.3	1.0	—	φ1-2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 26	須恵器	高杯蓋	支室3区 羨道	口縁1/2	16 *	—	—	5 *	—	—		外面 灰白-灰 内面 灰	良好
P 27	須恵器	高杯蓋	羨道1・2区	口縁1/12	15.8 *	—	—	4.2 *	0.5	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白 内面 灰白	良好
P 28	須恵器	高杯	支室3・4区 付近 羨道	1/2	13.5	16.0	14.3	20.5	0.8	14.7		外面 灰白-灰 内面 灰白-灰	良好
P 29	須恵器	高杯	羨道中央部 前庭部東	3/4	14.1	16.6	14.6	21.2	1.0	15.6	φ1-3mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 30	須恵器	高杯	前庭部東	杯部1/4	13.0 *	—	—	3.7 *	—	—	φ1mmくらいの 砂粒を少し含 む	外面 灰白 内面 灰白-灰	良好

報告 番号	種別	器種	出土位置	残存 状況	法 量 (cm)						胎 土	色 調	焼成
					W 1	W 2	W 3	H 1	H 2	H 3			
P 31	須恵器	高杯	玄室1・3区	杯部3/3	12.7 *	-	-	4.4 *	-	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 32	須恵器	高杯	前庭部東 墳丘東南裾 南東部	口縁部欠	11.5 *	-	11.4	14.7 *	-	-		外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 33	須恵器	高杯脚	玄室	脚部1/2	-	-	11.0	-	7.3	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰白~灰 内面 青灰	良好
P 34	須恵器	高杯脚	玄室1区	脚部1/8	-	-	13.7 *	-	4.2 *	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰 内面 灰	良好
P 35	須恵器	高杯脚	羨道	脚部1/4	-	-	15.3 *	-	7.5 *	-		外面 灰 内面 灰	良好
P 36	須恵器	はそう	前庭部東	口縁1/2	13.7 *	-	-	-	7.1 *	-	φ1mmくらいの 砂粒を少し含 む	外面 黒・オリーブ灰 内面 灰・オリーブ・浅 黄	良好
P 37	須恵器	はそう	前庭部東	口縁1/2	11.5 *	-	-	-	5.4 *	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 明青灰 内面 灰白	やや不良
P 38	須恵器	はそう	羨道	口縁1/2	14.3	-	-	-	2.3 *	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 39	須恵器	はそう	玄室1・3区 羨門	体部3/4	-	9.6 *	-	-	-	-		外面 灰白~灰 内面 灰	良好
P 40	須恵器	提瓶	羨道	口縁1/4	5.4 *	14.1	10.6	17.8	13.5	-	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 青灰 内面 灰	良好
P 41	須恵器	提瓶	羨道3区 前庭部東	体部1/4	7.2	-	-	-	-	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 42	須恵器	平瓶	羨道3区	完形	5.4	12.1	7.4	8.7	5.0	-	細かい砂粒含 む	外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 43	須恵器	短頸壺	前庭部東	口縁5/8	6.5 *	-	-	-	1.1	-	細かい砂粒含 む	外面 灰白~灰 内面 灰白~灰	良好
P 44	須恵器	短頸壺	玄室2区	完形	5.1	9.9	-	8.6	2.1	-		外面 灰白~灰 黒 内面 灰白~黒	良好 自然釉付 着
P 45	須恵器	短頸壺	羨道3区	完形	6.9	11.7	-	8.5	1.0	-	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰白~灰 内面 灰白	良好

報告 番号	種別	器種	出土位置	残 存 状 況	法 量 (cm)						胎 土	色 調	焼成
					W 1	W 2	W 3	H 1	H 2	H 3			
P46	須恵器	短頸壺	玄室3・4区 羨門	口縁1/6	9.0 *	—	—	—	0.8	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白 内面 灰白	良好
P47	須恵器	短頸壺	玄室 羨道	口縁3/4 体部1/3	9.2	13.2	—	13.2 *	3.8 *	—	φ1mmくらいの 砂粒を含む	外面 灰白-灰 内面 灰白-灰	良好
P48	須恵器	短頸壺	羨道2区 前庭部東	1/3	11.2 *	19.4 *	—	15.2 *	3.5	—	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰白・暗灰 内面 灰	良好
P49	須恵器	壺	墳丘東南裾 東南崖下 前庭部入口		30.4 *	—	—	—	14.8	—			良好
P50	須恵器	壺	墳丘南東部		32.4	—	—	—	12.0	—			良好
P51	須恵器	壺	玄室・羨道 前庭部東 墳丘南東部		23.8	46.4	—	—	4.4	—			良好
P52	須恵器	壺	前庭部東	口縁2/3	13.6	—	—	—	2.4	—	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰・灰白 内面 灰白	良好
P53	須恵器	壺	墳丘南東部	口縁1/8	22.8	—	—	—	4.0	—	φ1~2mmくら いの砂粒含む	外面 灰 内面 灰白・灰	良好
P54	須恵器	壺	墳丘南東部 前庭部	—	28.2 *	—	—	—	2.9 *	—		外面 明オリーブ 灰~灰オリーブ 内面 灰白・明黄 褐	良好
P55	須恵器	壺	玄室1・2区	頸部1/6	—	—	—	—	—	—		外面 褐灰 内面 暗赤灰	良好
P56	土師器	碗	羨道1区 前庭部東	口縁2/3	9.3 *	—	—	3.1 *	—	—		外面 淡赤橙 内面 淡赤橙	良好
P57	土師器	碗	羨道	口縁1/2	8.4 *	—	—	5.4 *	—	—		外面 にぶい橙- にぶい赤褐 内面 橙	良好
P58	土師器	高杯	玄室1~2区 間 前庭部東	2/3	17.7 *	—	—	10.5 *	—	—		外面 浅黄橙 内面 灰白・浅黄 橙	良好
P59	土師器	高杯脚	羨道	脚部1/2	—	—	—	7.6 *	—	—		外面 橙-にぶい 赤褐 内面 橙-浅黄	良好
P60	須恵器	碗	玄室 羨道 東周溝	2/3	16.6	—	4.7	4.9	—	—	細かい砂粒、 φ2~3mmの小 石含む	外面 青灰 内面 青灰	良好

報告 番号	種別	器種	出土位置	残存 状況	法 量 (cm)						胎 土	色 調	焼成
					W 1	W 2	W 3	H 1	H 2	H 3			
P 61	須恵器	鉢	女室 羨道	3/4	16.2	-	6.2	5.0	-	-	細かい砂粒、 φ2~4mmの小 石を含む	外面 青灰 内面 青灰	良好
P 62	須恵器	鉢	女室 羨道	口縁7/8	15.3	-	-	3.3 *	-	-	細かい砂粒含 む	外面 灰 内面 灰	良好
P 63	須恵器	羽釜	不明	1/9	12.5	-	-	4.4	-	-		外面 灰白~灰 内面 灰白	良好

第5章 まとめ

1. 調査結果のまとめ

まず飾東2号墳の調査の結果を簡単にまとめておく。2号墳は3基の古墳からなる飾東古墳群の中の1基であり、群中の西端に位置する。築造時期は6世紀後半、須恵器の型式でいうと田辺編年のTK43型式の時期である。以後、7世紀前半まで複数回の追葬がおこなわれ最終の追葬は7世紀中葉、田辺編年のTK217型式の時期である。このあとしばらく時間を隔てた鎌倉時代に石室の再利用が行われており、この頃までには石室が開口していたようである。

墳丘はかなり削平を受けているが、墳丘と背後の斜面の間に周濠を掘削し盛土で構築したものであり、最大径が18mである。墳丘の南面には平坦地（前庭部）が設けられている。

内部構造は全長8.9mの右片袖の横穴式石室を埋葬施設としており、南へ開口する。各部の寸法は高麗尺（1尺約36cm）に換算すると、玄室長・玄室幅・玄室高・羨道長・羨道幅がおおよそ、10・5・8・15・3尺の割合になっている。寸法、平面プラン、構築技術のいずれをとっても畿内的な横穴式石室である。この石室の中には棺と副葬品が納められていた。棺は全く残存していなかったが、多量の釘が出土したことから、木製の棺であったと判断する。

副葬品は、後世の攪乱のためにかなりのものが失われたと推定するが、須恵器・土師器の土器、馬具・耳環などの金属製品が出土している。馬具は辻金具・雲珠・鍔が出土しているが、辻金具・雲珠は金装のものであった。馬具は6世紀後半に比定できるものであり、初葬時に副葬されたものであろう。

以上が飾東2号墳の概略であるが、この古墳の歴史的な位置付けをおこなうために、まず飾東古墳群について考えてみる。

2. 飾東古墳群について

飾東古墳群では3基の古墳が確認されているが、この他にも既に破壊され消滅した古墳が存在した可能性もある。このうち1号墳と2号墳が調査によって内容があきらかになっている。1号墳はT字形の横穴式石室を埋葬施設とする円墳であり、2号墳の東約30mに位置する。規模は2号墳と比して小型であり、6世紀後半～7世紀初頭の遺物が出土している。T字型石室は6世紀前半の導入期の横穴式石室に多く見られるため、1号墳の方が2号墳の築造に先立ち築造されたものであるという見方もあったが、現時点で得られる遺物では6世紀後半の築造、それも2号墳におくれるものと判断するほかない。今後、1号墳の石室内の調査が行われ、新たな遺物が得られれば築造時期が明らかになるであろうが、とりあえず1号墳は2号墳に遅れるものであるとして記述を進める。

2号墳が1号墳に先立つものであるならば、これよりも古い古墳が群中に存在する可能性は低い。というのも、2号墳は南へ張り出す尾根上に位置しており、背後の切断によって最も容易に墳丘が築ける場所を占地している。このような墳丘構築の最適地は、最初に築かれた古墳が占めるのが一般的であるからである。また、墳丘規模が群中最大であることも、これが古墳群築造の契機になった古墳であることを示唆している。おそらく2号墳という大型の横穴式石室墳が6世紀後半に築かれ、これに続いて他の古墳が築かれてゆき、結果として飾東古墳群が形成されたと考える。この古墳群の特徴は墳丘規模が10mを越える比較的大型の古墳のみによって形成されているという点である。小型古墳のみからなる古墳群や大型・小型の古墳が同一の墓域内に分布する古墳群とはその構成が異なる。

次に飾東古墳群を築造した人びとが住んでいた集落について考えたい。飾東古墳群がある姫路市飾東町豊国周辺では、現在のところ古墳時代後期の集落遺跡の調査例がなく、集落が存在したかどうか、またその規模や内容等について全く明らかになっていない。そこで、地形を考慮してその場所を推定してみる。飾東古墳群の南側には、天川に向かって小規模な扇状地が形成されており、現在の豊国の集落がこの上に立地している。古墳時代の集落は、播磨においては段丘上や扇状地の末端部など、前時期よりも高燥の地に立地する例が多い。おそらく、この扇状地の末端部付近に集落が位置していた可能性が高いと考える。扇状地の末端部付近から見ると飾東古墳群は、谷を上りつめた最奥に位置しており、奥津城と呼ぶに相応しい立地となる。

扇状地の東側には天川に沿う狭い沖積低地があり、比較的広い可耕地が広がっている。天川上流域、現在の姫路市飾東町周辺をひとつのまとまった地域として考えると、豊国はその最南端にあたり、流域を支配する拠点として相応しい場所である。また飾東2号墳に副葬された須恵器は、胎土分析の結果、天川上流にある大釜の中世瓦窯で使用された胎土に近いものであることが判明している。在地産の須恵器を副葬していることも、飾東2号墳を築造した人々が天川上流域に基盤を有していたことの証拠となるであろう。

このように、飾東古墳群は天川上流域の支配拠点となるであろう集落の背後に位置すると考えられ、この地域の首長の墳墓であると考えられる。その地位は、律令制の郡単位の領域の支配者である国造クラスの豪族の下に位置する村落共同体（律令制の里に相当）レベルの首長と規定できよう。古墳の規模が6世紀後半の群集墳を形成する一般的な古墳よりも大きいこと、金銅製の馬具をもつ家形石棺をもたないことなど、飾東2号墳がもつ諸要素が、この古墳が一集落の首長（すなわち家父長）よりは上位に位置し、古墳時代中期以来の系譜をひく地方豪族クラスよりも下位に位置する首長クラスの墓であることを物語っている。

3. 市川下流域における後期古墳の動態

次に飾東古墳群が何故に6世紀にこの場所に形成されたのか、言い換えれば天川上流域の首長が何故、6世紀後半になって古墳の築造を開始し、また7世紀中葉に古墳への埋葬を停止したのか考えてみたい。そのためには後期古墳の内包する歴史的な意義を確認しておく必要がある。

まず研究史をふりかえってみると後期古墳の研究において、群集墳の研究が重要な課題であったことは言を待たない。古くは近藤義郎の「佐良山古墳群の研究」⁽¹⁾にはじまり、以後、白石太一郎⁽²⁾、広瀬和雄⁽³⁾らによって研究が進められてきた。これらの研究の主要なテーマは、大首長のみ限定されてきた古墳の造営という行為が何故、6世紀以降、より下層の家父長層にまで可能となったかということである。現在では群集墳の中にも時期的、地域的な差により様々なタイプが存在することがあきらかになっており、和田晴吾らによって群集墳の再定義がおこなわれ、群集墳の発生から消滅に至るプロセスが整理されている⁽⁴⁾。そこでの重要な指摘は、飾東古墳群のような古墳時代後期の群集墳は、中期において台頭してきた新興勢力（新興首長層・有力家父長層）と結んだヤマト朝廷が、大首長による地域支配という中期的な体制を解体し、より直接的な支配に乗り出したことの証であるということである。

この視点で播磨のうち飾東古墳群のある姫路市周辺をながめてみよう。姫路市はその中心部は市川下流域であり、この流域における古墳時代中期以降の首長墓の系譜は、壇上山古墳－山ノ腰古墳－宮山古墳－見野長塚古墳と想定されている⁽⁵⁾。6世紀後半以降の首長墓については、近世以降の姫路城築城

や城下町の整備、その後の都市開発によってかなりの古墳が既に失われていることもあって、その実態はあきらかでない。姫路市北平野町の御輿塚古墳がこの時期の首長墓としてあげられることがあるが、石室規模が市川下流域の同時期の古墳の中で卓越しているわけではないことや、場所がそれまでの首長墓の造営地とかなり隔たっていることなどから疑問が残る。既に失われている古墳のなかに首長墓にふさわしい規模と内容をもった古墳が存在した可能性も否定できない。

6世紀後半の首長墓については今後の検討に委ねるとしても、先に述べた5世紀前半から6世紀前半に至る首長墓の変遷を眺めると、中期の壇上山古墳をピークとして次第に首長墓の規模が縮小していることが窺える。この首長墓の縮小と反比例するように、姫路市山田町の多田古墳などのような新興首長の墓と思われる古墳が出現したり、6世紀後半以降、群集墳が爆発的に築造されたりするのである。後期の群集墳は主に壇上山古墳の南側、市川と天川に挟まれた丘陵地帯に分布している。阿保百穴古墳群、仁寿山古墳群、坂本山古墳群、火山古墳群など10-15基程度の古墳からなる古墳群が丘陵毎に密に分布している。

このような中期から後期への大きな変化はなぜ生じたのであろうか。古墳そのものの調査例が少なくまた同時期の集落遺跡の調査例もない現在の状況では、考古学的方法でこの変化の原因を解明することは不可能である。そのためには文献史学の研究成果を援用するのが適当であろう。そこで、播磨における最大の首長であった播磨国造について考えてみる。

播磨の国造は播磨国飾磨郡を本拠とする針間国造であると推定されている。針間国造の氏姓は佐伯直である。⁽⁶⁾佐伯直は佐伯部を管掌する伴造であり、佐伯部を率いて都へ上番し、中央豪族である佐伯連の指揮の下、宮門警備の任にあたる氏族である。佐伯直は各国に分置された佐伯部の管掌者として国造の一族に与えられた氏姓であり、この佐伯直は中央豪族の佐伯連と氏姓制度的な関係、すなわち擬制的同族関係を有していた。佐伯部の成立は雄略朝以前と推定されている⁽⁷⁾。これを西暦で言うと5世紀後半以前である。佐伯部は律令制には引き継がれておらず、大化前代、おそらく6世紀代には既にその実体を失っていたとされている。

播磨国造の奥津城は先に述べた市川下流域の首長墓系列の各大型古墳に比定されており、最大の前方後円墳である壇上山古墳が造られた時代、すなわち5世紀前半が播磨国造家の最盛期である。全国的に5世紀後半以降、首長墓の規模が縮小する傾向は認められるが、市川下流域における縮小は急激であり、また縮小の度合いも著しいものがある。これは大和の大王家を頂点として構成される古墳時代の階層社会における市川下流域の首長、すなわち播磨国造の地位が低下したことを物語っているのであろう。

これを先の佐伯部の成立の時期と比べてみると、播磨国造の勢力が下降しはじめた頃に佐伯部が播磨に設定され、播磨国造が佐伯直として中央豪族佐伯連と擬制的同族関係を結んでいる。また佐伯部の制が形骸化し、中央においても古い軍事氏族である大伴連や佐伯連がヤマト政権の中核から後退し、代わって蘇我臣や物部連が政権中核に現れる6世紀後半以降になると、市川流域においては顕著な首長墓は見られなくなるのである。

文献から知りえる播磨国造の動向と首長墓の動向を見ると、市川下流における首長墓の衰退は、ヤマト政権の動向と密接に関係しているらしいことが窺える。すなわち佐伯部の設定はヤマト政権の意思によって行われたものであり、その地のひとつとして播磨が選択されたのは、播磨が強力な地方豪族（国造家）によって半独立的に支配された地域ではなく、ヤマト政権の意思に容易に従う地であったことを物語る。佐伯部を率いての上番と宮門警護という、佐伯直に与えられた職務はヤマト政権への完全なる

服属を前提にしたものである。また佐伯連との氏族制的な関係も、地方における支配者としての地位の保証を中央の有力氏族である佐伯連との関係に求めた結果と解釈できる。

このように播磨国造は5世紀後半以降、地方における主体的支配を放棄し、ヤマト政権の枠の中で生き残る道を選択したのである。これは5世紀以降顕著になる渡来人の流入に伴いもたらされた諸分野における技術革新が、国造支配下の人々の生産力を向上させ、その社会的地位を高めたことに由来するのであろう。すなわち、支配下の人々の地位の向上により、支配者である国造の相対的地位が低下し、従来の経済的、軍事的優越が絶対的なものではなくなったため、その支配の正当性を維持するためにヤマト政権の権威を借りる必要が生じたのである。

しかし、6世紀以降、ヤマト政権の軍事的基礎は大伴連や佐伯連といっ連姓伴造に率いられた軍隊から、東国の国造の一族をもって編成された舍人軍に移行してゆく。また佐伯連や大伴連がヤマト朝廷の中樞から後退し、かわって物部連や蘇我臣といった豪族に代わられる。これに伴い、ヤマト朝廷における佐伯部の管掌者の地位は低下し、佐伯連-佐伯直という氏族制の関係も在地における優位を保証するものではなくなったのであろう。6世紀以降、他に卓越する古墳を築くこともなく、その相対的地位の低下が著しくなるのである。

この播磨国造家の没落と軌を一にして、6世紀代には小地域単位の中小の首長墓の造営や群集墳の形成が始まるのである。古墳時代に続く飛鳥時代、ことに7世紀中葉の大化の改新以後、屯倉・田荘の廃止、国一評一里制の施行など、地方豪族による土地・人民支配の否定と中央集権的な地方支配体制の確立が志向されている。このような動きは7世紀になって突然始まったのではなく、6世紀代から中央における官司制の整備などその先駆けは認められる。村落単位の首長を直接掌握し、ヤマト政権から地方の土地・人民までの距離を短縮するための手段として、地方豪族のヤマト朝廷に対する服属の度合いや新興首長の成長の度合いなどの諸条件さえ整えば、地方豪族の在地にたいする支配に介入し、彼らの新興首長に対する支配を否定し、新たな秩序を編成することが行われていたと推測できる。その際、ヤマト政権は新興の村落単位の首長を把握するために、その証として政権を構成する中央豪族や国造等の地方豪族との同祖同族関係への編入をおこない、古墳の築造や畿内的な横穴式石室による埋葬儀礼をおこなうことを容認したのであろう。

市川流域では、後期の群集墳はかつての播磨国造家の墓域である市川と天川に挟まれた丘陵地帯に集中している。これは6世紀後半になって、ヤマト政権による新たな身分秩序に組み入れられた人々が、播磨国造家との擬制的同族関係によって中央に結び付けられたことを物語るのであろう。すなわちかつて播磨国造家が単独で結んだ佐伯連-佐伯直という同族関係を市川下流域の新興の首長にまで敷衍し、これによってヤマト政権と新興首長が結びついたのである。

7世紀前半から中葉にかけて大半の群集墳はその築造を終え、また追葬もおこなわれなくなる。これは、仏教の伝来による火葬の風習の導入といった宗教的な要素や、大化の薄葬令による古墳築造の規制といった制度的な要素だけでなく、ヤマト朝廷による地方支配原理の変革にその要因を求めるべきであろう。すなわち、先にも述べたように、ヤマト朝廷の地方支配体制の究極の理想形は地方の土地・人民の直接的支配であり、後期群集墳の形成の背景にあった氏族制を媒介とした村落単位の首長を通じての土地・人民支配という古墳時代後期的な支配体制は、いずれ否定されるべきものであった。この古墳時代後期的支配体制が否定された時、それまで意味のあった古墳築造・横穴式石室における葬送儀礼といった習俗面での大和朝廷との結び付きの証や氏族制に基づく有力豪族との同族関係はなんら意味をも

たなくなったのである。それに代わって地方における支配階級の地位を保証したのは、評（郡）一里という律令的な地方支配の機構の中において、中央政府によって郡司や里長という官職に任命されることであった。

地方における首長階級の地位が古墳の築造というような習俗的なレベルでの特権の獲得や中央豪族との擬制的同族関係といった私的な関係の構築によって象徴されるのではなく、官位・官職といった中央政権によって保証された肩書によって象徴されるようになったのである。

4. 再び飾東2号墳について

市川下流域において進行した古墳時代中期から後期にかけての変革を理解することにより、飾東2号墳の築造契機と追葬の停止の理由も理解できる。飾東古墳群は、天川上流域の村落共同体レベルの首長の墓であることを先に指摘した。そしてこの古墳群は市川下流域の首長墓の墓域からはやや北に外れており、市川と天川に挟まれた丘陵地帯に分布する群集墳、すなわち播磨国造家との擬制的同族関係によってヤマト政権と結びついた首長層とは性格を異にする首長の古墳であることを物語る。ただし、飾東古墳群の築造者も播磨国造と全く無関係であったわけではないであろう。ただヤマト政権の秩序に組み込まれる際に、播磨国造や佐伯連を媒介としなかったということである。それではこの首長はどのようにしてヤマト政権との関係を構築したのであろうか。この点については『播磨国風土記』がヒントを与えてくれる。

姫路市飾東町周辺は『播磨国風土記』に記載されている飾磨郡少川里に比定されている。その伝承によれば少川里は本の名を私里（きさきのさと）と言い、欽明天皇の時代に私部弓束等の祖、田又利君鼻留がこの地におり、これに因んで私里と名付けたという。田又利君は多々良公であり、朝鮮半島からの渡来系の氏族であり、また私部は皇后のために置かれた部民である。またもうひとつ豊国村という地名の伝承もあり、ここではこの地に筑紫豊之神がありそれにちなんで豊国と名付けたという⁽⁸⁾。おそらく豊の国（現在の福岡県・大分県）からの移住者がその信仰の対象として、故郷で祀っていた筑紫豊之神をこの地に移し祀ったものであろう。

地名の起源説話であるため、その内容に完全に信を置くことはできなが、地名の起源がいずれも渡来系氏族の存在や九州からの移住者といった外部からの移住者に関して語られている点については注意すべきであろう。この地の古墳時代の住人が私部氏であったかあるいは九州から移住した氏族であったかは別にして、外来者にちなんで地名が述べられるのは、この地の開発が新しく、それも外部からの移住者によって行われたことが長く記憶されていたことの反映であろう。

飾東古墳群はこのような外部から移住しこの地を開発した新興の首長によって築かれたものなのであろう。また私里という古名や私部氏の存在を匂わせる伝承は、この地の首長が大王家に近い関係にあった人物であったことを物語るのかもしれない。

飾東2号墳はこのようにヤマト政権と結びついた新興の氏族の最初の首長が葬られた墓であり、副葬された豪華な馬具は新秩序への参加の証として中央の有力豪族から与えられたものであろう。また7世紀における埋葬の停止は、先に述べた地方支配体制の変革に伴い古墳築造や埋葬といった行為に付与されていた政治的意味の消滅に伴うものである。飾東古墳群に埋葬された人々の後裔は律令体制の中で、里長のような支配機構の末端の役職を得て、新しい時代に対応していったのであろう。

以上、長々と述べてきたが、播磨における群集墳の出現と消滅も、畿内一円において進行した政治的

な動向の中で理解できるものであることを確認しておく。なお、遺物・遺構から引き出せる文化的側面についての検討が不十分であるが、これについては事実報告を参照して研究を進めていただきたい。

註

- (1) 近藤 義郎 『佐良山古墳群の研究』 1952年
- (2) 白石太一郎 「大型古墳と群集墳－群集墳の形成と同族系譜の成立」
『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』2 1973年
- (3) 広瀬 和雄 「群集墳論序説」 『古代研究』15 1978年
- (4) 和田 晴吾 「群集墳と終末期古墳」 『新版古代の日本』5 近畿Ⅰ 1992年
- (5) 櫃本 誠一 「各地域における最後の前方後円墳 <兵庫県南西部>－播磨地方」
『古代学研究』104 1984年
- (6) 佐伯有清・高嶋弘志編 『国造・県主関係史料集』 日本史料選書22 1982年
- (7) 井上 光貞 「大和国家の軍事的基礎」 『日本古代史の諸問題』 1949年
- (8) 秋本吉郎校注 『風土記』 日本古典文学大系 1958年

付 載

飾東1号墳

調査の経緯（大村）

飾東1号墳（以下、1号墳）は、T字形構造をもつ横穴式石室古墳として、古くから研究誌等に散見し、広く知られた古墳である。

当1号墳は、山陽自動車道建設において2号墳同様、道路本線に平行する側道部に位置している。よって、県教育委員会では分布調査時から学術的に貴重な古墳を側道の設計変更によって、現状保存をされるように申し入れてきた。更に改めて昭和61年度から現状保存について協議を重ねてきた。

しかし、日本道路公団ではこの保存の申し入れに対し、追加買収等によって設計変更を実施することは不可能であるとの判断で当初の計画通り、記録保存で望みたい回答があった。

この回答に対し、県教育委員会では県文化財保護審議会の埋蔵文化財部会による現地視察の結果にもとずき、再度、現状保存を申し入れた。更に実施設計図と現地を照合するため、現地立会いを実施してきた。

その結果、墳丘から石室の奥壁部が側道によって破壊されることが判明した。よって、再度、設計変更による現状保存を強く申し入れるなかで、日本道路公団は地元住民から古墳の保存を望む声が高まることも合わせて、設計変更を検討された結果、ようやく保存の決定がなされた。

しかし、残念ながら設計変更による保存決定にもかかわらず、どうしても墳丘裾部にかかるため、古墳の規模等を確認するための調査を実施した。（平成6年3月7日～3月18日の期間、西口和彦・深井明比古・山上雅弘・仁尾一人が担当）

なお、側道にかかる墳丘の調査は、今後実施する予定である。

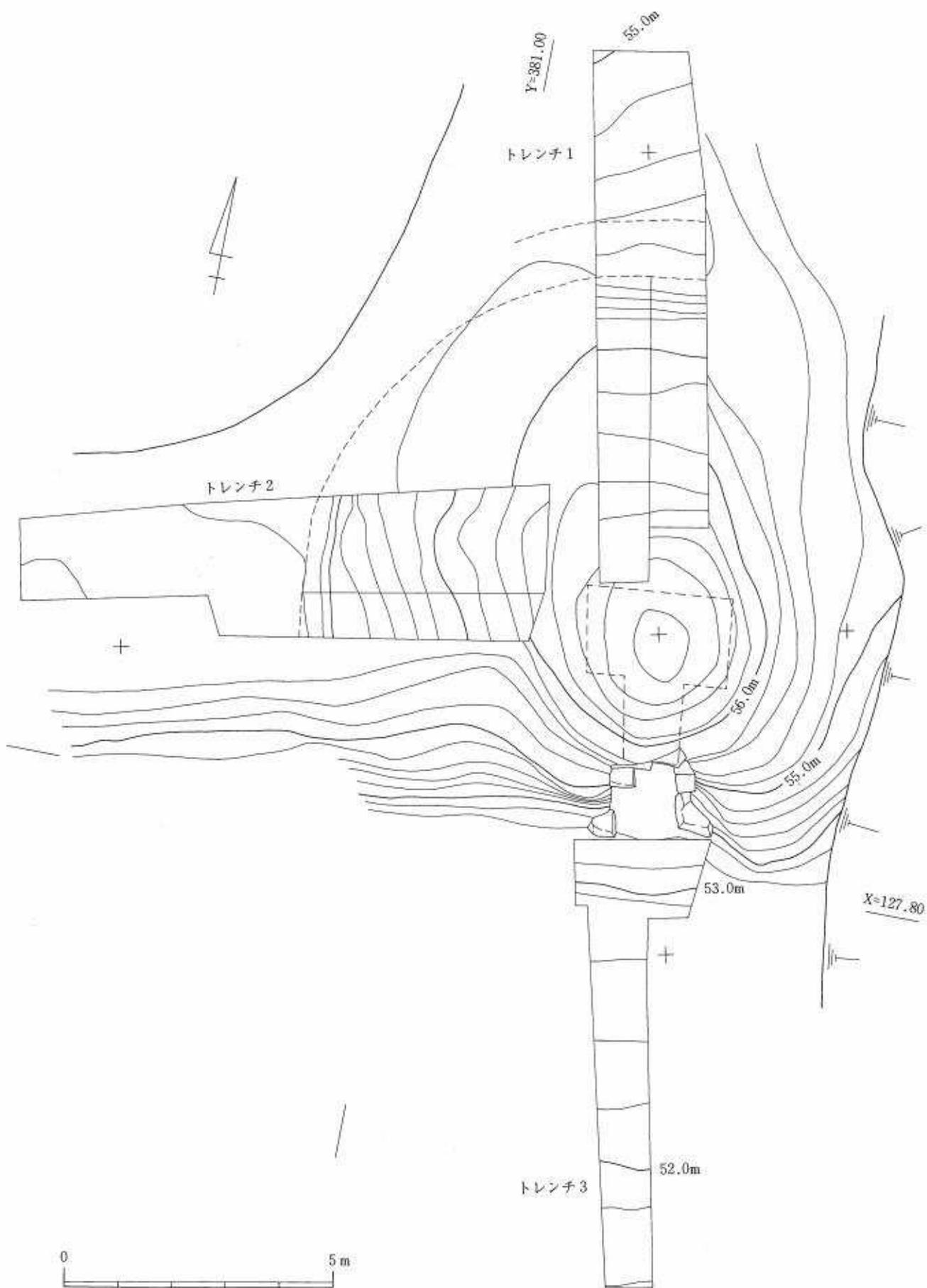
調査の成果（仁尾）

1. 立地

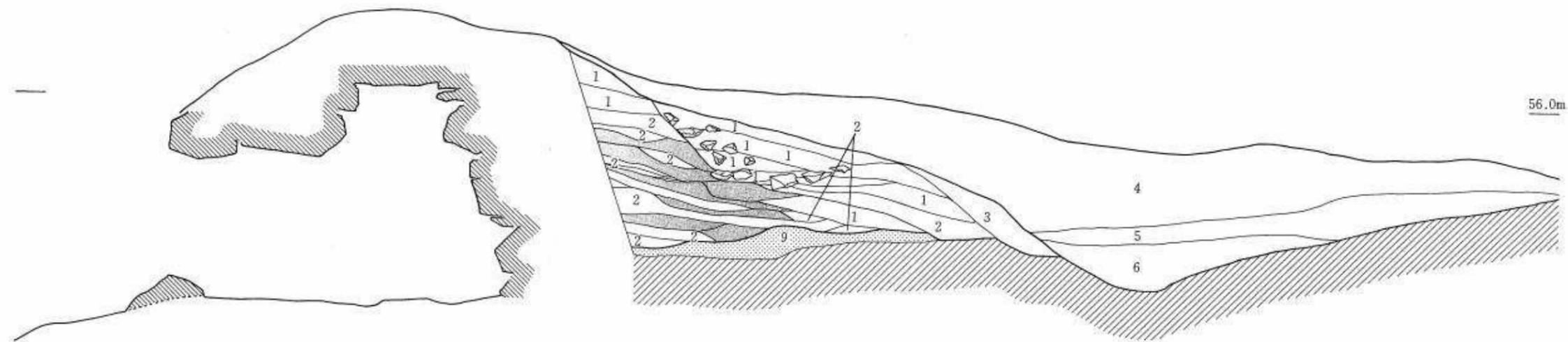
1号墳は、山陵から平野部へ伸びる尾根が比較的緩やかに傾斜した南側斜面に立地する円墳である。標高は古墳墳頂で56.8m、墳丘南、石室開口部で54.4mを測る。1号墳の東側より北方向へは深い谷地形となっていくが、古墳周辺は傾斜変換点となっているため、緩傾斜地形である。古墳選地はこの緩傾斜地形を利用し、3基からなる飾東古墳群が形成されており、このうち、2号墳は古墳群西端に位置し、その東側約30mに1号墳が立地している。また、3号墳は1号墳と谷をはさんで約50m北東に立地している。

2. 墳丘および、古墳構築（第24・25図、図版32・33・34）

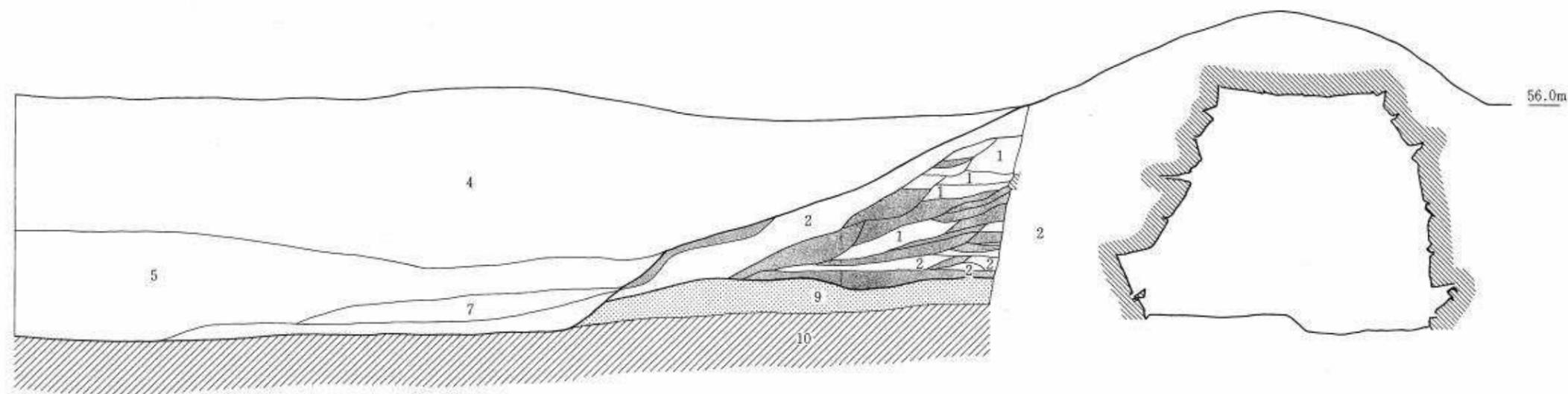
1号墳は、墳丘を再利用し構築した、古墳の北西にある溜池の堰堤の一部として、北方および、西方に盛土がなされている。東方は北より続く深い落ち込みが墳丘の東側一部を浸食し大きな開析となり、墳丘南側の前庭部は、畑として開墾されており、ここでも墳丘は削平をうけている。このため、現在の墳丘は、周辺の地形とともに、後世の人為的あるいは、自然による影響をうけており、J字形に改変され、墳頂はわずかに1m程の高まりとして確認できる状況である。



第24図 飾東1号墳 墳丘測量図 (S=1/100)



1. 暗黄褐色度 (小礫混じり)
 2. 暗棕色土 (表土直下の地山土を盛ったもの)
 3. 暗黄褐色土 (やや大きい礫を含むものあり、地山土)
 4. 黄褐色シルト (池の堰堤盛土)
 5. 暗黄褐色シルト (池の堰堤盛土)
 6. 暗黄褐色シルト (周濠の埋土)
 7. 暗黄色礫混じり土 (池の堰堤盛土)
 8. 暗黄色礫砂混じり土 (池の堰堤盛土)
 9. 旧表土
 10. 暗橙～淡黄色シルト (地山)
- 暗色のスクリーントーンは暗褐色シルト (地山の土壌化した土を撞き固めたもの)



第25図 飾東1号墳 墳丘断面図 (S=1/50)

調査は、事前に墳丘規模の概略を地中レーダー探査によりもとめ、墳丘北側にトレンチ1、西側にトレンチ2、南側にトレンチ3をそれぞれ設定した。トレンチ掘削では、墳丘の確認を行うとともに古墳の構築状況の観察を目的としトレンチ1・2を一部拡張し、墳丘の断ち割りを実施した。

トレンチ調査の結果、北方および、西方における、墳丘盛土と池の堰堤盛土との土層の相違は明確であり、古墳の墳丘ラインを確認することができた。これにより、1号墳は南北13.4m、東西13.5m、墳丘北側で比高差2.6m、西裾部で3m、墳丘南、石室開口部では3.2mをそれぞれ測る墳丘規模をもつ円墳であると考えられる。

周溝は、トレンチ1において、地山を幅2.0m、深さ0.4m掘り下げ構築しているのが確認された。また、トレンチ2では墳丘裾部で地山に至り、以西平坦面が続いているため、確認することはできず、前庭部に設定したトレンチ3についても同様であった。このため、墳丘自体が削平されている東側を含め、周溝の全容を理解するには至らなかった。しかし、墳丘北側の尾根から続く標高の高い地点において、周溝の存在が確認されていることから、部分的に、限定すれば、墳丘の北西から北東方面に、一部周溝が巡っているものと推定される。

石室奥壁に近接するトレンチ1および、西壁に近接するトレンチ2では、いずれも石室の掘方が確認できるまで調査は及んでいない。しかし、第25図による石室と墳丘断面図では、石室床面のレベルは地山を掘り込んでいるのを確認することができる。また、トレンチの断面観察により、墳丘構築の作業手順の一部推定は可能であり、以下に概略を記す。但し、これらからは、石室構築と墳丘盛土の相互作業にまでには言及できず、古墳構築時における墳丘盛土状況のみに限定されるものである。

墳丘盛土には、構築過程において北側の尾根を削った土あるいは、石室掘方および、周溝掘削時の土などを用いたと考えられる。これら暗橙色土・暗褐色土・暗黄褐色土は、薄いところでは5cm程度、平均して20cm～30cm程度の厚さで交互に何層にも敷き固められ、1次的な墳丘を形作っている。その後、さらに同様の工程を繰り返し、2次的な墳丘構築が行われている。この1次的、2次的墳丘構築は、石室の構築と墳丘盛土の相互作業時に行われたもの（1次的構築）と、墳丘の形を整える意図をもって行われたもの（2次的構築）とに区別、判断できると考えられる。また、トレンチ1の土層断面（第25図）では、地山よりおよそ0.8m盛土した高さにおいて、広く平坦面を確認した他、1次的墳丘構築面の斜面および、平坦面に数個の石を検出している。これらは、石室構築、石材構築時にともなう可能性が考えられるが、考察を加えるには、トレンチ断面のみの成果であり、構築過程において意図するところは不詳である。

3. 主体部（第27図、図版35）

1号墳の主体部は、玄室の幅が奥行きに比べ広いT字形石室といわれる両袖式の横穴式石室である。石室の主軸はN4°Eをとり、墳丘南辺の中央、ほぼ真南に開口している。羨門および、羨道の一部は欠落しているが、天井石が完存する比較的残存状況の良好な主体部である。奥壁から羨門までの石室現



第26図 飾東1号墳 墳丘現況

存長は5.96m（石室の中軸線を基準）を測る。玄室長は主軸上では1.62m、東壁側で1.64m、西壁側で1.74m、玄室幅は奥壁部で2.72m、中央部で2.68m、玄門部で2.70mをそれぞれ測り、高さは2.20mである。羨道部は長さ3.18m、幅1.18m、高さ1.48mを測る。

石室は、現状の保存が図られるため、室内の清掃を実施し、詳細な実測を行った。このため、今回の確認調査による調査成果は、内部における表面的な観察のみである。またこの時、玄室床面には盗掘によると思われる攪乱状の起伏が認められ、羨道部および、石室開口部より須恵器片が出土している。

石室石材はいずれも凝灰岩を使用しており、2号墳の石室石材と石質・採掘地とも同一であると思われる。石材の規模は、天井石および、基底石には大型のものを使用し、壁面には約0.3m～0.9mの規模のものが中心に使われている。石材の表面は整形され、壁面の凹凸は感じられない。

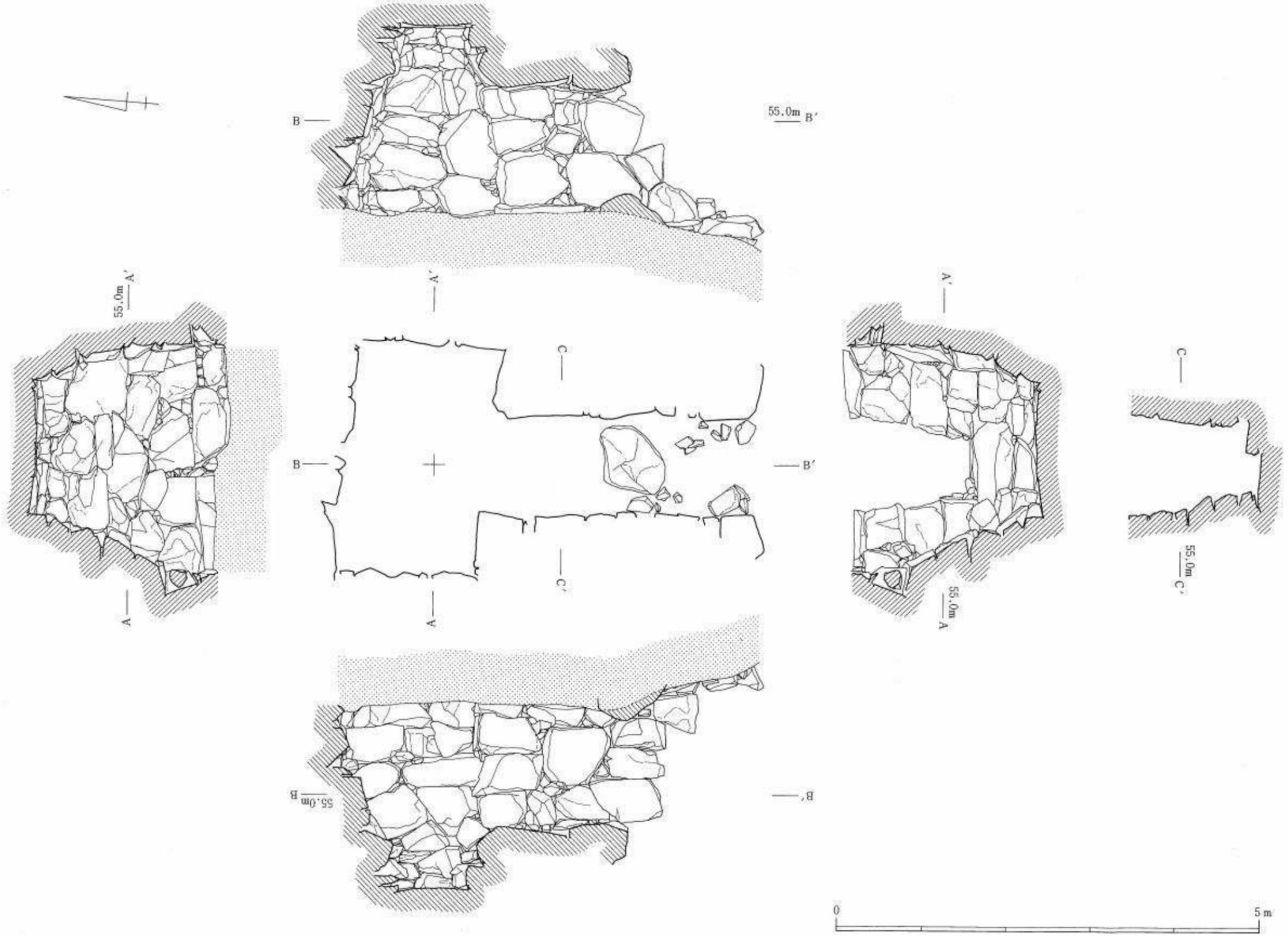
玄室は、下部から上部に石材を積み上げるにしたがい内側に傾斜する、いわゆる穹窿式の石室である。1号墳では、この穹窿式石室の特徴を示す持ち送りが、東側壁において4段目より、奥壁および、西側壁では、すでに2段目よりその様相を確認することができる。このため、約1.65m×2.70mの玄室床面は、天井部では0.80m×1.60mと約3割に縮小し、1枚の天井石が構築されている。基底石は、奥壁・側壁ともに横向きに配され、こぶし大程度の石を隙間に入れ、調整と補強を行っている。2段目以上は1石あるいは、2石を比較的高低差の少ないように、縦あるいは、横に積み上げていき、5段階にわけて構築されている。東西側壁については、基本的な構築方法は奥壁と同じであるが、奥壁にみられる段階ごとの高低差はほとんどなく、両壁ともほぼ同一レベルで積み上げが行われている。

玄門は、整形された直方体に近い石材を横におく平石積みが行われ、玄室と羨道との境界を明確に区切っている。東側袖部は、幅0.86m、西側では0.75mを測り、玄室をほぼ均等に割り付け、T字形石室の形態を特徴づけている。見上げ石は、玄室壁の4段石に相当し、大型の石が構築されている。しかし、玄室天井石には及ばず見上げ石の上にさらに2石を据え加えており、古い様式の構築技法が行われている。

羨道部は現存の入口から羨道中央付近にかけて約0.30mレベルを上げ、玄室へはそれより比較的平坦につづいている。この羨道中央のレベル変換点には0.70m×0.94m、高さ0.27mを測る大きな石があり、石の手前、入口部には数個の石が点在している。これらは、羨道の天井石および、側壁使用石が落下したものと考えられる。このことから、羨道部では、落下石下部までの土砂は後世の堆積土と判断される。構築は東西側壁とも玄門の袖部では3石を積み上げ、天井石落下付近では、2石を積み上げている。また、東側壁では欠落しているが、西側壁ではさらに3石を積み上げた状態が遺存しており、羨道部においても、玄室同様、石材の規模に応じて数石を積み上げたものと考えられる。さらに、この地点において、石室は開口し、封土は失われているが、東西両側壁では数石の基底石が残存している。天井石は2石が残存し、羨道中央に落下した石をあわせ3石が確認された。

4. 遺物（第28図・P64～P67、図版35）

1号墳は、石室内部の床面の状況や、羨門および、羨道部の崩壊等からこれまでに盗掘が行われていたことは明らかである。また、現状の羨道部および、石室床面が、古墳構築当時あるいは、追葬時の床面と判断する迄の調査には至っておらず、不明であるが、遺物はいずれもこれらより清掃中に発見されている。出土位置は、羨道部、トレンチ3、そのあいだの石室開口部である。これらの土器は、いずれも細かな破片であることから、後世の盗掘の影響を少なからずうけ、古墳に納められた当時の現位置をとどめていないものと考えられる。



第27図 飾東1号墳 石室平・断面図 (S=1/150)

土器は、古墳の副葬品と考えられる古墳時代後期の須恵器であり、杯蓋（P64）・高杯（P65）・短頸壺（P66・P67）の3器種、4点である。このうち、杯蓋（P64）・高杯（P65）・短頸壺（P66）の3点については、器種、各部の計測値等を判断することができるが、残存率の低いものである。また、P67については、胴部の接合はなされたが、口縁部は残存しておらず、わずかに確認することができる立ち上がりの稜線を根拠として、短頸壺と判断した。以下に、各遺物についての説明―記述項目は、出土位置・残存率・計測値・胎土・色調・焼成・製作技法とする―を記す。

杯蓋（P64）

羨道部より出土している。口縁部約1/9が残存しており、口径13.5cm、器高約3.2cmを測る。φ1mm弱の細かい砂粒を少量含み、内外面とも灰色である。焼成は良好で、内外面ともに回転ナデをもって仕上げている。また、天井部外面には回転ヘラけずりが確認できる。

高杯（P65）

羨道部とトレンチ3とのあいだより出土し、脚端部約1/12が残存している。無蓋高杯の長脚部と考えられるが、杯部および、脚部は欠損している。長方形透かしの跡を確認することができ、その下方には凹線が巡っている。底径13.8cmを測るが、器高は復元できない。φ1mm弱の細かい砂粒を少量含み、内面は灰白色、外面は灰白色および、一部灰色である。焼成は良好で、回転ナデで仕上げ、外面は灰かぶりとなっている。

短頸壺（P66）

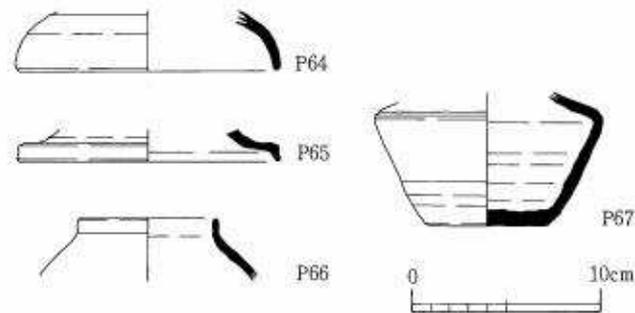
石室開口部より出土している。口縁部約1/6が残存し、口径7.15cm、頸径7.45cmを測り、口縁はほぼ直立する。φ1mm程度の砂粒を含み、内外面ともに灰色である。焼成は良好で、内外面ともに回転ナデをもって仕上げ、胴部には一部灰かぶりが確認できる。

短頸壺（P67）

羨道部と、石室開口部および、トレンチ3より出土している。底径6.6cm、腹径12.1cmを測り、底部で約2/3が、体部で約1/2が残存している。φ1mm～2mm弱の砂粒を少量含む。内面はオリーブ灰色、外面は灰色であり、焼成は良好である。胴部は外反気味に立ち上がり、肩部はほぼ90°に屈曲する。内外面ともに回転ナデが行われ、肩部には沈線が巡っている。胴部下方は回転ヘラケズリを行い、底部はヘラ切り後、ナデを施し仕上げている。

以上のように、出土した須恵器は4点である。つぎにこれらの遺物の年代的な位置付けを行うこととする。しかし、これらはいずれも小片であるため、製作技法あるいは、器形上の確認しえた特徴のみを根拠としている。

杯蓋P64は、沈線の消滅、外面にみられるヘラケズリから田辺編年のTK43型式まで時期を上限させて考えられる。高杯P65は、長方形透かしの存在より、TK43型式からTK209型式のあいだに相当し、短頸壺P66の口縁部は、TK209型式の典型的な特徴を残している。これらから、P64～66は、TK43型式からTK209型式の時期幅をもって考えられる。また、P67の短頸壺は、口縁部の残存が認められず、詳細はわからないが、肩部に巡る沈線や頸部の接合状況から、TK217型式に相当する時期が考えられる。このため、他の3点の遺物の年代とのあいだに時期差がみられ、追葬時による遺物と判断できる。



第28図 飾東1号墳 出土土器

まとめ (仁尾)

飾東1号墳は、T字形の石室構造をもつ古墳として、これまでに広く知られ、学術的な考察も一部では行われていた。しかし、出土遺物がないために、T字形の石室構造の類例等により6世紀中葉～後葉の年代幅をもって考えられていた。

今回の確認調査は、墳丘規模の確定、古墳保存による石室実測図の作成を目的として実施し、石室床面および、室内堆積土の掘り下げ等は行っていない。このため、出土遺物は、室内清掃中における4点の須恵器のみであるが、飾東1号墳の年代時期を限定する資料成果をえたといえる。遺物による1号墳の年代時期は、6世紀の第3四半期 (TK43型式) と、7世紀の第1四半期 (TK209型式) である。1号墳の確認調査に先立って、全面的に調査を実施した飾東2号墳の調査成果では、出土遺物より、初葬は6世紀の第3四半期、最終葬は7世紀の第2四半期と結論付けられている。これにより、1号墳の築造時期は2号墳とほぼ同時期と考えられる結果が得られたことになる。しかし、前述したように、遺物の出土状況や、石室の現状から、遺物の検討による6世紀の第3四半期を古墳の築造時期と考え、7世紀の第1四半期を追葬によるものと判断するかは、さらに検討を要し、考慮すべき問題である。つまり、古墳構築当初の遺物は、すでに持ち出されているか、調査の及んでいない石室床面に未だに残っている可能性があり、6世紀の第3四半期時点において、追葬の可能性も考えられるからである。石室の保存が決定し、地域の貴重な文化遺産が守られたが、今後、何らかのかたちで、飾東1号墳の年代が確定することが残された課題である。

なお、1号墳の石室実測に関しては、西口和彦、深井明比古が担当した。このほか、本文を記述するにあたり、岸本一宏氏に、T字形横穴式石室および、遺物について御教示いただいた。

参考文献

- 田辺 昭三 『陶邑古窯址群 I』 平安学園考古学クラブ 1966年刊
 葛野 豊 『兵庫県飾東1号墳』 『古代学研究』 34号 1963年刊

飾東1号墳の地中レーダ探査結果

1. はじめに

本古墳では、石室を構成する石材が墳丘の背後でどの程度外方へ及んでいるかを探査するのが課題であった。すなわち、山陽自動車道に伴う側道の開削工事で本古墳墳丘の一部を掘削する予定であるが、その工事を石室に影響を与えない範囲で実施するための資料を得るのが目的であった。

探査には地中レーダを用いた。考古学における探査では複数の探査方法を採用して、結果を照合することにより信頼ある成果を求めるのが一般的であるが、本古墳では残存する墳丘が小規模であり、その周囲では東と南が崖面となっているため、他の探査方法を試みてもこの不規則な地形の影響を受け易く、有効な成果が得られないと判断して、レーダ探査のみを実施したものである（第29図＝写真）。

2. 測定の方法

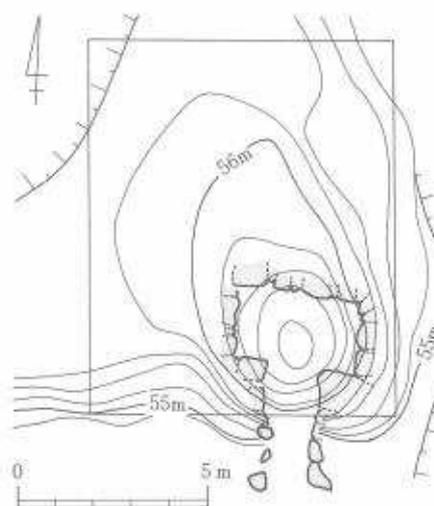
測定に際しては東西8m、南北11mの対象範囲を設定した。しかし、設定範囲の北西隅などアンテナ走査ができない地形部分では測定ができていない（第30図）。測定の実際ではアンテナを南北方向に走査したが、隣接する測線相互の間隔は1mである。すなわち、測定できる範囲内では、1m間隔でくまなく探査した。

一般には、もし古墳の周濠の存在とその規模を探るような場合、3とか5m間隔で濠を横切るような測線に基づき、遺構を逐次追求していけば、目的を達成することはできる。しかしながら、もしその形態などを知りたいときには、平面的な情報も必要となる。今回1m間隔で対象範囲全体を測定したのは、後に述べるレーダ平面図を作成するために他ならない。

使用したレーダの装置はアメリカ G.S.S.I 社製の SIR-8 型で、300MHz と 500MHz のアンテナを併用したが、500MHz では深い層位の情報には採取できなかったため、ここでは300MHz による結果のみを報告している。両者の有効探査深度としては、500MHz では約70cm前後、300MHz は1.5m程度であった。これは、水田など粘土質の土壌に見られる平均的深度といえる。

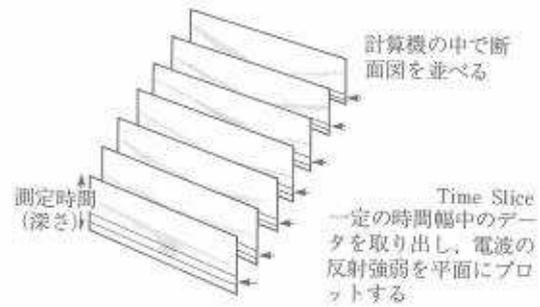


第29図 現場と測定風景



第30図 測定範囲

2-1 平面図の作成 レーダ探査では、アンテナが移動した測線における疑似的な土層「断面」を得るのが基本で、その画像をもとに地下の状況を判断する。しかし、最近ではこれら断面から「平面」図（Time Slice）を作成して、遺構の規模や形態を表示する方法が開発されている。この方法では、電波が地中から反射してきた時間、すなわちある一定の深さに対応するデータを取り出して、その中における電波の反射や減衰の状況を平面におき、反射強度分布図として表す（第31図）。考古探査で求めるのは、断面から知られる層序やその変化だけではなく、遺構の具体的な状況に関する情報であるので、それが平面図として提示されれば理解が容易であることはいうまでもない。



第31図 レーダ平面図作成の要領



第32図 通常の平面図作成



第33図 地形補正による平面図

2-2 地形補正による平面図 今述べたように、レーダ探査における平面図作成では、ある一定の時間幅における電波の反射状況を抽出表示する。一定の時間幅はすなわち地表面からの見かけの深さに対応するので、本古墳例のように墳丘表面から測定する必要がある場合には、墳丘の形状に沿った地表面からの均一な深さの状況を表現することになる（第32図）。

しかしながら、古墳墳丘内にある石室は水平な地面を基底面として構築されたものであり、もし、地上から一定の深さのデータを取り出しても、それは墳丘の低い部分では低い箇所と地山、高い場所では石室の高い部分と盛り土の裾部を表現してしまう可能性がある。

そこで、このような不整形な地形における「平面」図作成の方法として、地形補正による表現が研究されている。それを「地形補正平面図」と呼ぶ。この方法では、まず、断面の各々を地形に沿った形に変形させ、次にそれに基づいて上層からスライスする。そうすれば、古墳石室でも同じ高さにある石材や、基底面における石の状況を表現できることになる（第33図）。

本古墳のように墳丘を上層からスライスすると、その上部では表示できる面積は狭く、下部になるほど広がるという結果になる（巻首図版3）。

なお、ここでは電波の地中伝播速度を 6 cm/ns として計算している。この速度は今までに水田やそれに類似する土壌における速度を参考にしたものである。したがって、もし実際の速度が異なれば表示している深さも違うことになるので、あくまで推定であることに注意しておく必要がある。

3. 測定の結果

測定の結果を表す地形補正による平面図（第33図）をみると、上層の50cmまでくらいの深さでは、

石室上部での反射が弱い。すなわち、石などは存在しないような結果となっている。しかしながら、現地での観察と地形測量や石室の実測結果を考慮すると、地表下50cm程度で既に天井石が存在するように思われたので、この深さの結果に現れていないのはやや不審である。もしかすると、天井石は扁平で薄いのかもしれない。

なお、結果図の北端に近い部分で小規模な反射の強い箇所が3カ所ある。この部分は墳丘の裾よりは高い位置にあっているので、葺石など墳丘内部にある石あるいは土層変化を表している可能性がある。

50cmから1m程度の深さでは、天井を構成する石からと思われる反射が顕著である。この部分での反射状況から見ると、天井は2個の大きな石で覆われているように見える。これは石室の内部から見える天井石のあり方とは異なる。石の上面における高さに変化があるのかもしれない。

これよりもさらに深く、石室の基底面における状況を反映していると思われる1m～1.5mの深さでは、羨門の袖石の形状や石室を構成する石材の背後の状況がよく判る。しかし、石室の内部は空洞であるにも関わらず、そこでも強い反射があるような表現となっている。これは、天井石のように大きな反射をもたらす要因があると、その反射が下部すなわち遅い時間帯でエコーとなり、類似の反射が繰り返し記録されるために生じるもので、何かが実際にあることを表すものではない。パルスレーダシステムによって得られるデータの特徴であり限界でもある。

石室の石材についてみると、北側の背後で若干突出した部分があるように見える他は、ほぼ均質な厚さすなわち控積みの状況にあると判断できる。しかし、玄門の袖石は予期していた以上に大きく、背後へ及んでいると推定できる。しかし、これが一石からなるのか、これを固定するための別の石が裏込めにあるのかは判断できない。

この深さでは墳丘の周辺での表土層も含めて表現していると理解できるが、背後などに存在すると思われる周濠の形態などは明らかでない。ここでの地形補正による平面図では、層位をほぼ50cmの深さを平均したものとして表現しているが、平均する層の幅が大きすぎたために、浅く僅かに残存する周濠は十分に表現できなかったものと考えられる。今後、同様のデータ処理をする場合に注意するものとして、参考となるであろう。

おわりに

本古墳におけるレーダ探査の結果は以上のものである。石室を構成する石材のうち、両側面ではほぼ同程度に背後に及んでいて、あまり大きな「引き」はないと推定される。しかし、北側の背面では一部に突出しているらしい様子が見えるので、石室構築に際して何らかの特殊な積み方があるのかも知れない。

したがって、墳丘背後において墳丘の現状を変更する場合には、通常の想定よりは遠い距離に石材が存在する可能性を考慮しておいた方がよいであろう。

天井石は推定しているよりも薄い可能性がある。また、個数も石室の内部から観察できるものとは異なるかも知れない。

墳丘裾に存在するはずの周濠は、レーダ平面図では明瞭に表現できなかった。それは、データ処理をするときに、深さ方向に大きな範囲で平均したのが原因と思われる。しかし、このことは各測線における「断面」測定の実像をみても明らかでないので、周濠の残存状況が極めて僅かであったか、濠の内外の土に差が乏しかったことが原因であろう。

飾東 2 号墳出土須恵器の産地について

1. はじめに

兵庫県は全国最大多数の須恵器窯跡を擁する。考古学的にも、また、分析データからも、これらの窯跡を整理することは大変な努力と忍耐を必要とする。長い年月をかけ、こつこつとデータを集積していく他ない。しかし、須恵器生産の初期の段階の窯跡はそんなに多くはない。したがって、この時期の須恵器の伝播・流通の研究はそんなに難しくはない。

本報告では姫路市にある 6 世紀代の飾東 2 号墳から出土した須恵器の蛍光 X 線分析のデータから、その産地について考察した結果について報告する。

2. 分析結果

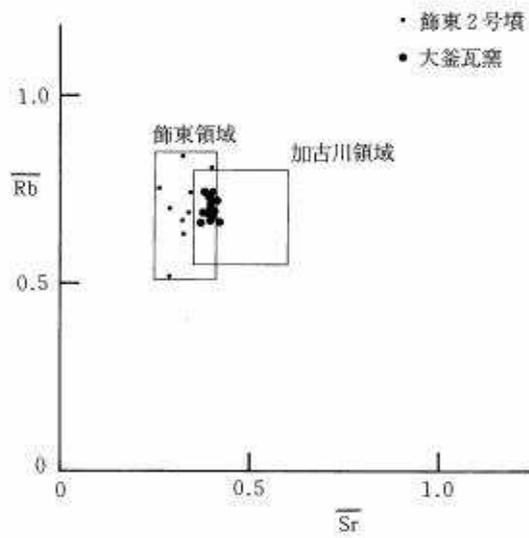
分析値は表 1 にまとめてある。全分析値は同時に測定した岩石標準試料 JG-1 の各元素の蛍光 X 線強度を使って標準化した値で表示してある。筆者は標準化値を使ってデータ解析を行うので、表 1 には標準化値を示したが、地球科学分野では通常、%濃度や ppm 濃度で表示する。もし、これらの濃度表示が必要であれば、主成分元素についてはこれらの標準化にそれぞれ、3.95、2.18、3.39、2.02 を乗ずれば、 K_2O 、 CaO 、 Na_2O 、 Fe_3O_4 としての %濃度が得られる。また、微量元素についてはそれぞれ、181、184 を乗ずれば、Rb、Sr としての PPM 濃度が求められる。

さて、表 7 の生データを使って Rb-Sr 分布図を作成したのが第 34 図である。飾東 2 号墳の須恵器は全因子で比較的良好にまとまっているので、同一生産地の製品と考えた。それで、これらを全て包含するようにして飾東領域を描き、他の領域と比較することにした。比較領域としては加古川領域を描いてある。加古川領域を選択した理由はこの時期に、姫路市の最至近距離に須恵器窯跡が見つけられているのは加古川窯群だからである。第 34 図をみると、重複する部分もあるものの、飾東領域と加古川領域とは異なる。第 35 図には K-Ca 分布図を示してある。この図では飾東領域と加古川領域とは全く異なる。重複する部分すらない。したがって、飾東 2 号墳の須恵器は加古川窯群から供給されたものではない。

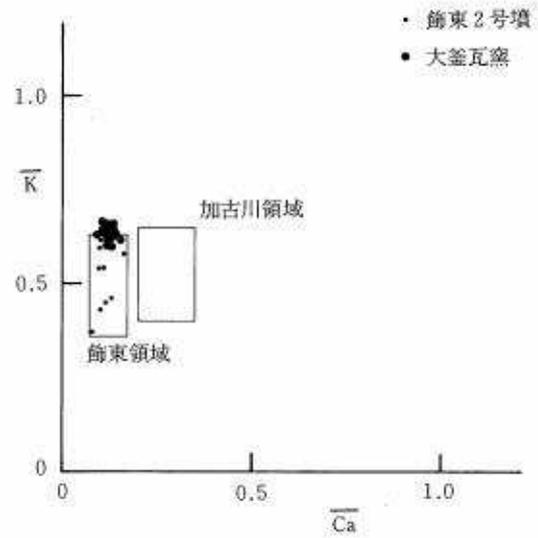
次の可能性はこの時期の未発見の窯が姫路市周辺にあるのではないかということである。初期の須恵器には折々にして、そのようなことがあるからである。そのような場合には、後世の、在地の須恵器窯の製品と比較してみることである。姫路市飾東町には大釜瓦窯が見つけられている。そこで、この瓦窯から出土した瓦を比較試料として使い、飾東 2 号墳の須恵器胎土に対応させることにした。大釜瓦窯出土瓦の分析値も表 7 に示してある。そして、第 36、37 図にも大釜瓦窯の瓦もプロットしてある。飾東 2 号墳の須恵器とびたりと合致するわけではないが、加古川領域よりもむしろ、大釜瓦窯の瓦の方がまだ、飾東 2 号墳の須恵器胎土に近いことがわかる。図 36、37 には Na 因子と Fe 因子を比較してある。Na 因子でも飾東 2 号墳の須恵器は大釜瓦窯の瓦と対応するが、Fe 因子では異なる。これらの結果から、飾東 2 号墳の須恵器胎土は大釜瓦窯の瓦胎土と異なることは確かである。製作年代も異なることから、粘土の採集場所も別々であったと考えられるから、当然といえば当然のことである。しかし、K、Ca、Rb、Sr、Na などの長石系の因子は類似しており、同じ飾東町周辺の粘土を素材として使用した可能性は充分ある。そうだとすれば、飾東町周辺に、6 世紀代の未発見の須恵器窯が発見されたときはじめて、確認されることになる。それまでは有力な一つの可能性として受け止められる。

表7 胎土分析表

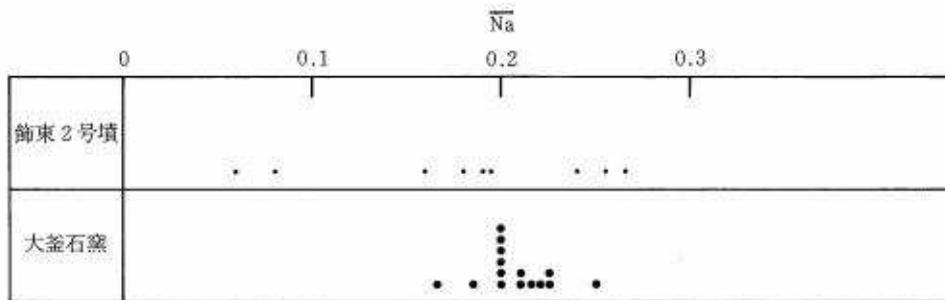
	試料	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
飾出東土須惠埴器	R14	0.430	0.099	2.14	0.751	0.256	0.060
	R25	0.543	0.101	2.17	0.690	0.339	0.256
	R34	0.620	0.102	1.90	0.702	0.285	0.197
	R41	0.596	0.099	1.57	0.813	0.404	0.240
	R46	0.537	0.101	2.23	0.670	0.318	0.265
	R48	0.577	0.162	1.59	0.743	0.339	0.180
	R50	0.456	0.130	2.06	0.840	0.319	0.082
	R51	0.446	0.115	2.18	0.632	0.326	0.189
	R52	0.374	0.079	1.90	0.521	0.285	0.160
大出釜土瓦窯瓦	No1	0.660	0.117	1.07	0.724	0.397	0.202
	No2	0.636	0.122	1.08	0.693	0.406	0.212
	No3	0.656	0.128	1.05	0.662	0.419	0.227
	No4	0.615	0.112	1.12	0.692	0.410	0.184
	No5	0.625	0.102	1.03	0.740	0.383	0.229
	No6	0.638	0.113	1.08	0.720	0.398	0.198
	No7	0.655	0.113	1.03	0.688	0.377	0.198
	No8	0.626	0.139	0.975	0.670	0.404	0.216
	No9	0.626	0.110	1.02	0.738	0.396	0.199
	No10	0.664	0.125	1.02	0.738	0.403	0.248
	No11	0.611	0.112	1.04	0.717	0.414	0.222
	No12	0.639	0.115	1.08	0.658	0.371	0.204
	No13	0.627	0.115	1.10	0.684	0.400	0.165
	No14	0.620	0.147	1.01	0.711	0.400	0.209
	No15	0.643	0.122	1.07	0.712	0.395	0.200



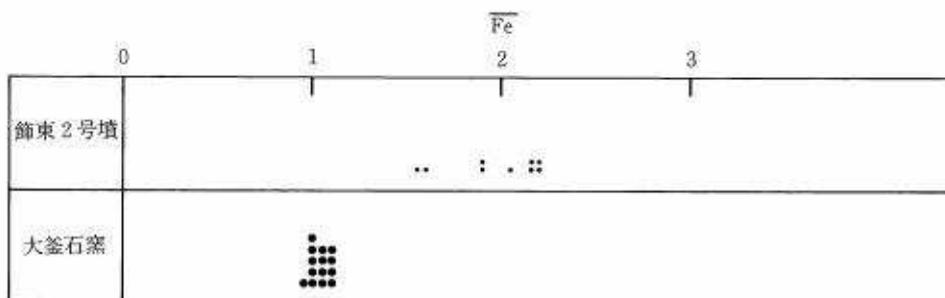
第34図 Rb-Sr 分析図



第35図 K-Ca 分布図



第36図 Na 因子の比較

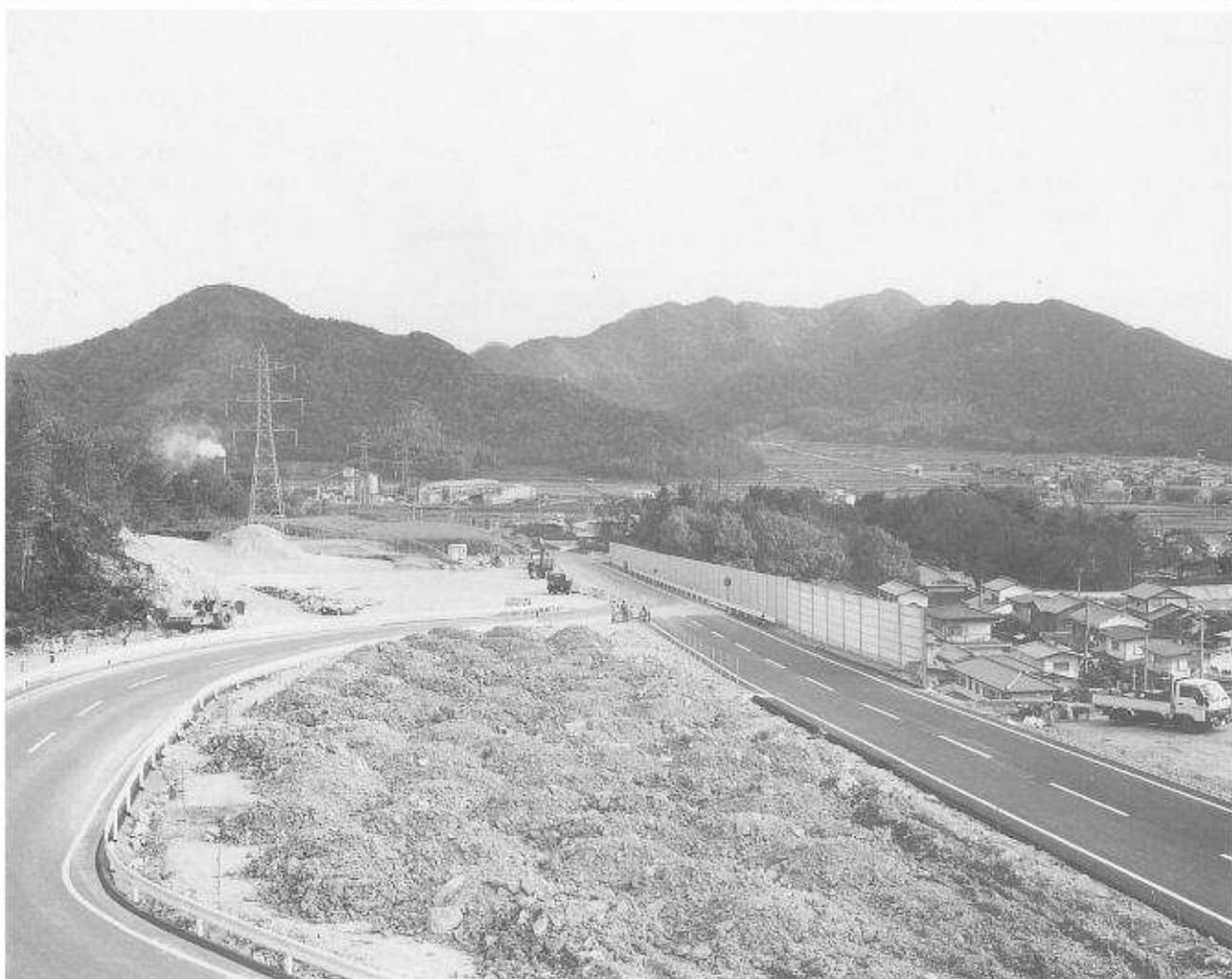


第37図 Fe 因子の比較

圖 版



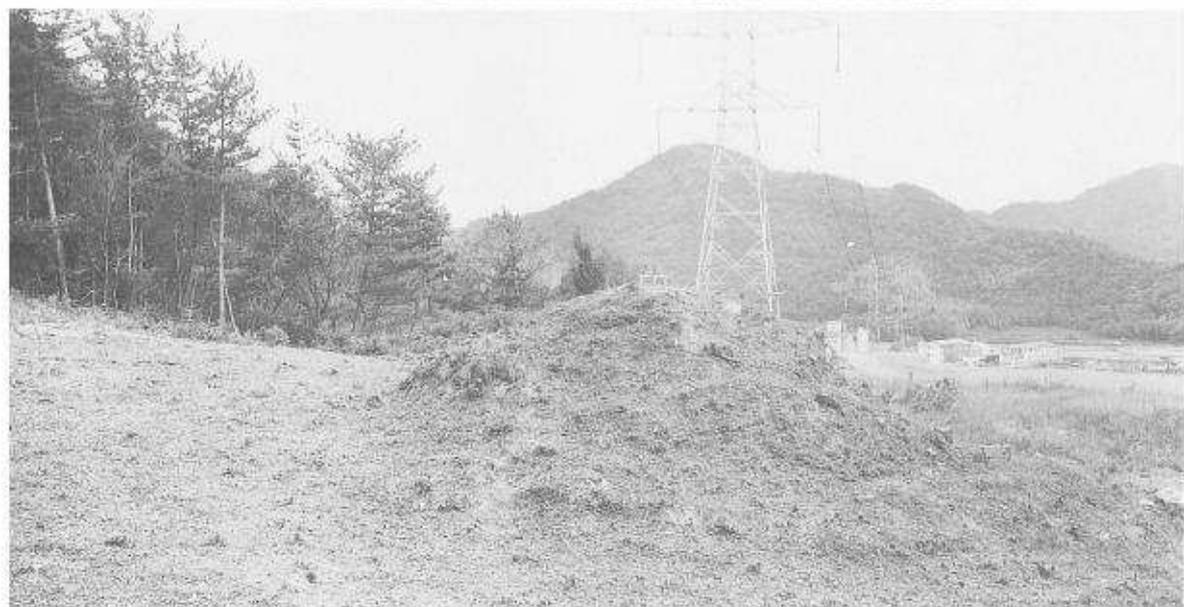
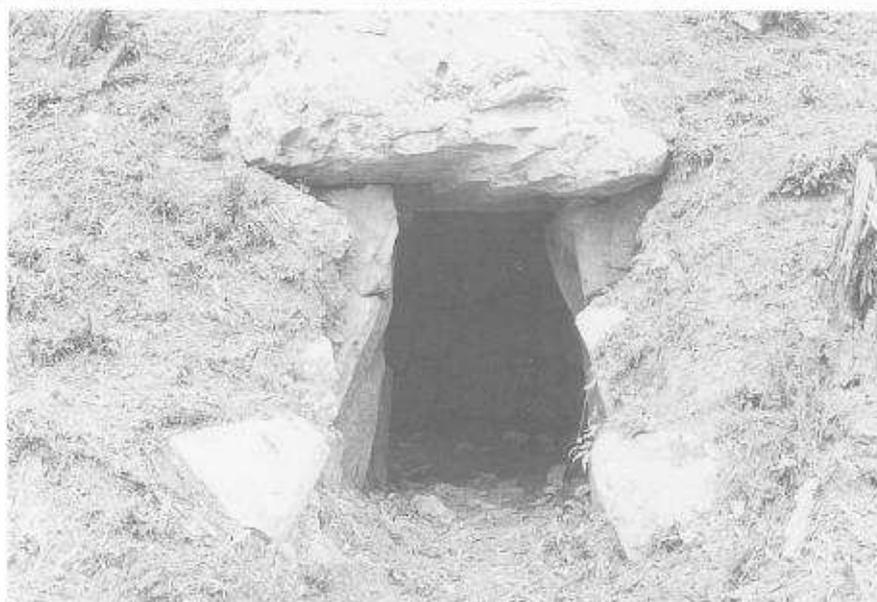
上 東から
下 西から



上 南西から
下 南東から



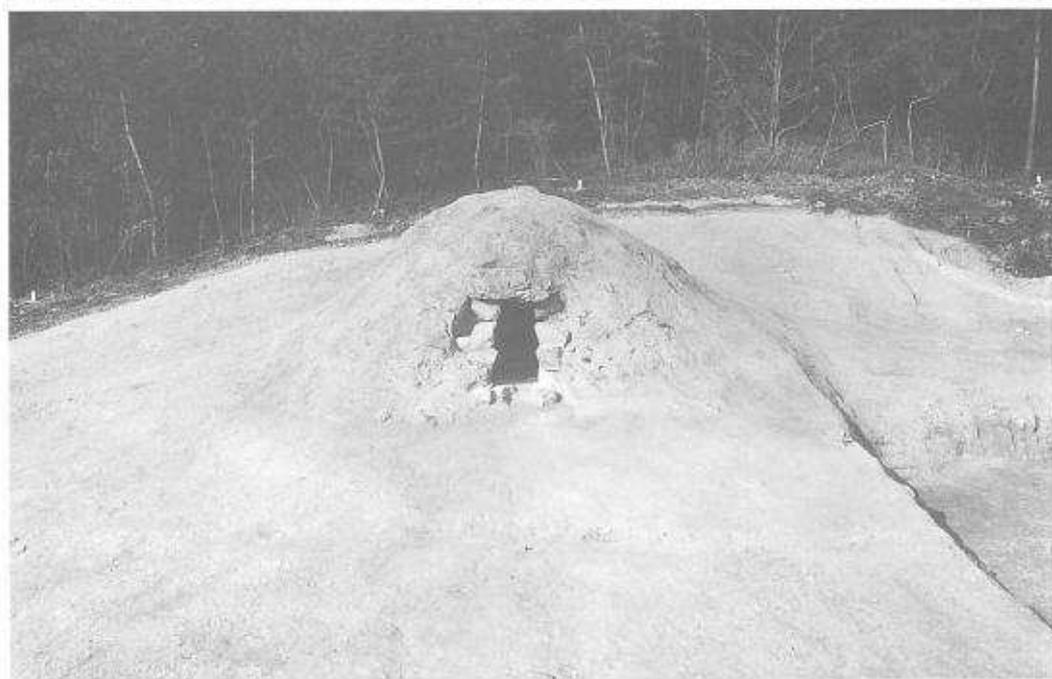
上・中 南から
下 西から



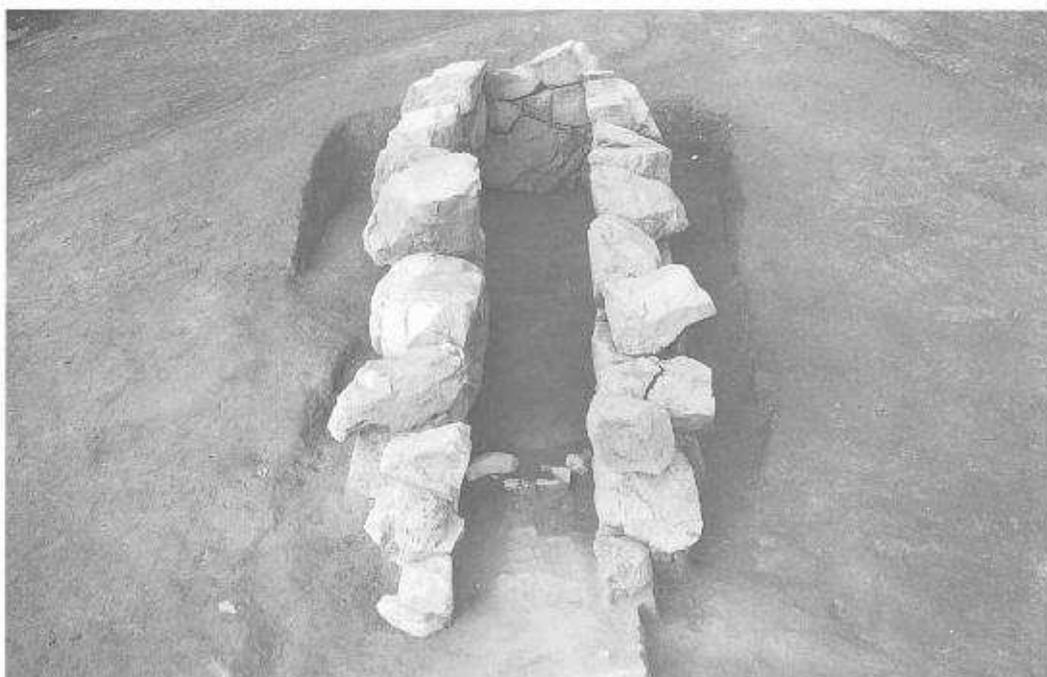
図版 4 飾東 2号墳調査の工程 (1)

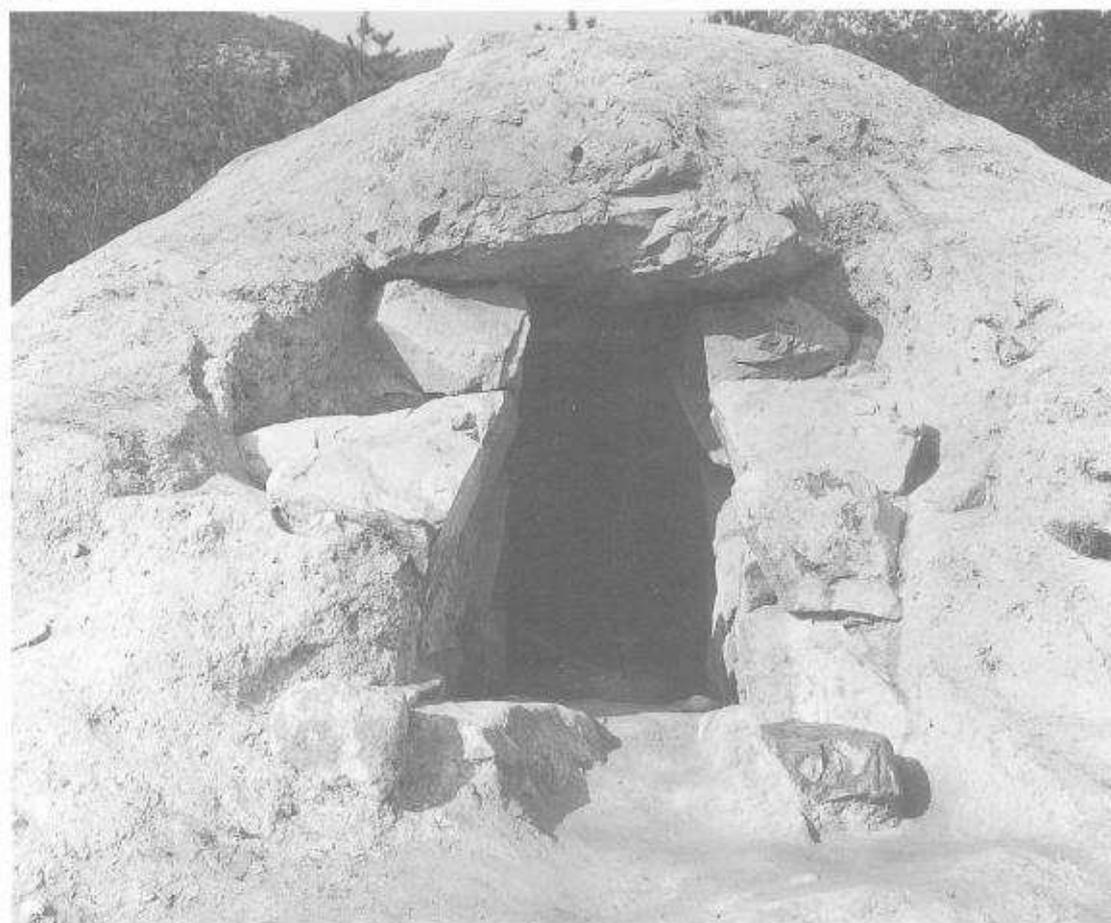


上 調査前
中 完掘
下 墳丘断ち割り



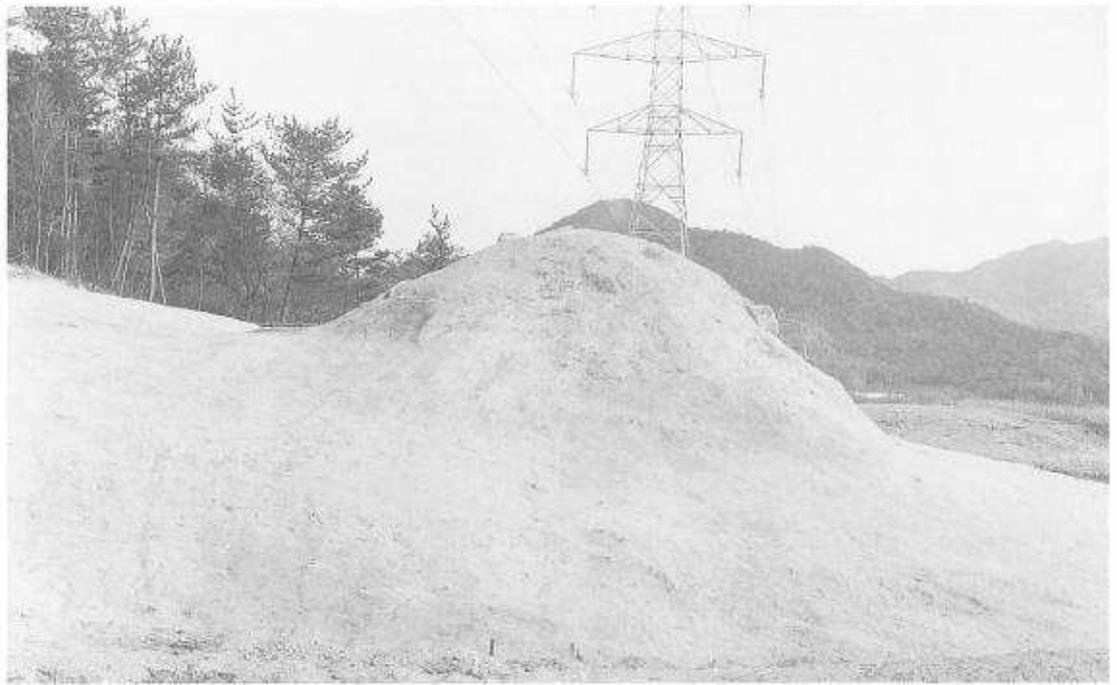
- 上 墳丘除去
- 中 天井石除去
- 下 石室除去





上・下 南から

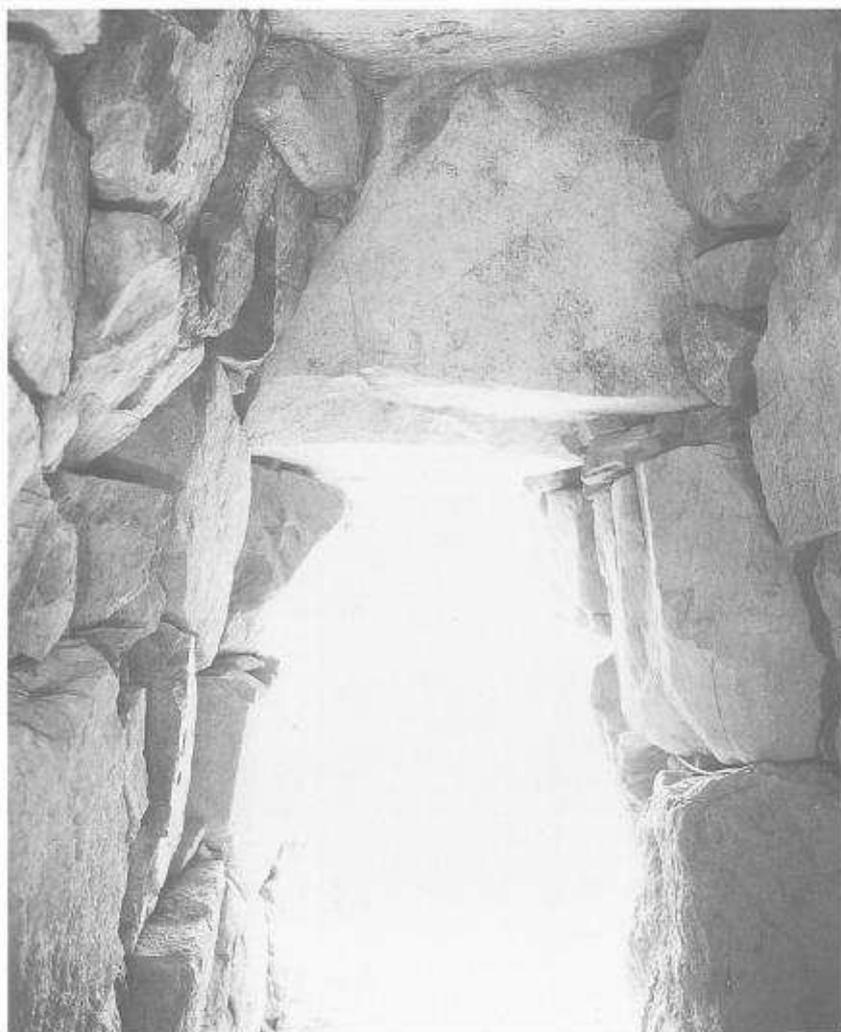
上 南西から
中 西から
下 北から

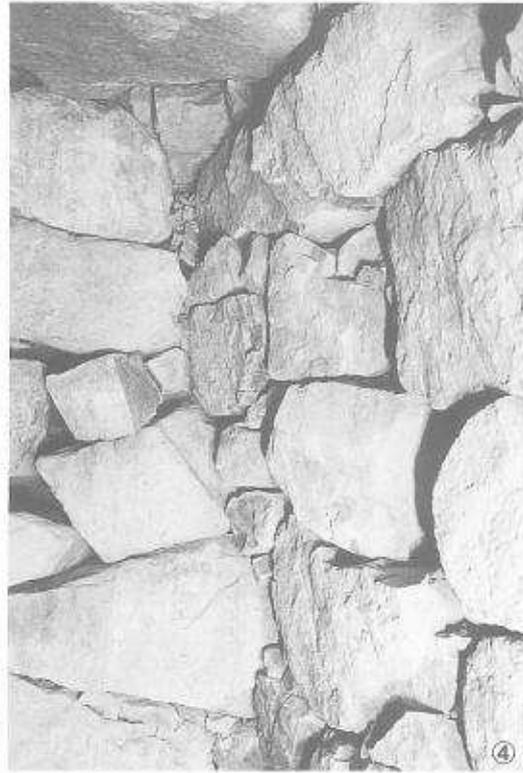
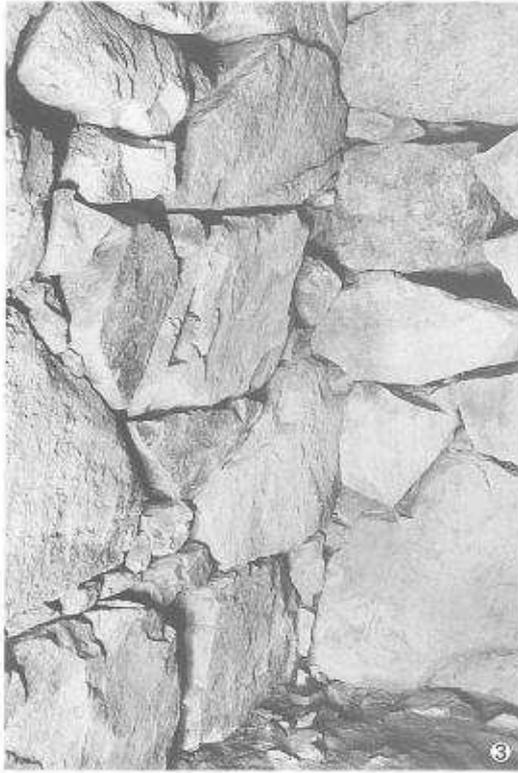




上 奥壁 (南から)

下 羨道部 (北から)





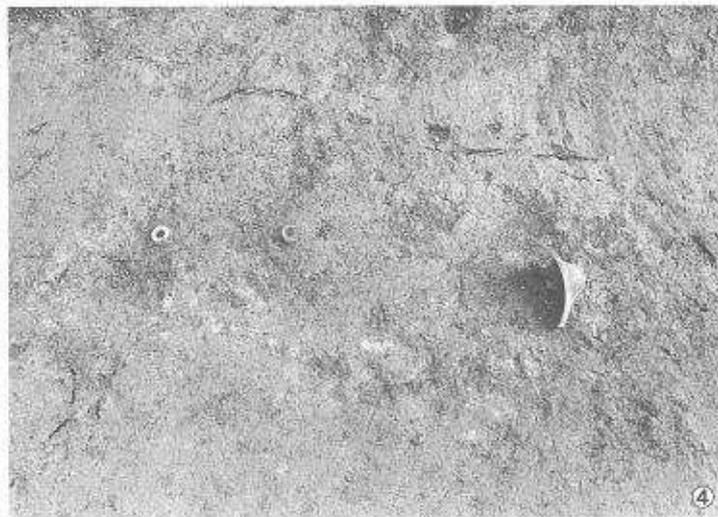
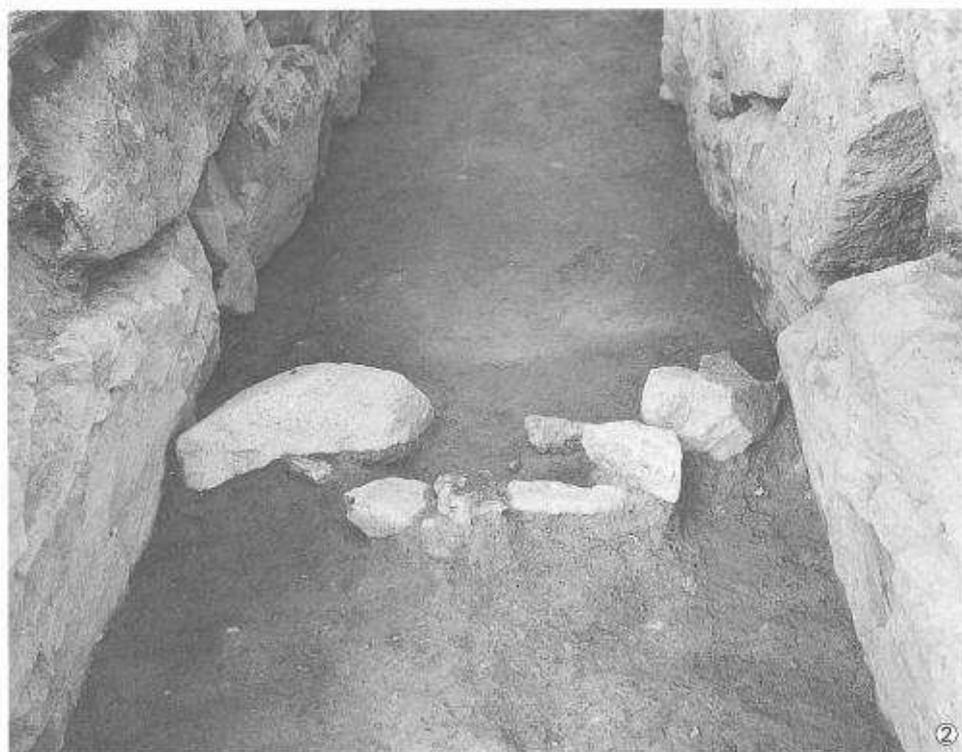
①見上げ石 ④左側壁(南から)
②天井石 ⑤羨道部(北から)
③右側壁(南から) ⑥袖石(北から)



- ①奥壁付近(南から)
- ②P12出土状況
- ③P44出土状況
- ④雲珠22出土状況
- ⑤雲珠23出土状況



- ①地山直上検出風景(南から)
- ②閉塞石残存状況
- ③P24出土状況(南から)
- ④地山直上の土器出土状況





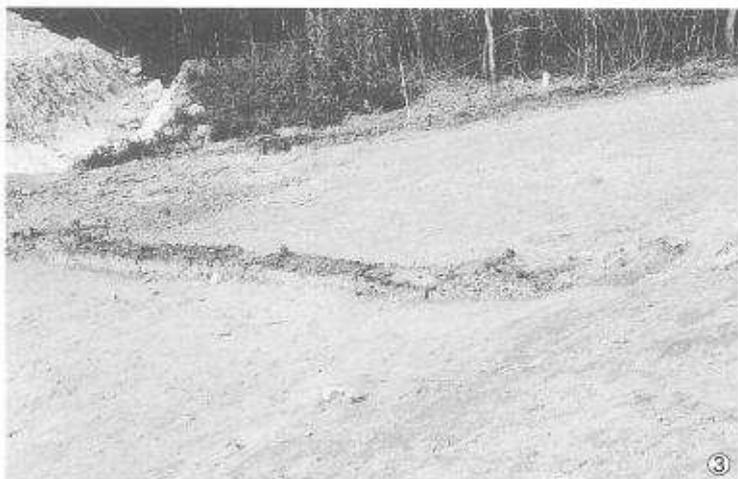
①羨門

②前庭部土器出土状況

③墳丘西側周囲の検出状況

④墳丘東側周囲の検出状況

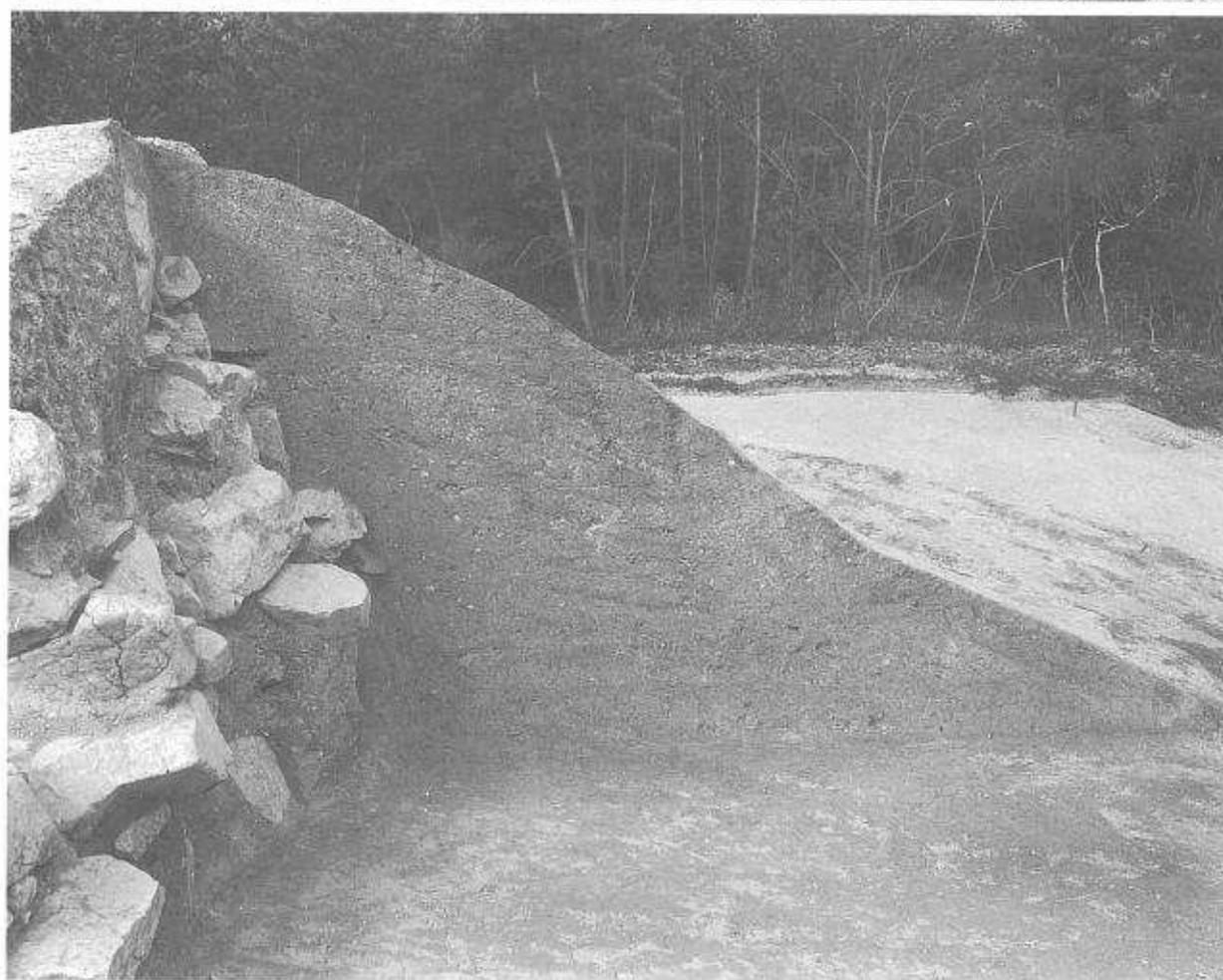
⑤北側周濠検出状況



上 南から
下 西から

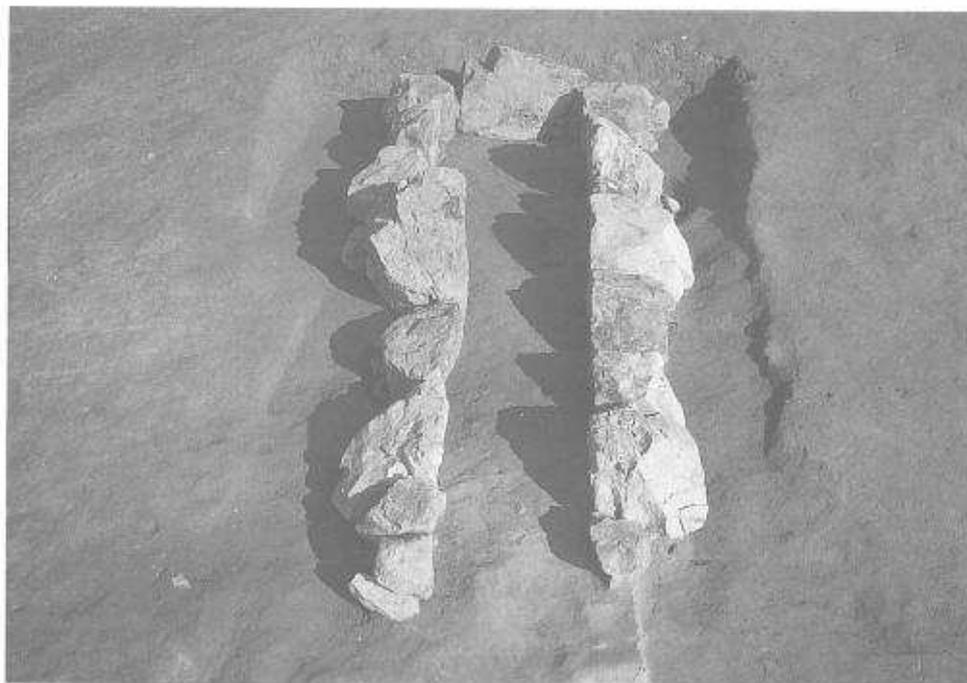


上 墳丘西側断面
下 墳丘東側断面



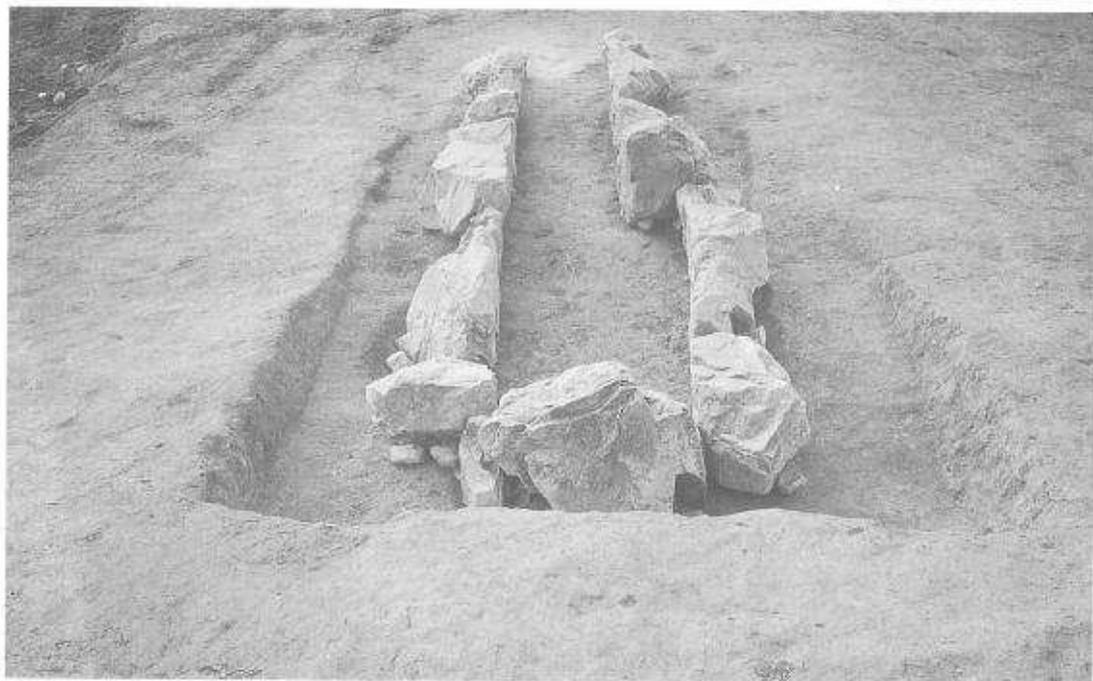
上 南から
下 北から





上・中 2段目 (南から)

下 基底石 (北から)



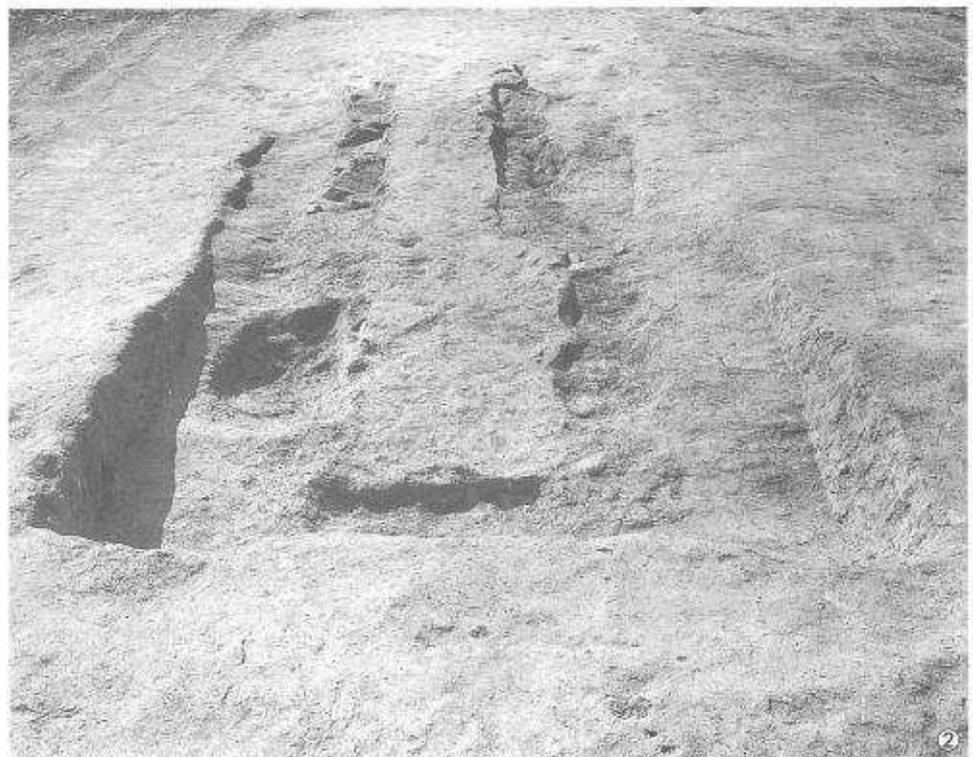
図版17

- ①堀方検出
- ②基底石根がため石除去後
- ③床面断ち割り（南から）
- ④床面断ち割り



図版18

- ①天井石除去
- ② 同上
- ③天井石除去後（北から）
- ④ “ （南から）
- ⑤奥壁（南から）
- ⑥側壁上から2段目
- ⑦石にかませた栗石
- ⑧側壁下から2段目

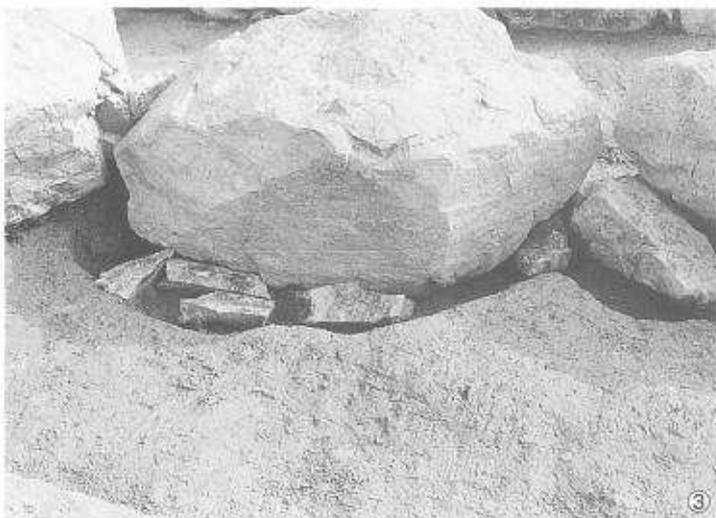


図版19

- ①左側壁基底石（奥壁側）
- ② 同 除去後
- ③左側壁基底石（奥より2石目）
- ④同 除去後
- ⑤右側壁基底石（奥より5石目）
- ⑥ 同 除去後
- ⑦左側壁基底石
- ⑧ 同 除去後

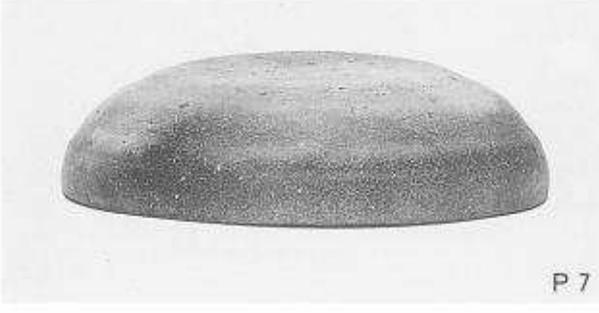
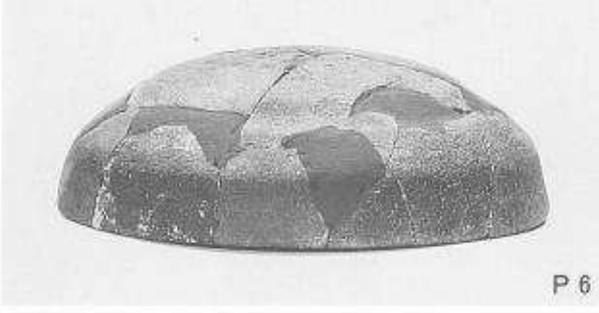
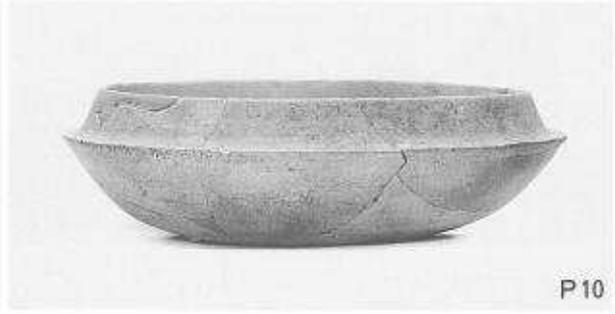
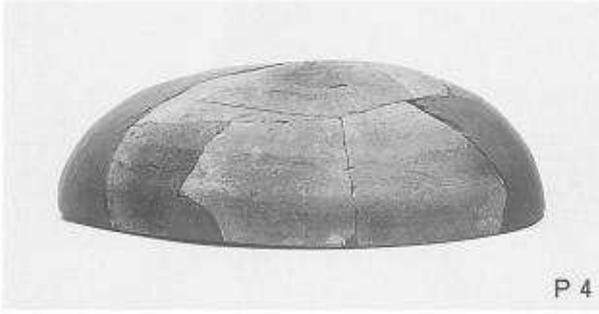
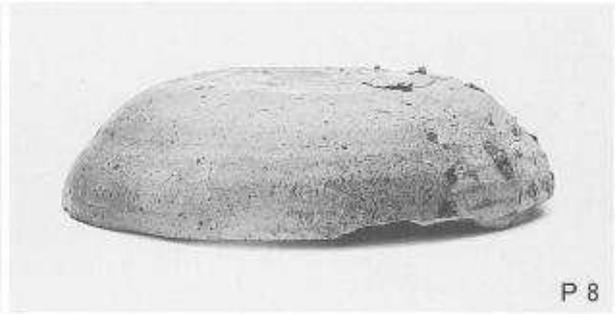
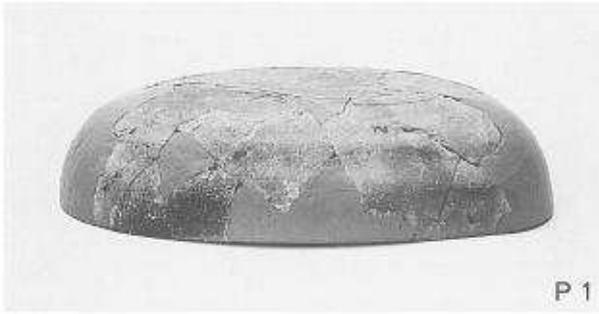


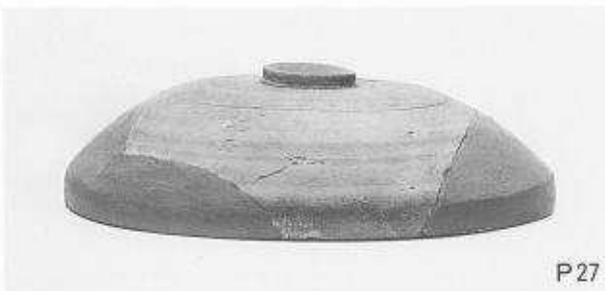
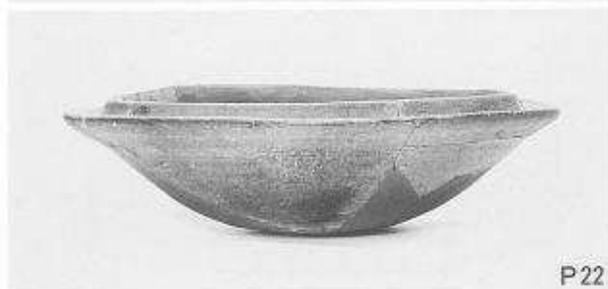






- | | |
|-----------|---------|
| ①前庭部作業 | ④石室解体作業 |
| ②墳丘検出作業 | ⑤石室実測作業 |
| ③墳丘断ち割り作業 | ⑥現地説明会 |



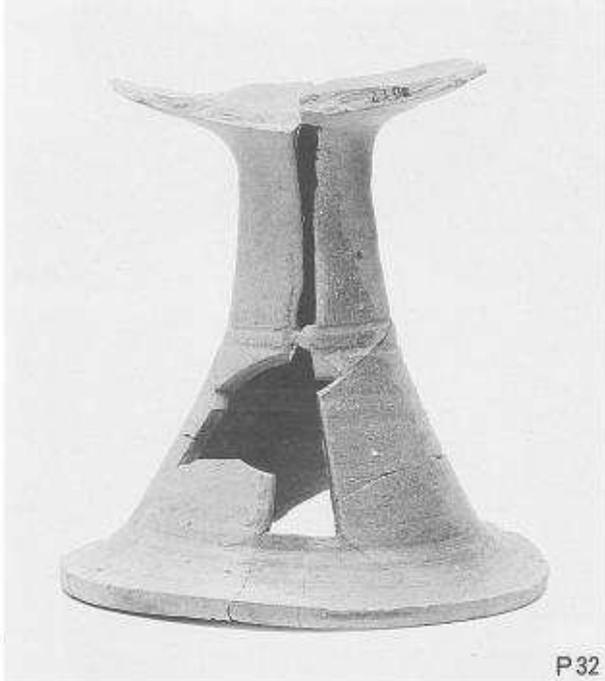




P31



P40



P32



P40



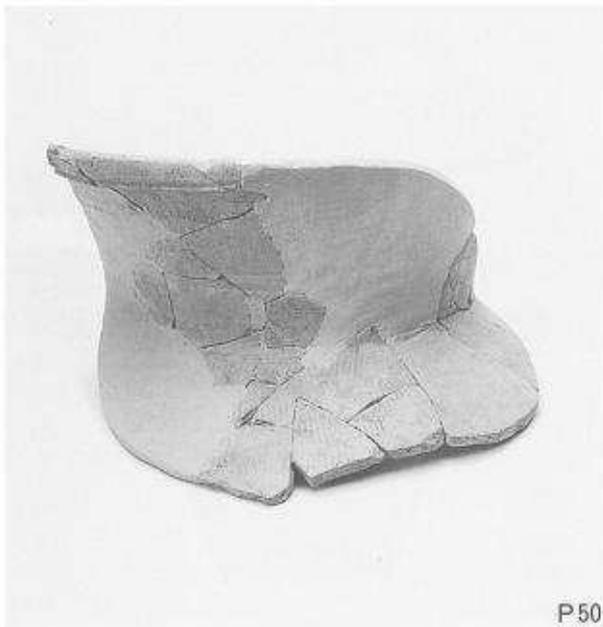
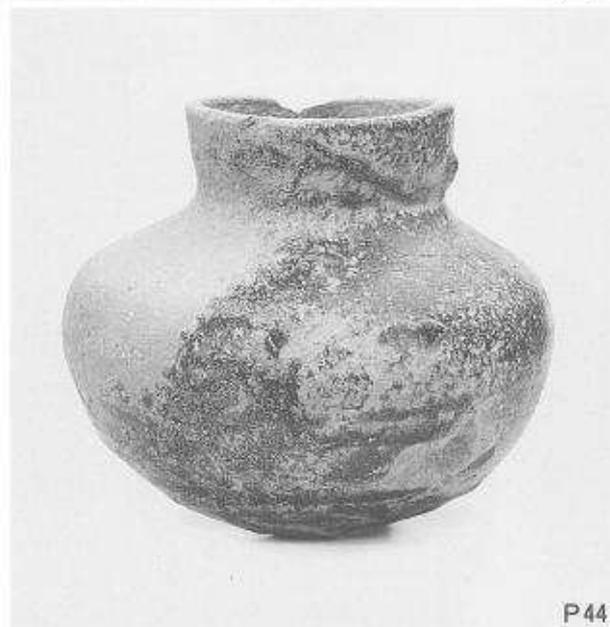
P33



P41



P36





P51



P57



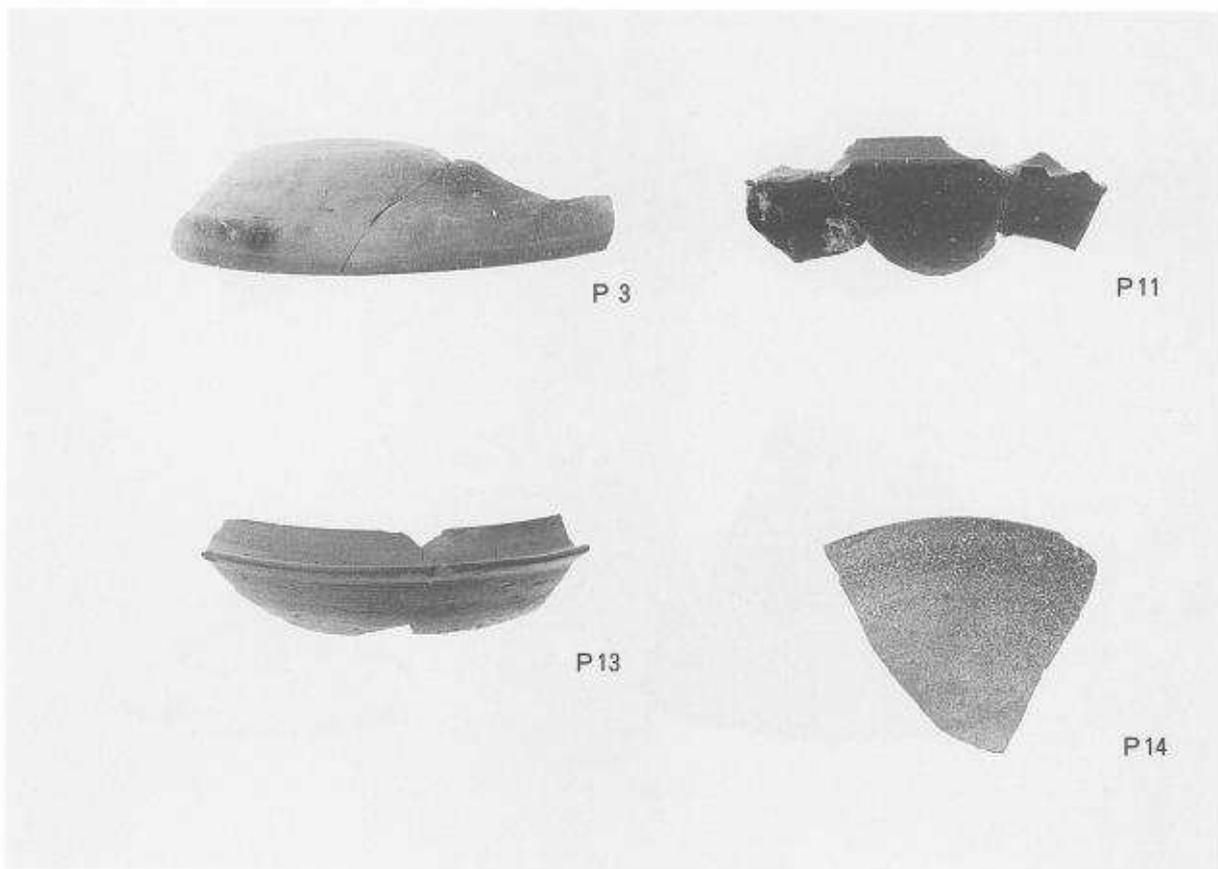
P60

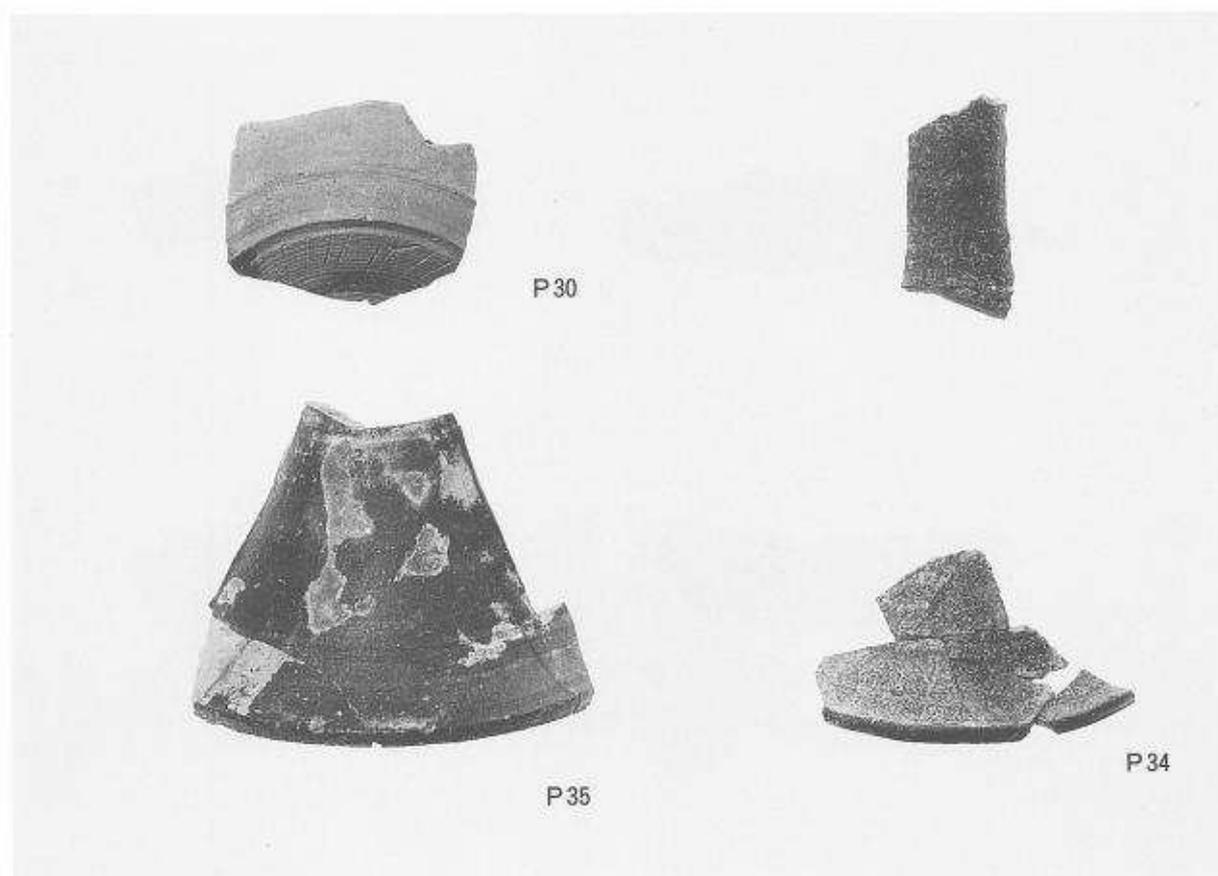
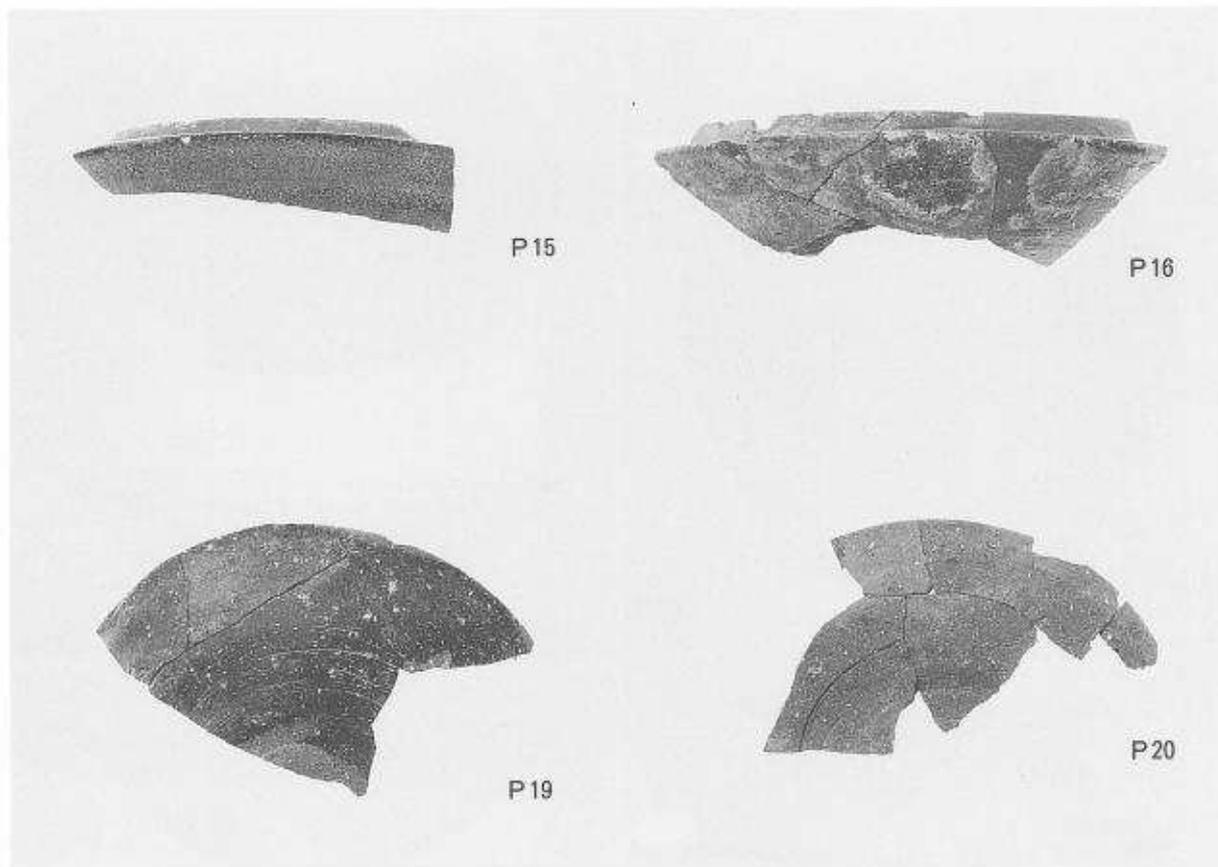


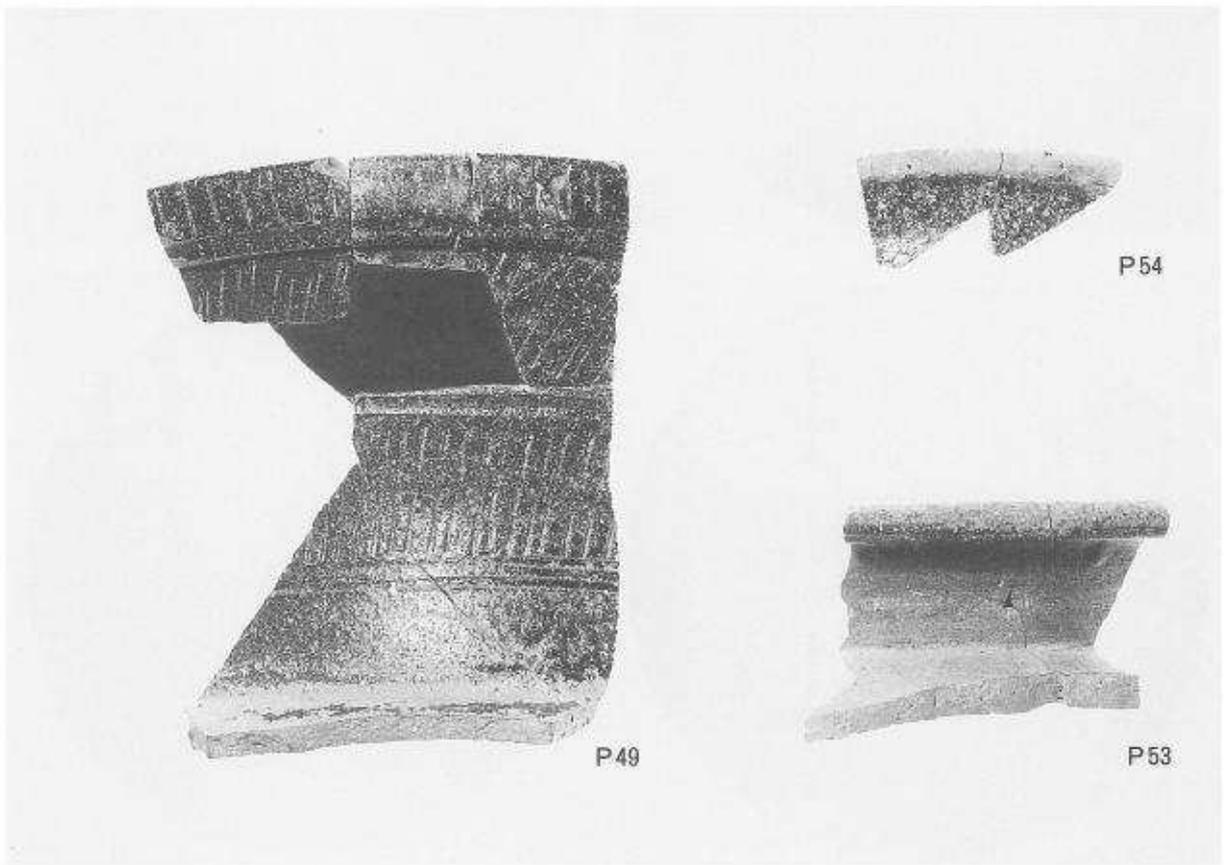
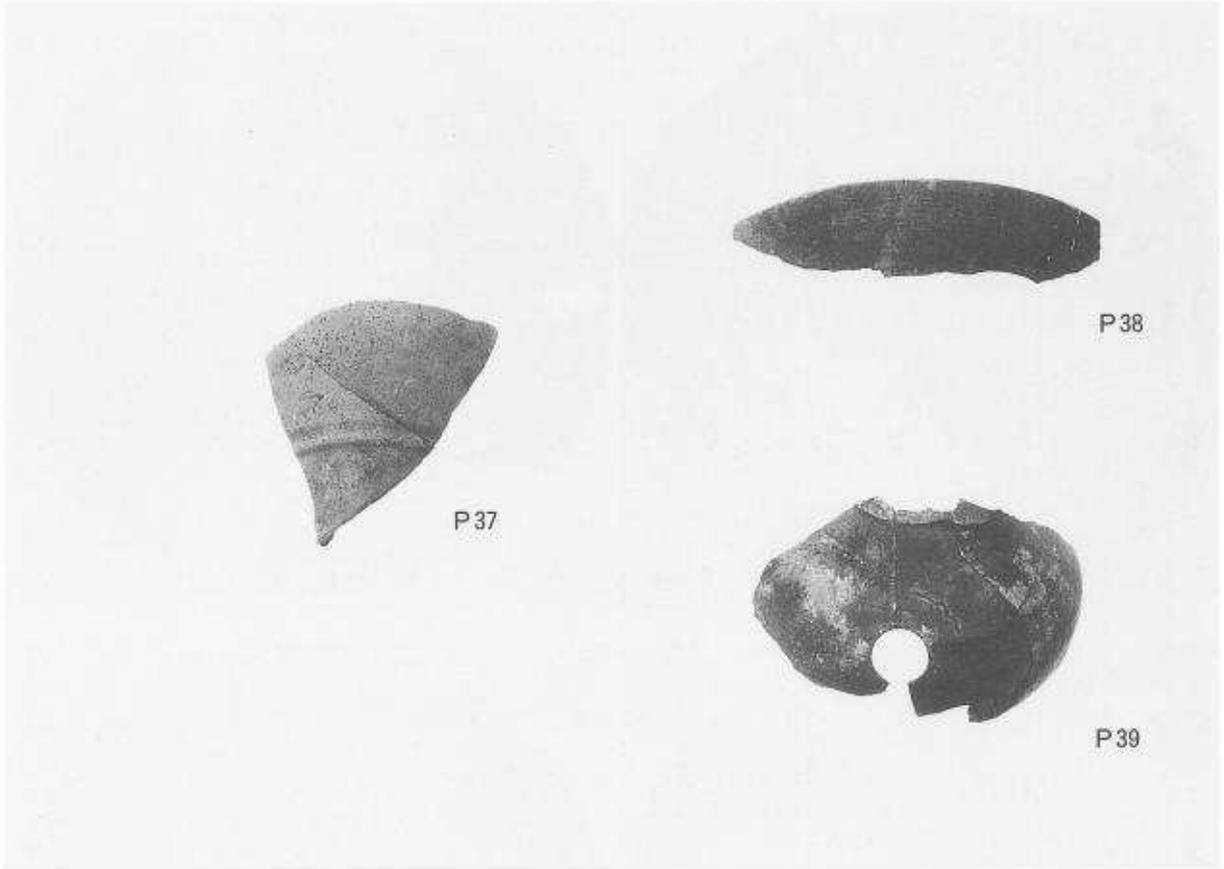
P52

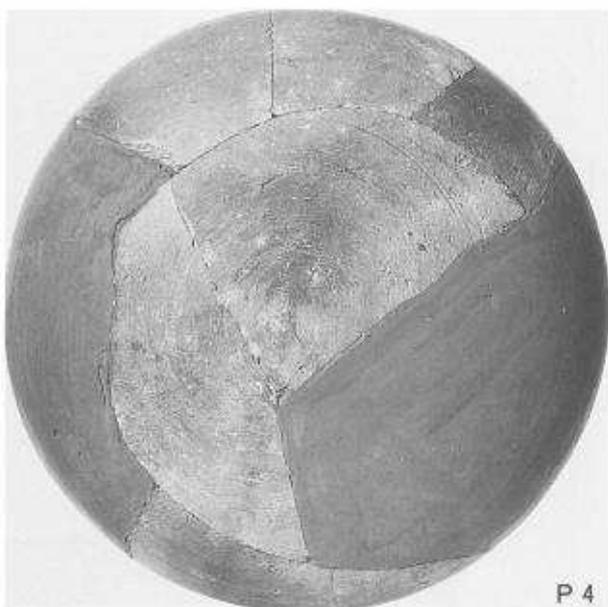
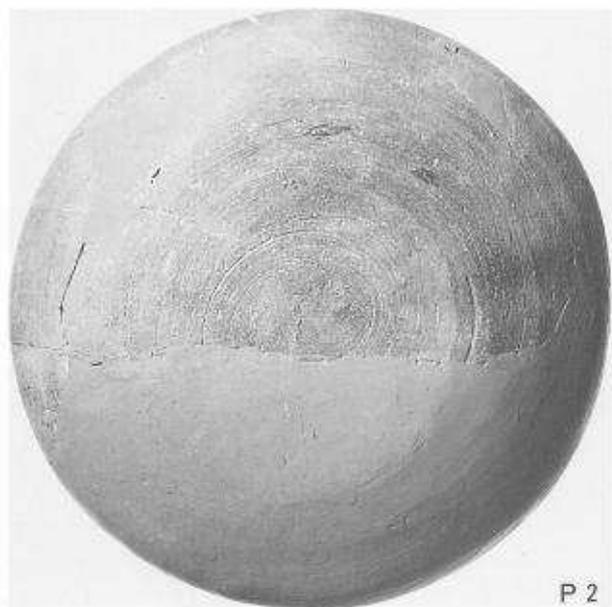
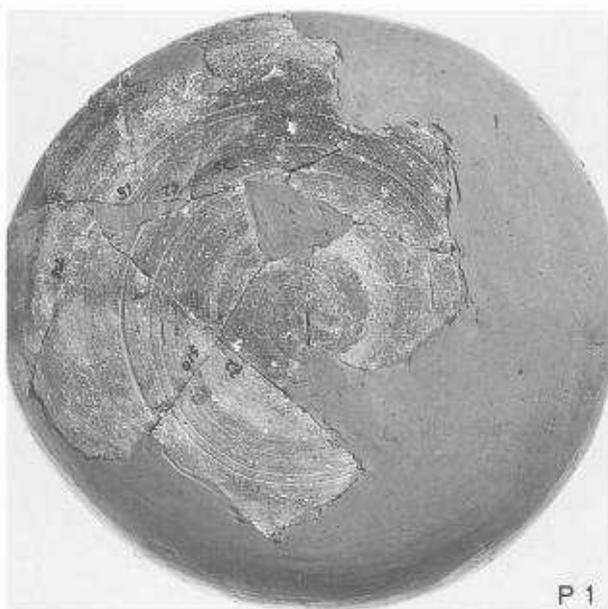


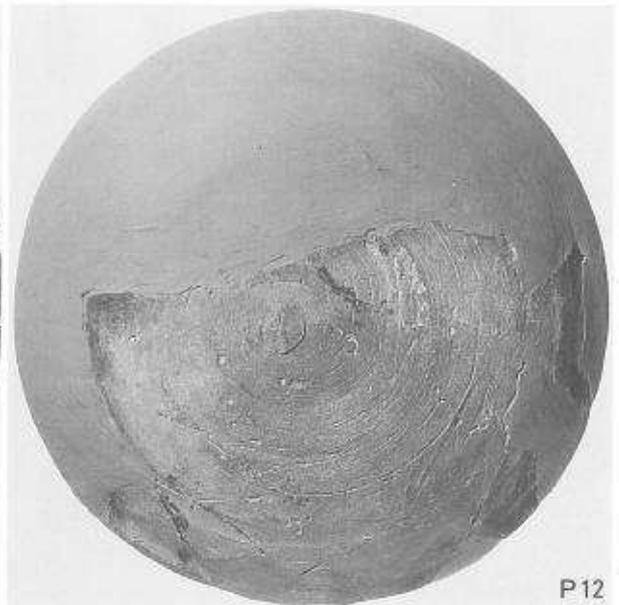
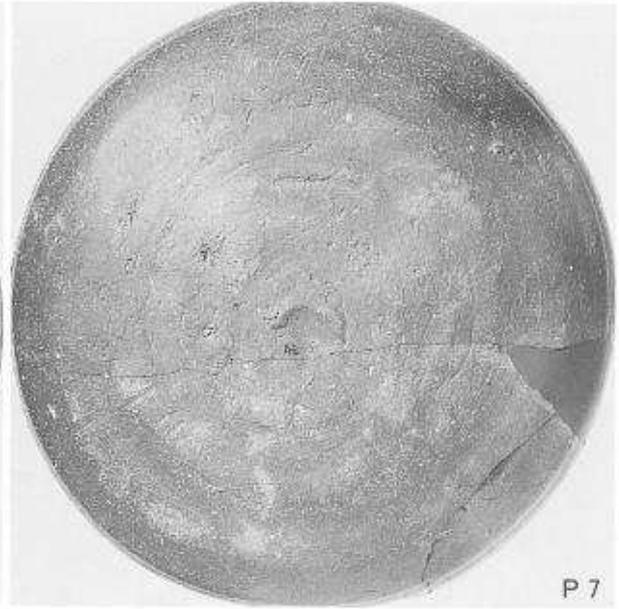
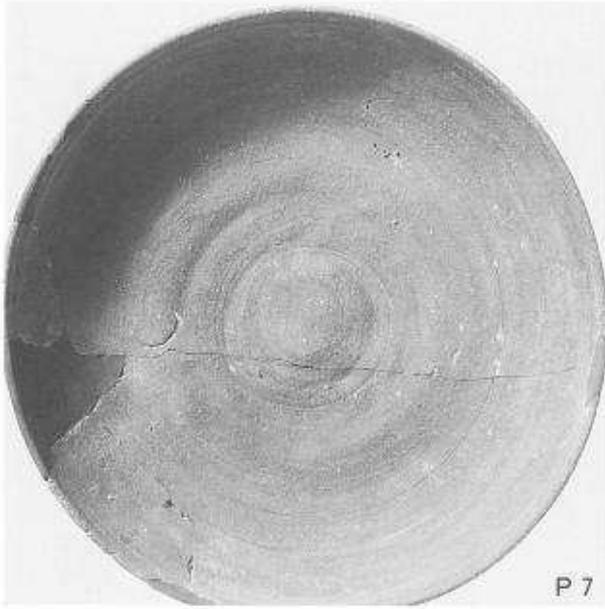
P61

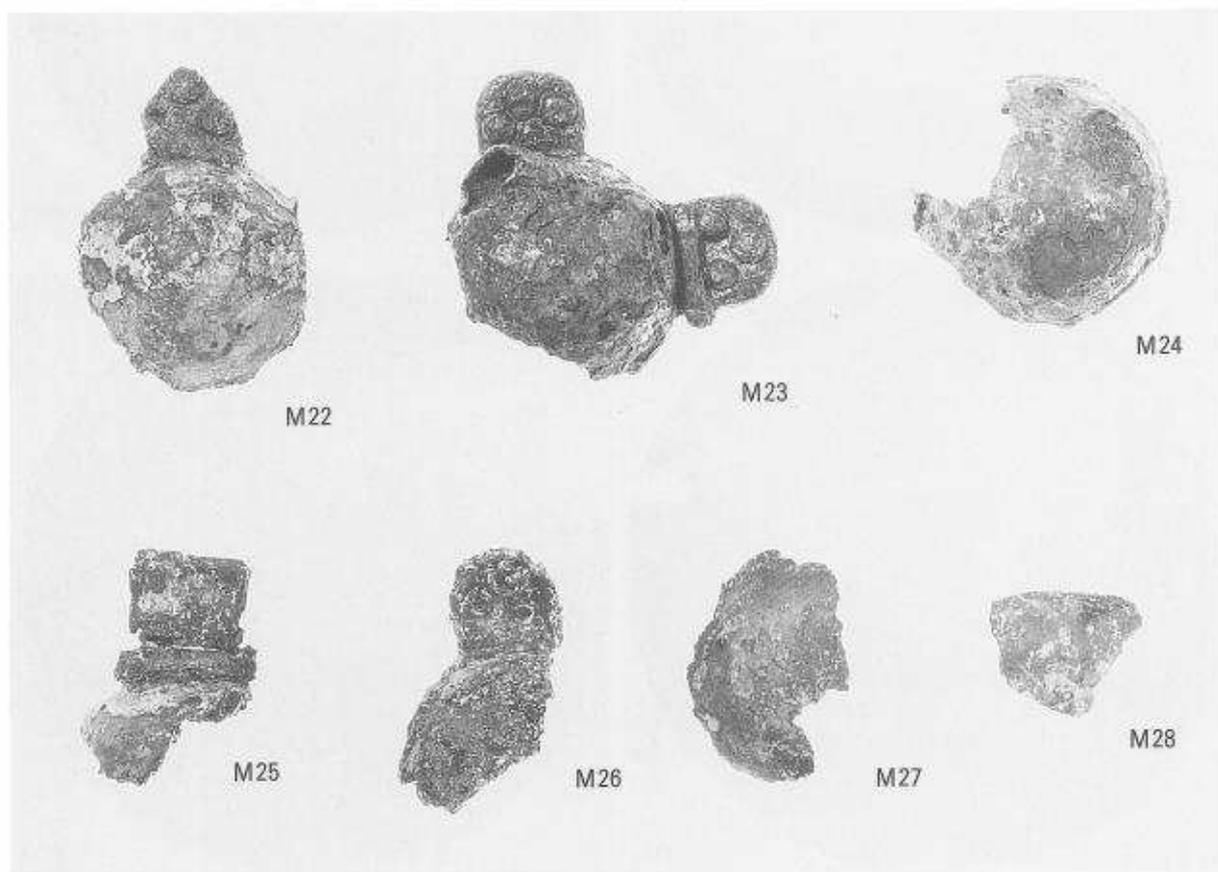
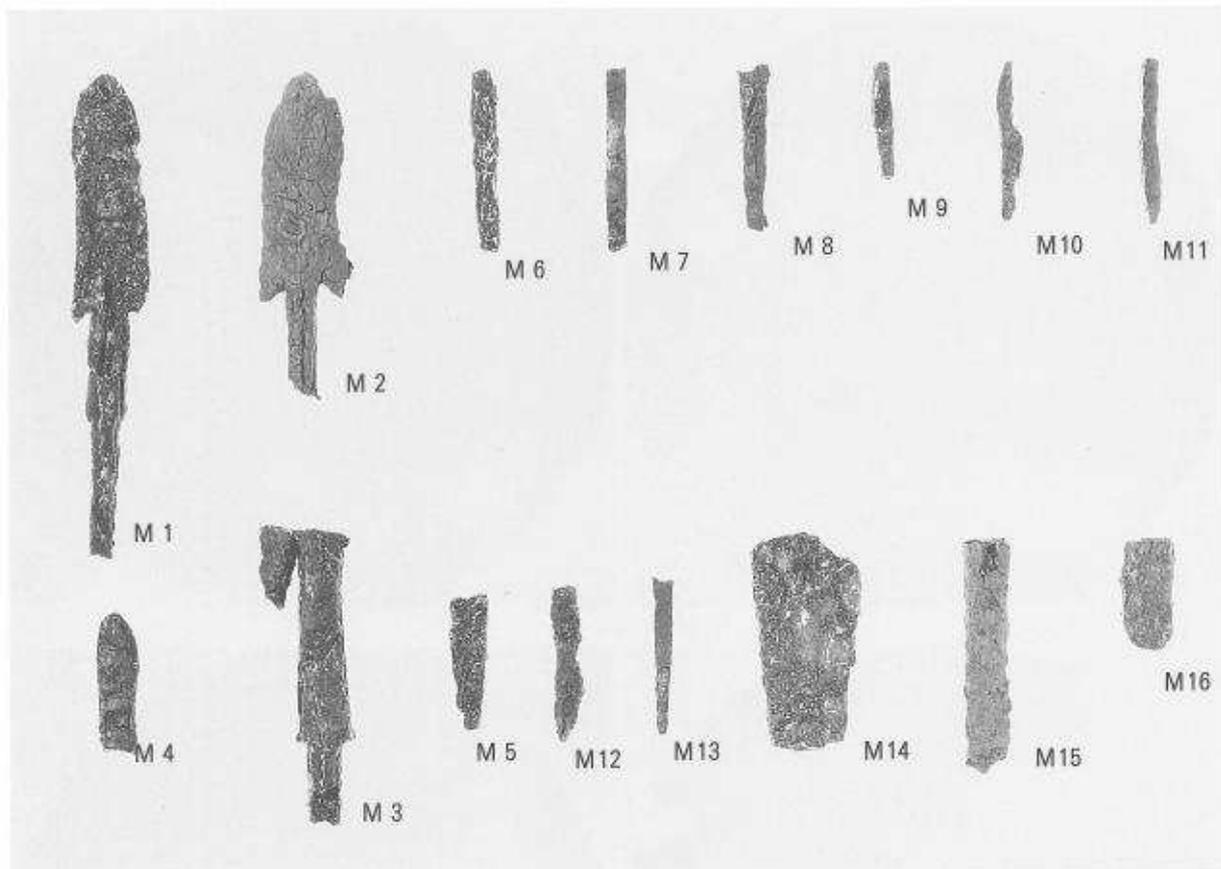


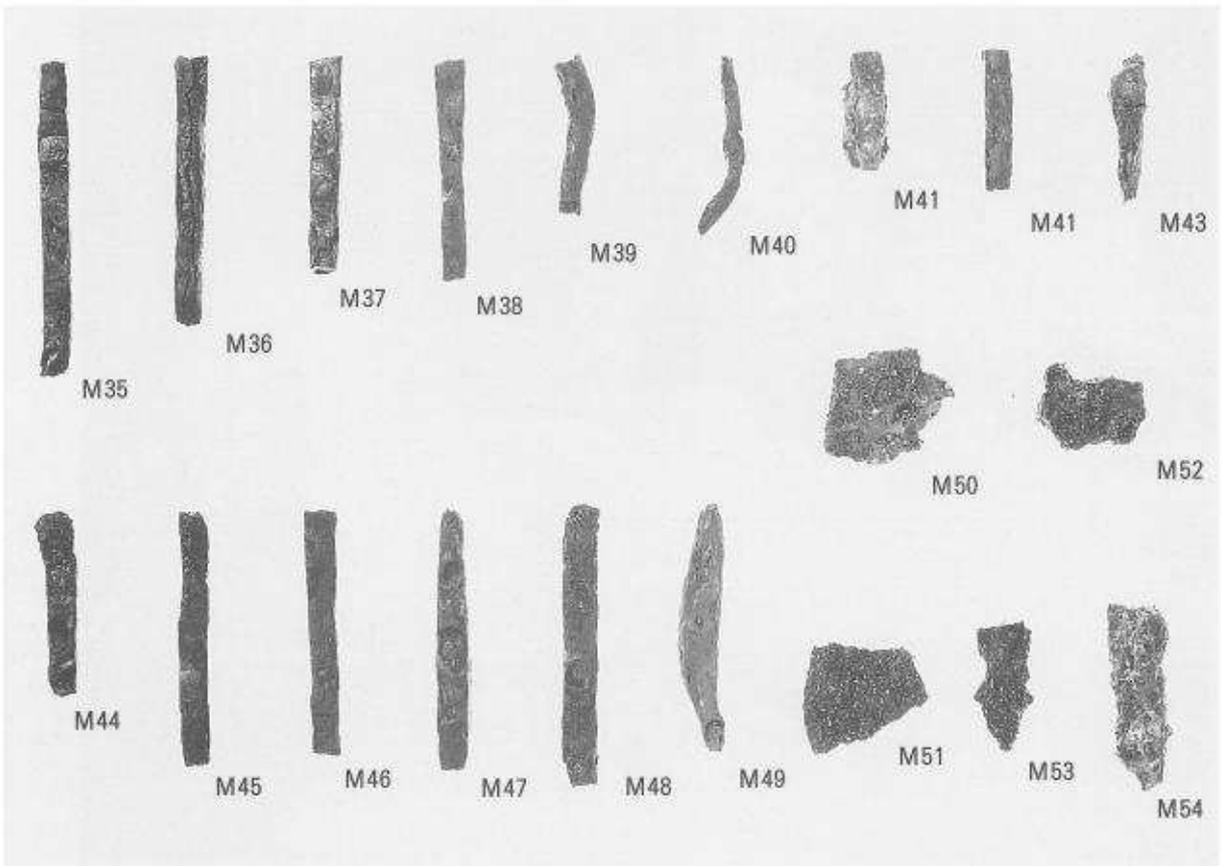
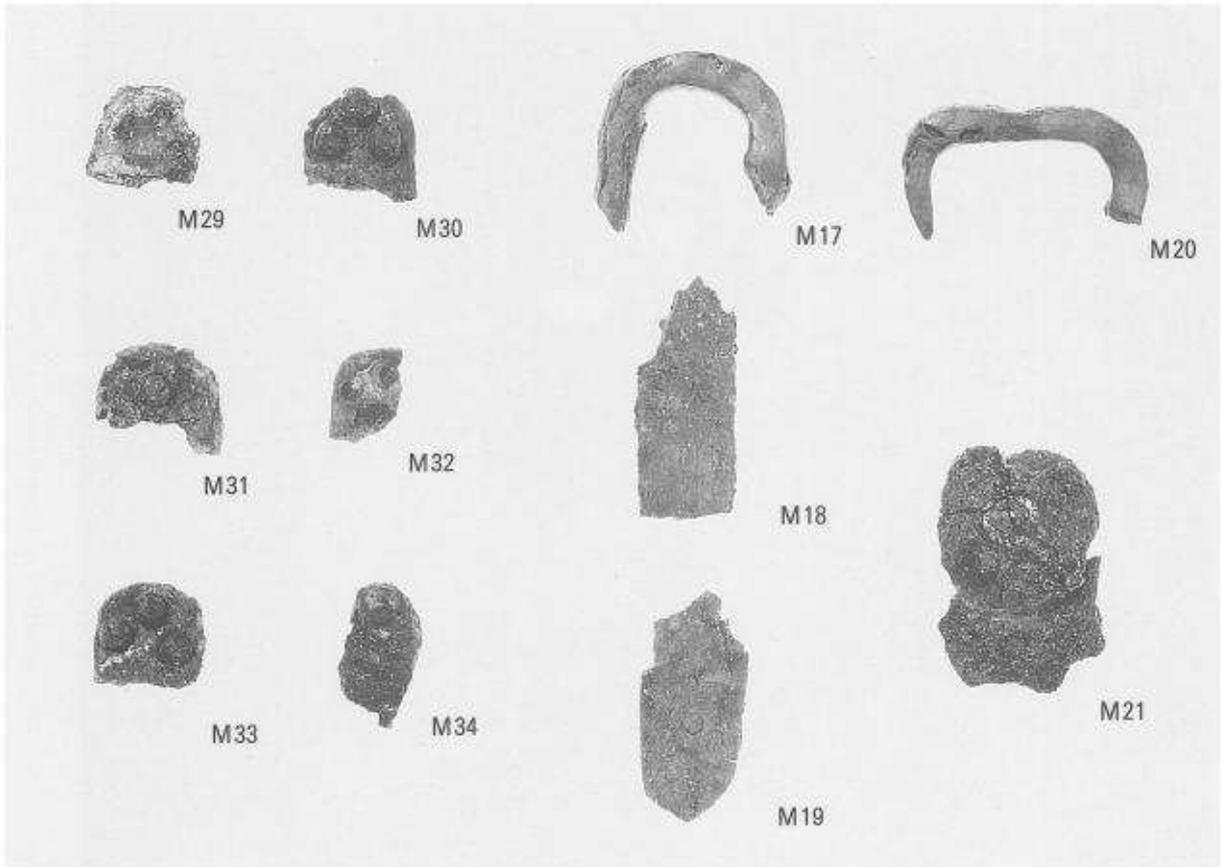








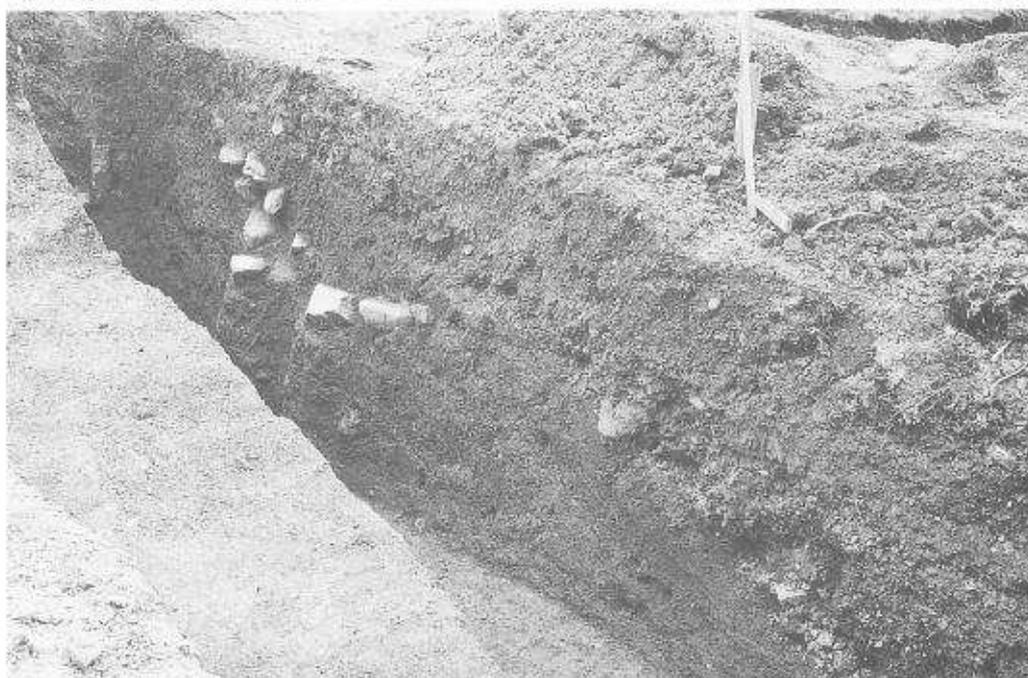


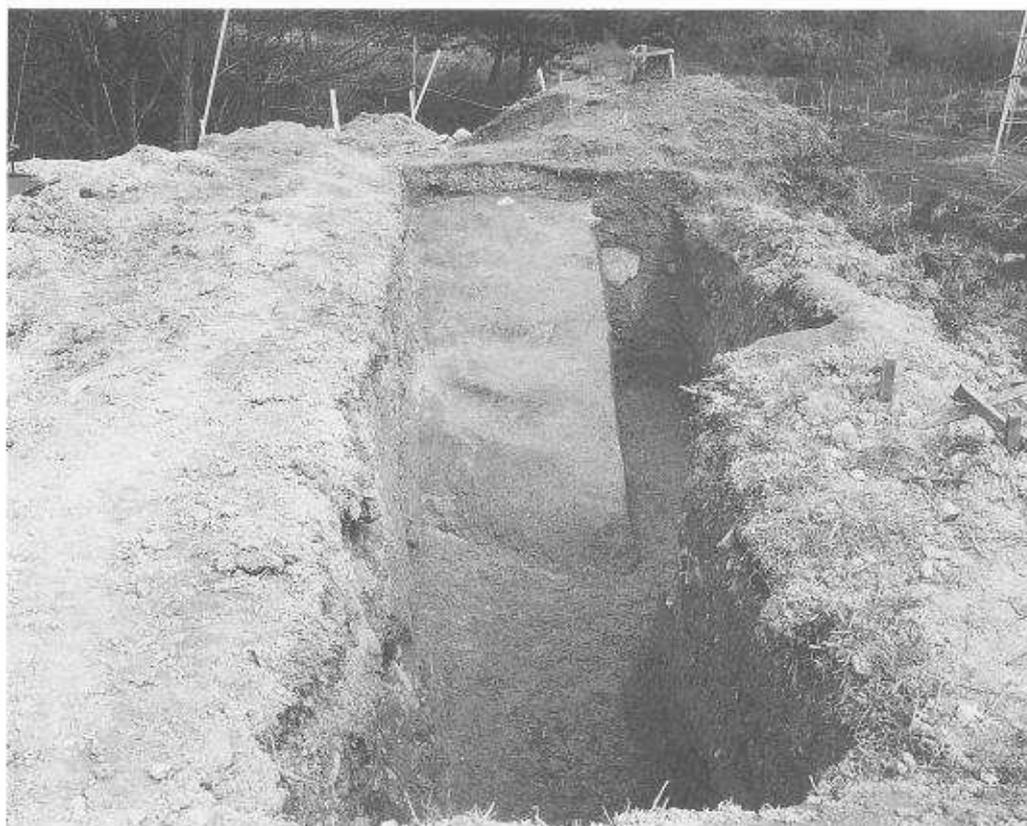


上・下 南から



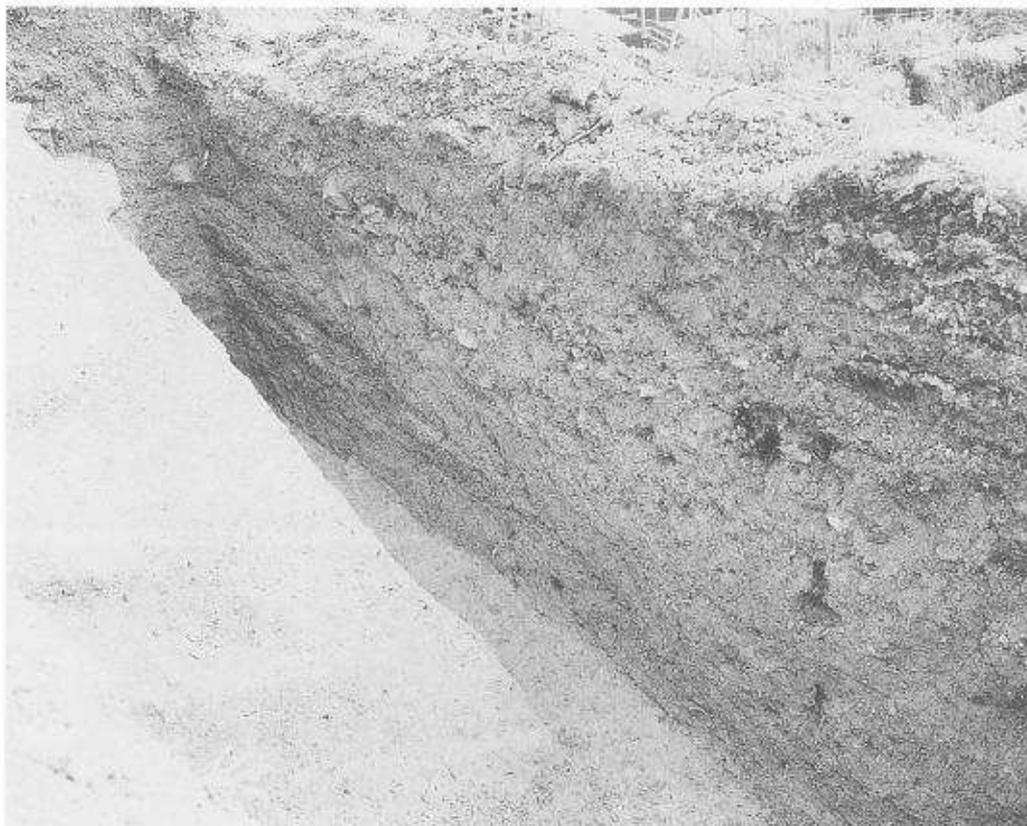
- 上 トレンチ全景（北から）
- 中 盛土断面（北東から）
- 下 周濠（東から）





上 墳丘検出状況（西から）

下 盛土断面（北西から）





東側壁



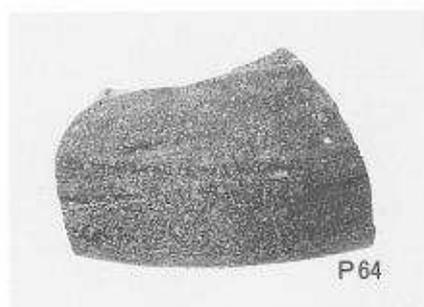
奥壁及び西側壁



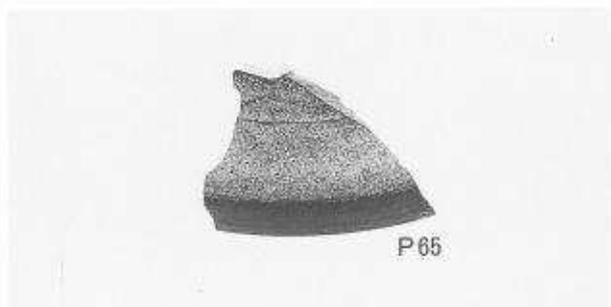
玄門部（東側）



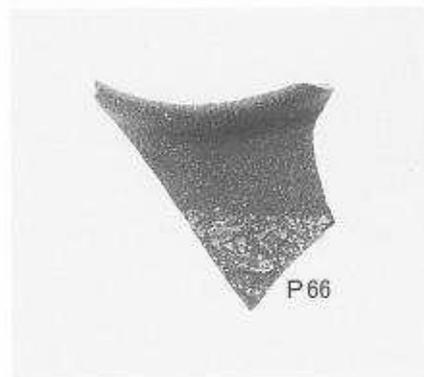
玄室天井石



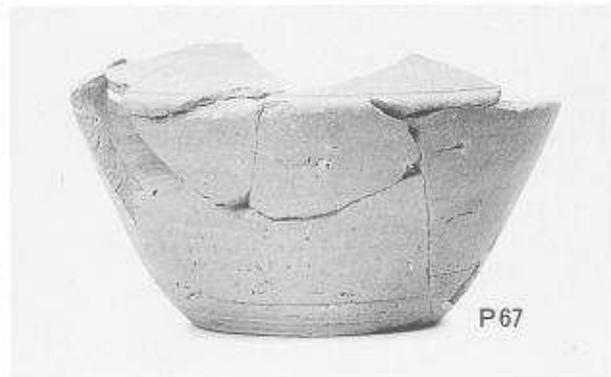
P64



P65



P66



P67



兵庫県文化財調査報告 第152冊

1996年3月31日 発行

飾 東 2 号 墳

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告第XX冊—

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2-1-5

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5-10-1

印刷 交友印刷株式会社

〒652 神戸市兵庫区水木通9丁目1-34

TEL 078 (576) 6161
